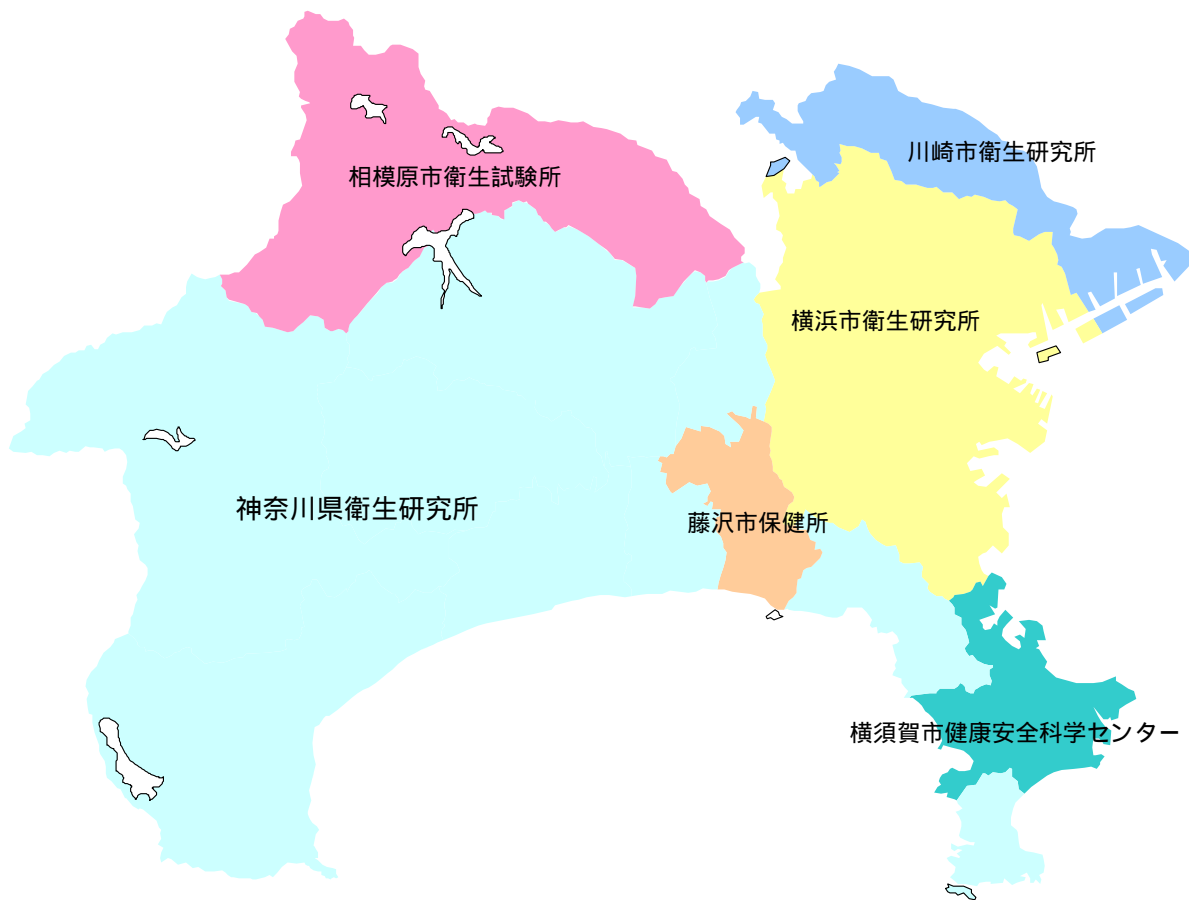


平成 18 年

神奈川県感染症



平成 19 年 11 月

はじめに

近年、国際的な交流はめざましく、ウエストナイル熱、SARS、鳥インフルエンザなどの新興感染症、結核やマラリアなどの再興感染症対策の取組みが大きな課題となっております。

平成 18 年は、36 年ぶりとなる輸入狂犬病が横浜及び京都において、2 例立て続けに発生し、いずれの患者も亡くなっております。開発途上国においてもイヌの狂犬病がなくなること望まれますが、まずは海外の流行地へ出かける人への情報提供が徹底できるよう努めることが重要であります。

また、11 月からノロウイルスを原因とする胃腸炎や食中毒が全国的に多発し、神奈川県内においても、研究所や検査機関は検査・同定等に忙殺されました。

『神奈川県感染症』は、神奈川県衛生研究所、横浜市衛生研究所、川崎市衛生研究所、横須賀市健康安全科学センター、相模原市衛生試験所及び平成 18 年 4 月に保健所設置市となった藤沢市保健所が協力し、神奈川県における感染症発生動向調査、微生物検出情報、関連調査及び研究報告等を収録したものです。感染症対策の実施に当たり参考にして頂ければ幸いです。

最後に、『神奈川県感染症』の作成に当たり、関係各方面の多数の方々から、貴重な研究資料をご提供いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 11 月

神奈川県衛生研究所長

今井光信

目 次

はじめに

平成 18 年のトピックス

36 年ぶりに国内で発生した狂犬病輸入症例の報告 - 横浜の事例 (横浜市衛生研究所)	1
---	---

感染症発生動向調査

1 全数把握対象疾患	2
2 定点把握の対象疾患	
(1) 定点	5
(2) 週報対象疾患	6
(3) 月報対象疾患	17

ウイルス性感染症

1 インフルエンザ	
(1) 概況	21
(2) 神奈川県(横浜市及び川崎市を除く)の インフルエンザの動向(神奈川県衛生研究所)	22
(3) 横浜市のインフルエンザの動向(横浜市衛生研究所)	23
(4) 川崎市のインフルエンザの動向(川崎市衛生研究所)	27
(5) インフルエンザ感受性調査(神奈川県衛生研究所)	28
2 HIV/エイズ	
(1) 神奈川県の HIV/エイズの概況	30
(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)における HIV 検査の実施状況	31
3 ウイルス性感染性胃腸炎	
(1) 概況	34
(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の ウイルスによる集団胃腸炎の検査結果(神奈川県衛生研究所)	35
(3) 横浜市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果(横浜市衛生研究所)	35
(4) 川崎市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果(川崎市衛生研究所)	37
(5) 横須賀市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果(横須賀市健康安全科学センター)	37
(6) 相模原市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果(相模原市衛生試験所)	37
(7) 藤沢市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果(藤沢市保健所)	38
4 ウエストナイル熱	
(1) 概況	39
(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス(神奈川県衛生研究所)	39
(3) 横浜市のウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス(横浜市衛生研究所)	40
(4) 川崎市のウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス(川崎市衛生研究所)	41

(5) 横須賀市のウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス（横須賀市健康安全科学センター）	42
5 その他のウイルス性感染症	
(1) 日本脳炎	
ア 概況	43
イ 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の 日本脳炎感染源調査（神奈川県衛生研究所）	43
(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の 麻しん抗体保有状況（神奈川県衛生研究所）	43
(3) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の 風しん抗体保有状況（神奈川県衛生研究所）	44
細菌性感染症	
1 腸チフス・パラチフス	
(1) 概況	45
(2) 横浜市のチフス菌等のフェージ型別結果（横浜市衛生研究所）	45
(3) 川崎市のチフス菌等のフェージ型別結果(川崎市衛生研究所)	45
2 細菌性腸管系感染症	
(1) 概況	46
(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の 腸管出血性大腸菌の分離状況（神奈川県衛生研究所）	46
(3) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の 赤痢菌の検出状況（神奈川県衛生研究所）	47
(4) 搾乳体験で腸管出血性大腸菌 O157 による感染が疑われた事例（横浜市衛生研究所）	47
(5) 川崎市の下痢症患者からの腸管病原菌検出状況（川崎市衛生研究所）	48
(6) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況（横須賀市健康安全科学センター）	49
(7) 相模原市の腸管病原菌検出状況（相模原市衛生試験所）	50
(8) 藤沢市の二類及び三類感染症発症者の家族等の病原菌検出状況（藤沢市保健所）	51
3 河川等の環境調査	
(1) 概況	52
(2) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く）の 河川水腸管系病原菌調査（神奈川県衛生研究所）	52
(3) 横浜市の河川等の環境調査（横浜市衛生研究所）	54
(4) 川崎市の河川等の環境調査（川崎市衛生研究所）	55
(5) 横須賀市の河川水腸管系病原菌検索（横須賀市健康安全科学センター）	56
4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	
(1) 概況	58
(2) A群溶血性レンサ球菌のT型別成績（神奈川県衛生研究所）	58
(3) 川崎市のA群溶血性レンサ球菌咽頭炎（川崎市衛生研究所）	59
5 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く）の QFT 検査結果（神奈川県衛生研究所）	60

その他の感染症

1 つつが虫病

- (1) 概況 62
- (2) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く）で発生した
つつが虫病（神奈川県衛生研究所） 62

～資料～

- 資料1 平成18年全数把握対象の感染症 保健所別報告数 64
- 資料2 病原微生物検出状況
 - 2-1 ウイルス検出概況 65
 - 2-2 病原細菌検出概況 66
 - 2-3 ウイルス検出状況表 67
 - 2-4 病原細菌検出状況表 76
- 資料3 予防接種実施状況 80
- 資料4 神奈川県感染症機関一覧表 82

平成 18 年のトピックス

36 年ぶりに国内で発生した狂犬病輸入症例の報告 - 横浜の事例

横浜市衛生研究所

2006 年 11 月、36 年ぶりとなる輸入狂犬病が京都、横浜で相次いで 2 例立て続けに発生した。本邦での狂犬病は 1957 年以降には発生しておらず、輸入症例でも 1970 年のネパールでイヌに咬まれて死亡した症例のみである。横浜市の事例について、簡単に報告する。

65 歳男性で、貿易業のためフィリピンに滞在中の 2006 年 8 月末にマニラ近郊で友人の飼いイヌに右手首を咬まれた。暴露前も暴露後も狂犬病ワクチン接種を受けなかった。11 月 15 日より倦怠感と右肩甲骨痛が出現し、11 月 18 日より飲水が困難となり 20 日に入院した。

1 週間前に京都で輸入狂犬病事例が報道され、狂水症、狂風発作等の症状もあったために、当初から狂犬病を疑い、その診断については血清、尿、唾液、髄液を検体として国立感染症研究所に依頼した。入院翌日の 21 日に唾液の RT-PCR により狂犬病ウイルス遺伝子が検出され、狂犬病と確定診断した。治療の甲斐なく、12 月 7 日に多臓器不全により永眠した。

今回の一連の流れの中で、衛生研究所の役割としては、国立感染症研究所への行政依頼検査のために検査依頼と検体採取についての橋渡しをした程度である。なお、京都の事例を含めた今回の狂犬病についての詳細については、「病原微生物検出情報（月報）」（Vol.28 No.3(No.325) 2007 年 3 月発行：国立感染症研究所感染症情報センター）に記載してある。

（野口有三、宇宿秀三、熊崎真琴、佐々木一也）

感染症発生動向調査

(編集事務局)

1 全数把握対象疾患

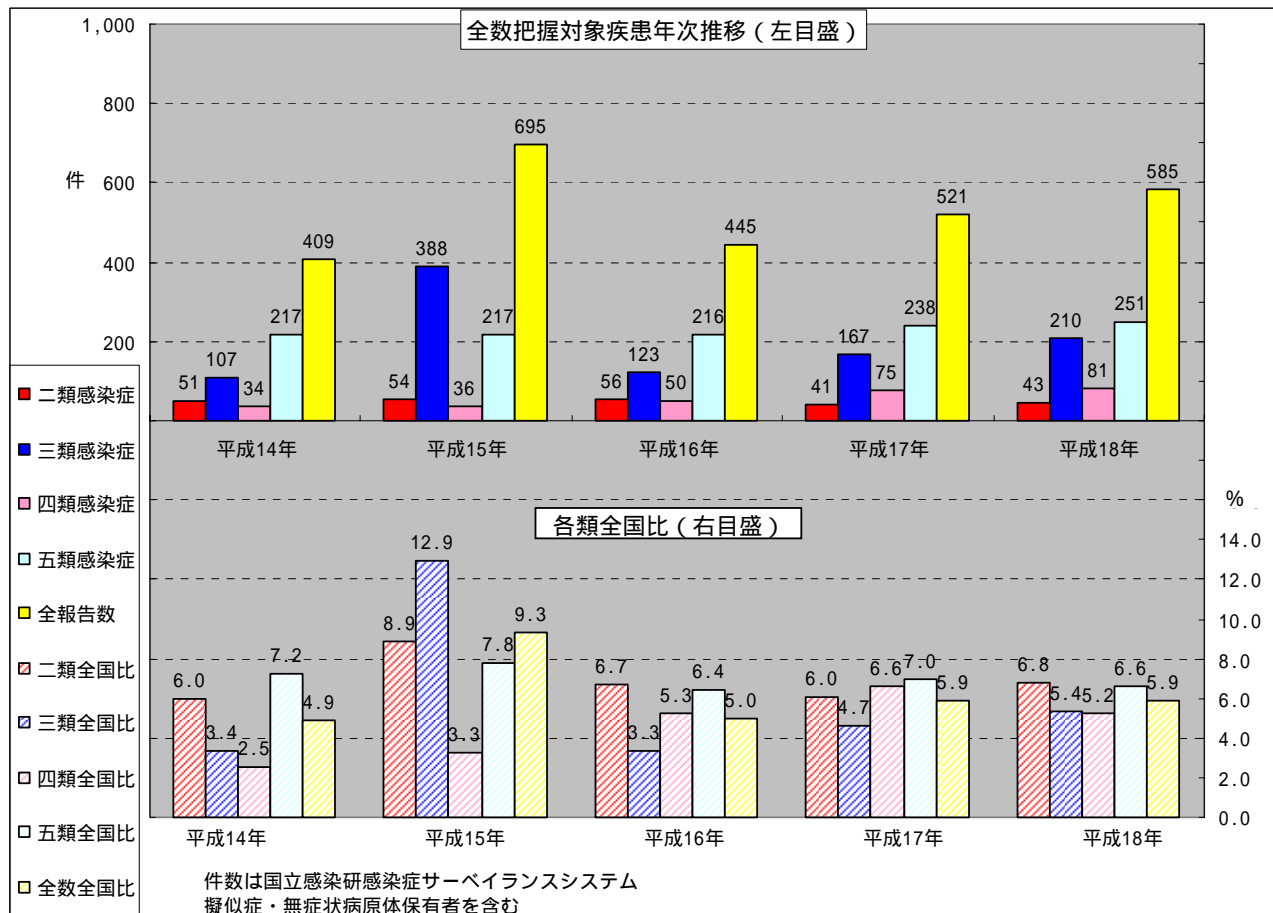
平成 18 年に県内で報告のあった全数把握対象疾患は前年より増加し、585 件であった。一類感染症は平成 18 年も報告がなかった。

類別では、五類感染症が 251 件、三類感染症 210 件、四類感染症 81 件、二類感染症 43 件であった。

平成 18 年報告総数の全国に占める割合は、前年と同様の 5.9% であった。最も割合の高かった類は二類感染症で 0.8 ポイント増加し 6.8% を占めた。

全数把握対象疾患の年別推移等は、資料 1「平成 18 年全数把握対象の感染症保健所別報告数」(資料 1 67 ページ) を参照。

図 1 全数把握対象疾患の推移



《一類感染症》

一類感染症の報告はなかった。

《二類感染症》

平成 18 年の二類感染症の報告数は、前年比 2 件増の 43 件で、パラチフスが減ったものの腸チフスが大幅に増加した。横浜市が全体の半数を占めた。

表1 二類感染症報告数(件)

疾患名	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年							全国
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)	(藤沢市)	(神奈川県を除く)	
コレラ	3	3	7	6	5	2	1		1		1	44
細菌性赤痢	40	38	37	27	27	10	1	2	1	2	11	489
腸チフス	4	3	6	2	10	6	3			1		72
パラチフス	4	10	6	6	1	1						26
合計	51	54	56	41	43	19	5	2	2	3	12	631

件数は国立感染研感染症サーベイランスシステム
擬似症・無症状病原体保有者を含む

《三類感染症》

三類感染症(腸管出血性大腸菌感染症)は2年連続で増加し210件であった。横浜市及び神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)で多数を占めた(表2)。全国比でも前年の4.7%から5.4%へと増加した。

表2 三類感染症報告数(件)

	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年							全国
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)	(藤沢市)	(神奈川県を除く)	
腸管出血性大腸菌感染症	107	388	123	167	210	64	33	5	10	31	67	3,924

件数は国立感染研感染症サーベイランスシステム
擬似症・無症状病原体保有者を含む

《四類感染症》

平成18年に報告のあった疾患は、前年より2疾患減少し9疾患であったが、報告数は6件増の81件であった。最も報告の多かった疾患はレジオネラ症25件で、続いてつつが虫病15件であった。レジオネラ症及びA型肝炎は増加傾向にある。

地域別では神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)が30件、横浜市が29件であった(表3)。

表3 四類感染症報告数(件)

疾患名	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年							全国
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)	(藤沢市)	(神奈川県を除く)	
15 E型肝炎				2	8		3	1	1		3	70
16 ウエストナイル熱(脳炎を含む)				1								
17 A型肝炎			8	11	13	7	2			1	3	319
20 オウム病		5	2	1	2	2						23
22 Q熱				1								2
23 狂犬病					1	1						2
25 コクシジオイデス症			1	2								2
29 つつが虫病	6	10	19	22	15						15	416
30 デング熱	10	2	5	5	7	4		1			2	58
39 マラリア	11	12	8	10	9	7			1		1	62
41 ライム病	3	1			1	1						12
43 レジオネラ症	4	6	6	19	25	7	9	2	1		6	514
44 レプトスピラ症			1	1								24
合計	34	36	50	75	81	29	14	4	3	1	30	1,584

件数は国立感染研感染症サーベイランスシステム

擬似症・無症状病原体保有者を含む

全国合計値は掲載疾病以外の疾病も計上

《五類感染症》

平成18年に報告のあった疾患は、前年と同じ12疾患であったが、報告数は13件増加し251件であった。

疾患別では最多の疾病は後天性免疫不全症候群で前年より14件増加し83件、続いてアメーバ赤痢が17件増の80件であった。アメーバ赤痢は増加傾向にある。

表4 五類感染症報告数(件)

疾患名	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年							全国
	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	神奈川県	(横浜市)	(川崎市)	(横須賀市)	(相模原市)	(藤沢市)	(神奈川県を除く)	
45 アメーバ赤痢	42	48	52	63	80	53	6	1	6	6	8	756
46 ウイルス性肝炎	47	32	14	20	14	3		2	3	3	3	280
47 急性脳炎		1	2	4	4				3	1		166
48 クリプトスポリジウム症				2	2	2						18
49 クロイツフェルト・ヤコブ病	13	4	11	14	10	1	1	2	2		4	179
50 劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3	1	5	3	5	2	1				2	106
51 後天性免疫不全症候群	70	85	86	69	83	31	19	1	10	2	20	1,351
52 ジアルジア症	11	20	9	24	10	6	1	1		1	1	88
53 髄膜炎菌性髄膜炎	2	5	3	1	3		1	1	1			14
54 先天性風しん症候群			1									
55 梅毒	24	10	24	27	22	5	6	3	1	1	6	644
56 破傷風	3	2	4	3	7	2			2	2	1	117
58 バンコマイシン耐性腸球菌感染症	2	9	5	8	11	4	2		1		4	82
合計	217	217	216	238	251	109	37	11	29	16	49	3,801

件数は国立感染研感染症サーベイランスシステム

擬似症・無症状病原体保有者を含む

全国合計値は掲載疾病以外の疾病も計上

2 定点把握の対象疾患

(編集事務局)

(1) 定点

定点把握の対象疾患の情報は、予め指定した医療機関から報告され、その医療機関のことを定点といい、定点の数は人口に応じて決められている。定点は5種類あり、報告してもらう疾患が分かっている。神奈川県内の定点の状況は下表のとおりである。

	定 点 数			
	県域	横浜市	川崎市	計
インフルエンザ定点	142	139	54	335
小児科定点	91	84	33	208
眼科定点	21	15	7	43
基幹定点	6	3	2	11
STD 定点	27	26	7	60
計	287	267	103	657

インフルエンザ定点

対象疾患名：インフルエンザ（高病原性鳥インフルエンザを除く）

小児科定点

対象疾患名：RS ウイルス・咽頭結膜熱・突発性発しん・A群溶血性レンサ球菌咽頭炎・百日咳・感染性胃腸炎・風しん・水痘・ヘルパンギーナ・手足口病・伝染性紅斑・麻しん（成人麻しんを除く）・流行性耳下腺炎

眼科定点

対象疾患名：急性出血性結膜炎・流行性角結膜炎

基幹定点

対象疾患名：クラミジア肺炎（オウム病を除く）・細菌性髄膜炎・マイコプラズマ肺炎・成人麻しん・無菌性髄膜炎・ペニシリン耐性肺炎球菌感染症・メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症・薬剤耐性緑膿菌感染症

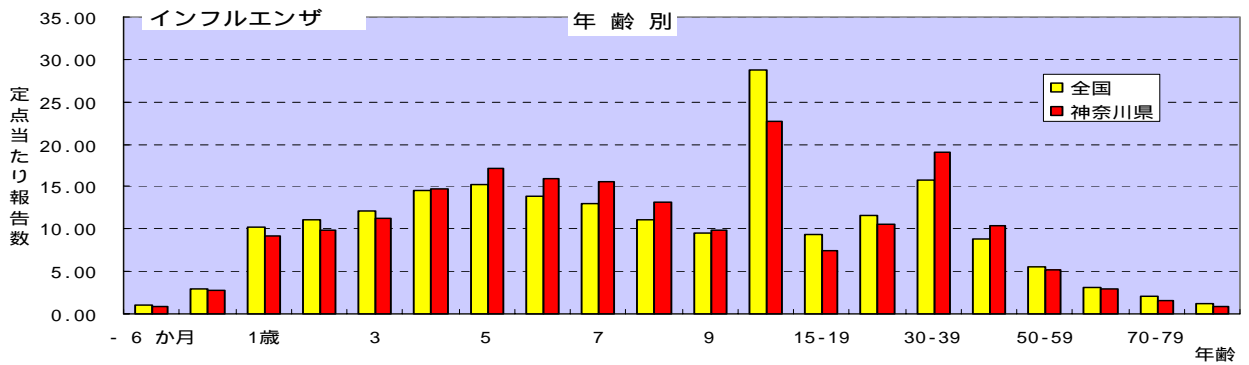
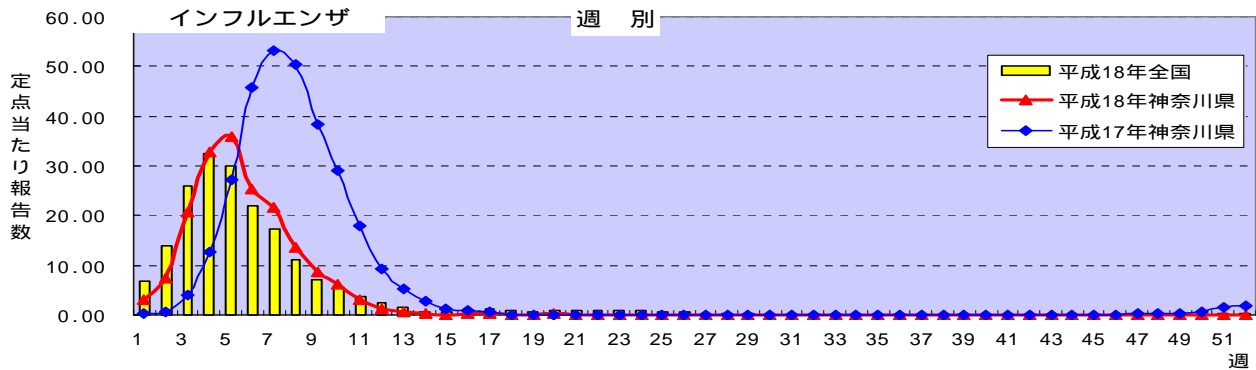
S T D 定点

対象疾患名：性器クラミジア感染症・性器ヘルペスウイルス感染症・尖圭コンジローマ・淋菌感染症

(2) 週報対象疾患(神奈川県全県)

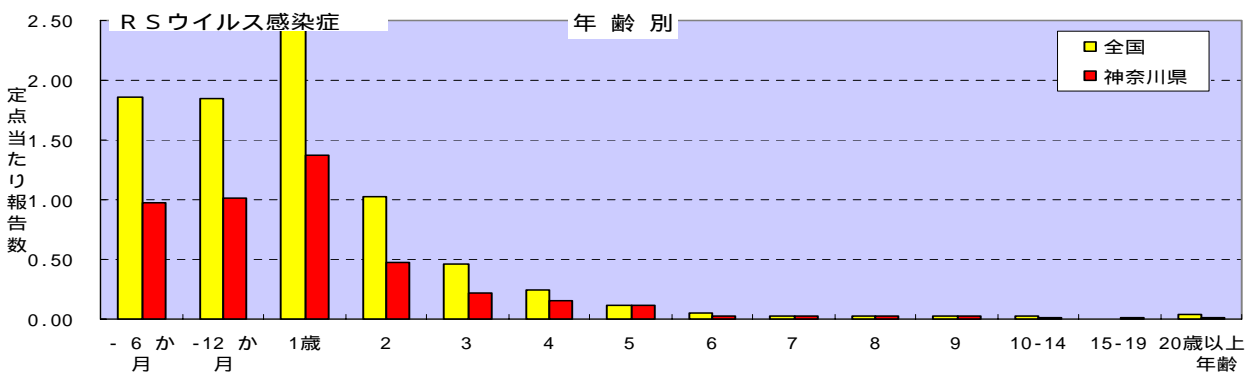
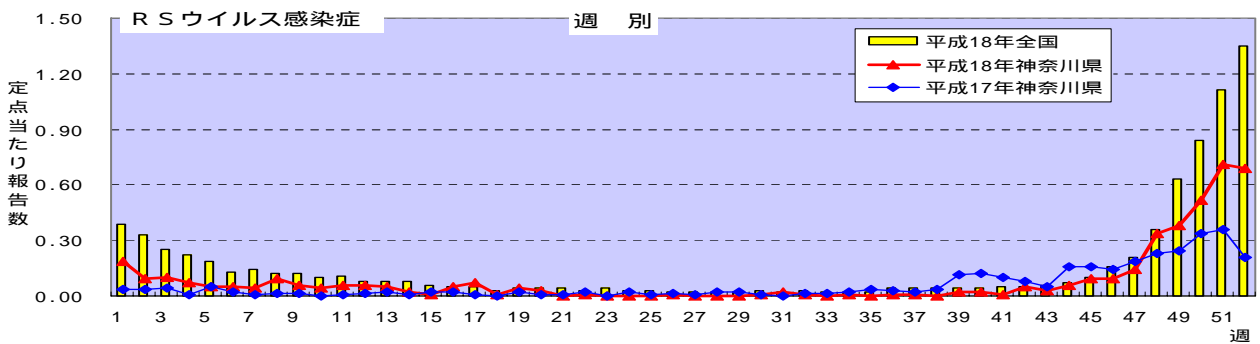
インフルエンザ

平成18年は全国的にも、全県的にも低調であった。年齢別では10~14歳が多かった。



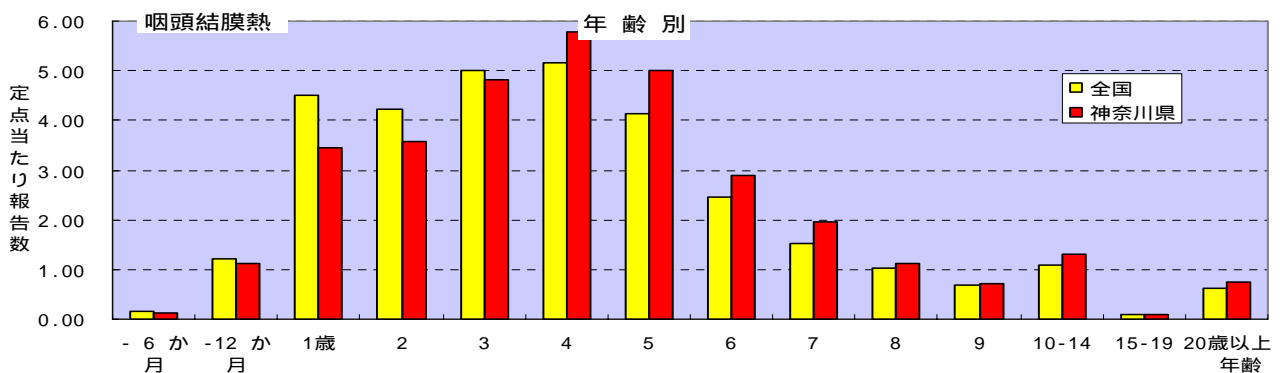
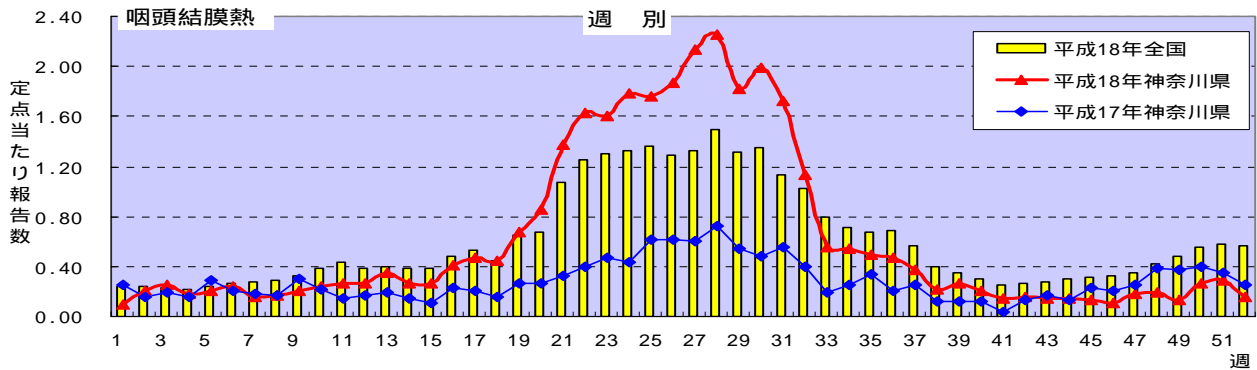
RSウイルス感染症

全国的には52週がピークであったが、神奈川県では51週であった。年齢別では1歳が最も多かった。



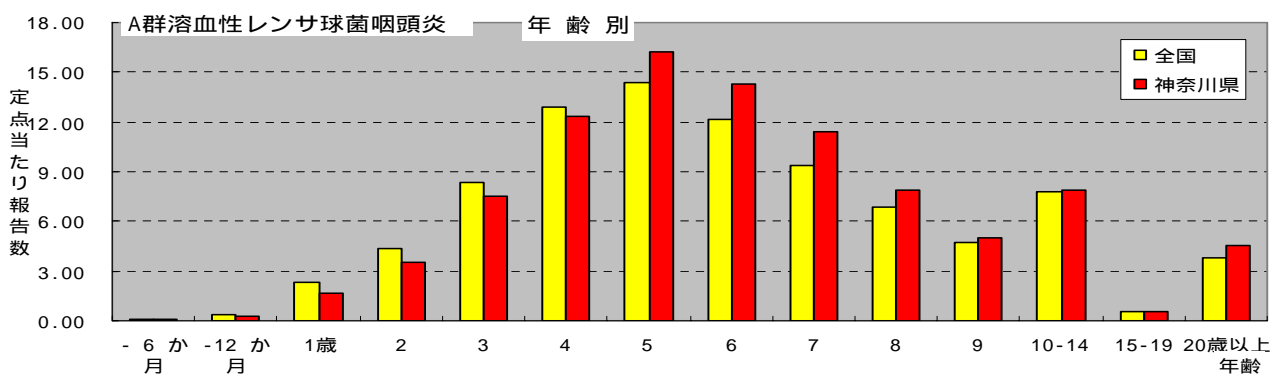
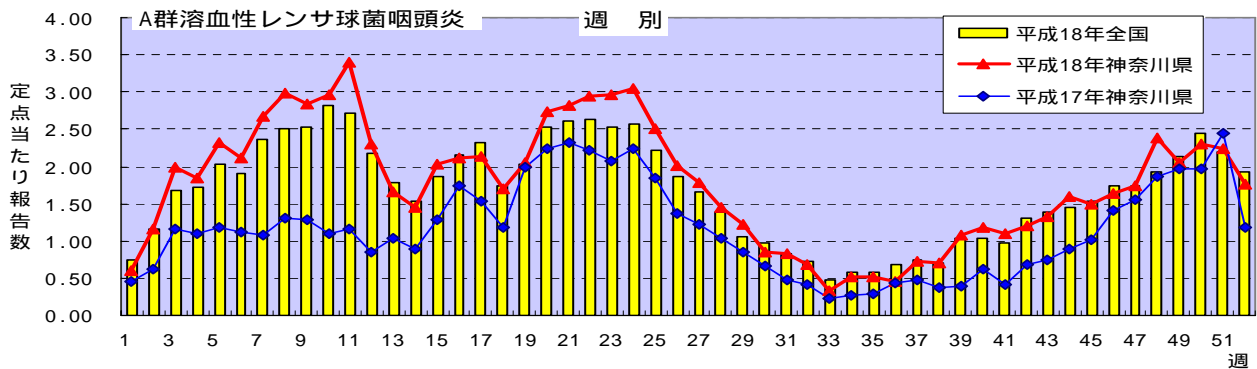
咽頭結膜熱

神奈川県は、20週から32週までは全国よりも高く推移した。年齢では3～5歳が多かった。



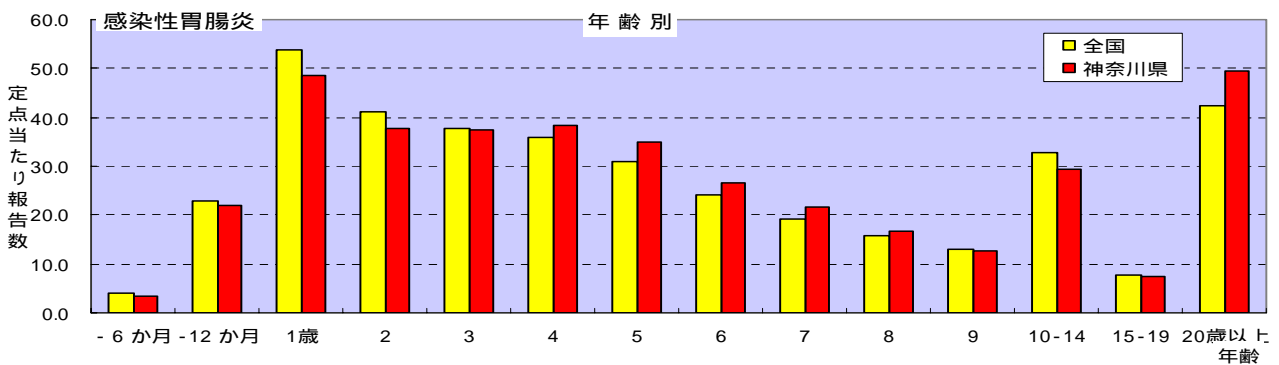
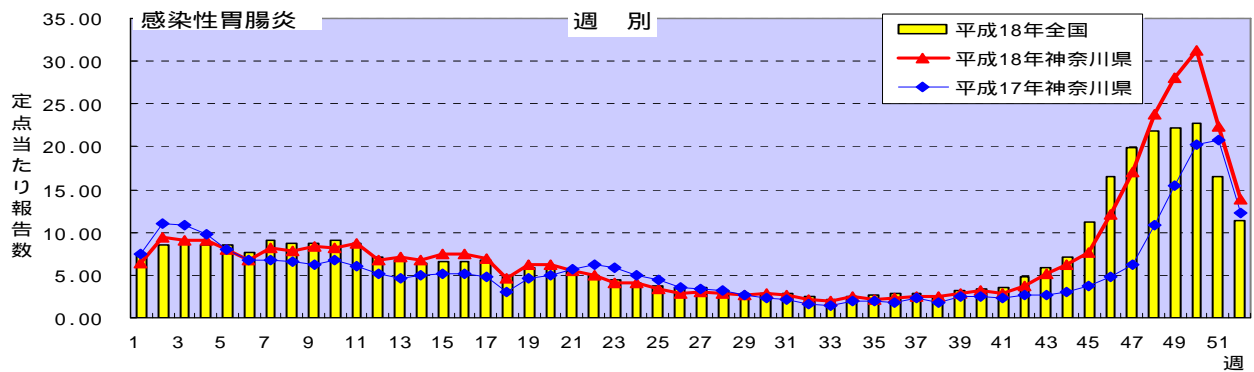
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成17年よりも多くの報告があった。年齢では5歳が最も多かった。



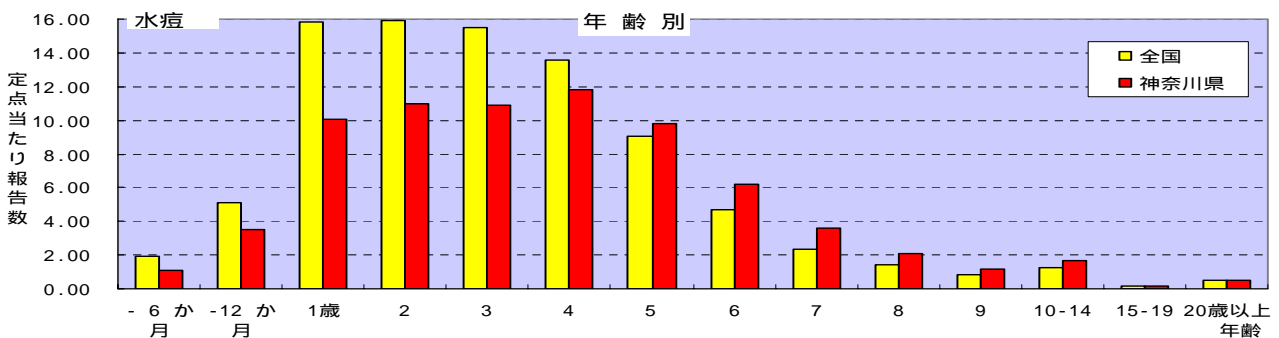
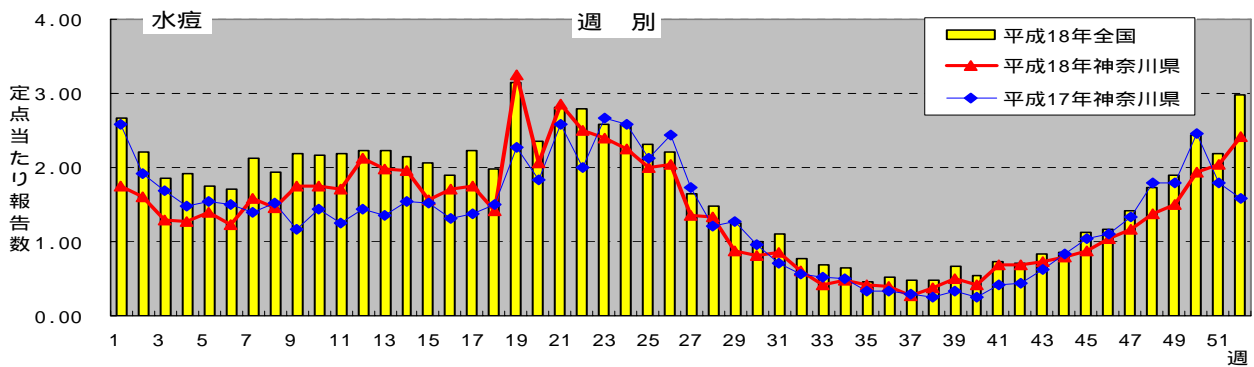
感染性胃腸炎

平成 18 年は 11 月からノロウイルスが流行したことから、多くの報告があった。年齢では 1 歳が多かった。



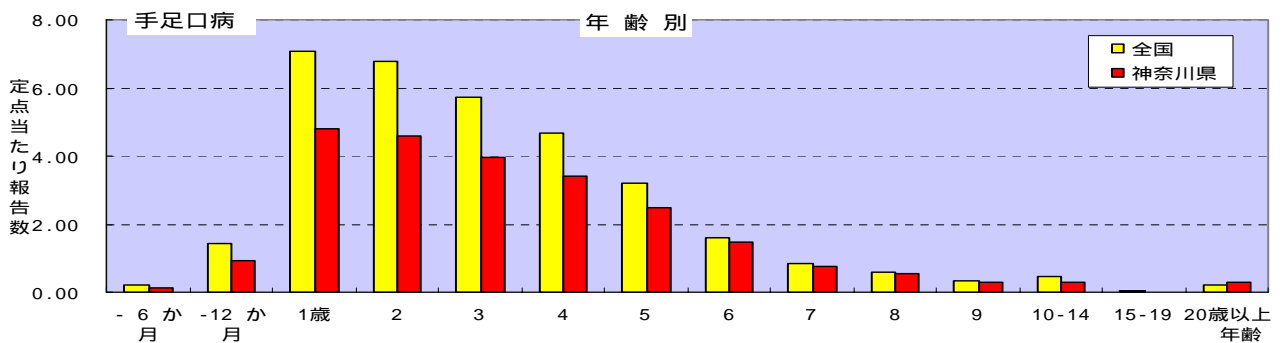
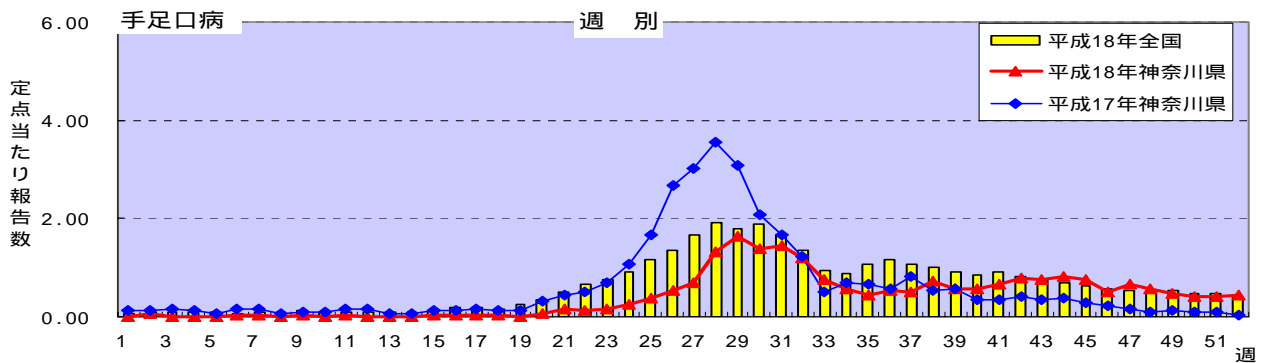
水痘

平成 17 年とほぼ同様の推移であった。年齢は 4 歳以下で全国よりも報告が少なかった。



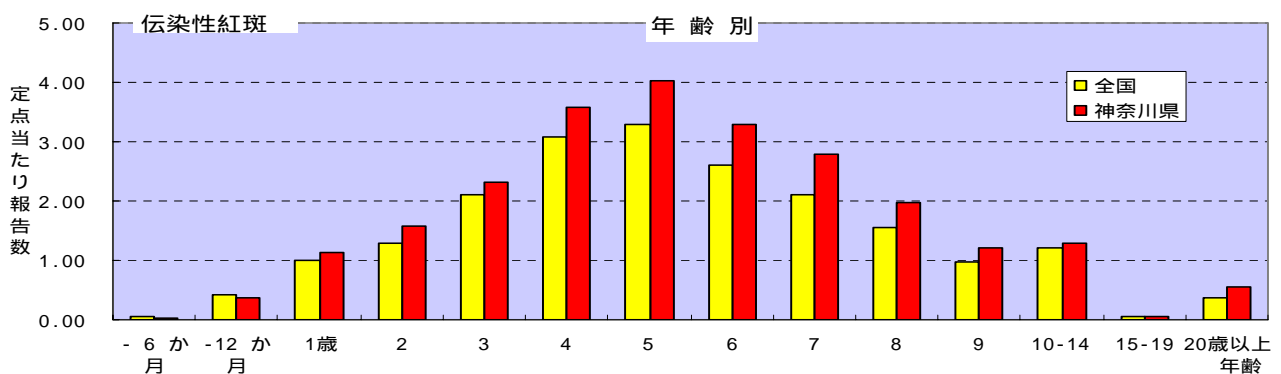
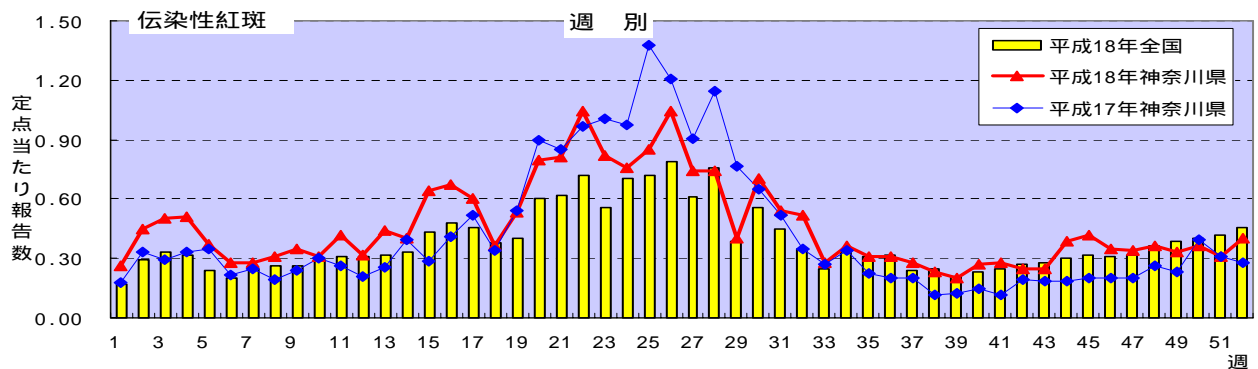
手足口病

32 週までは前年を下回ったが、39 週以降は前年を上回る報告があった。年齢では 1 歳から 4 歳が多かった。



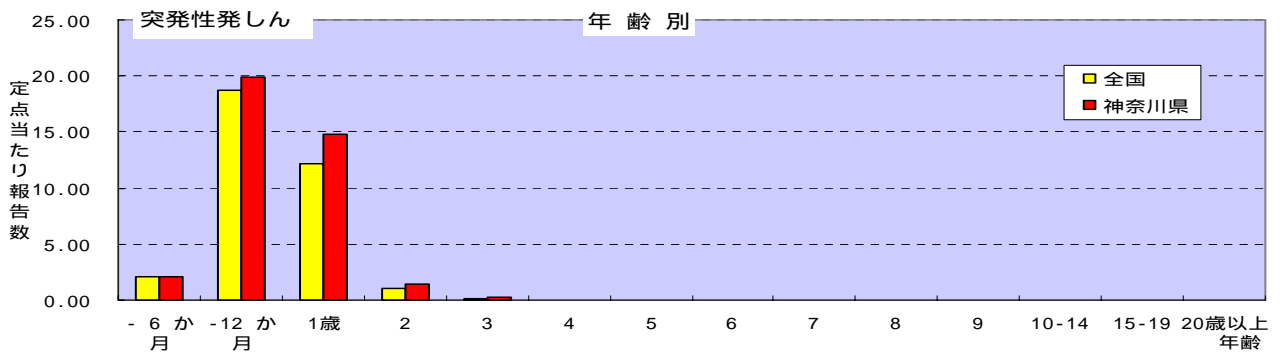
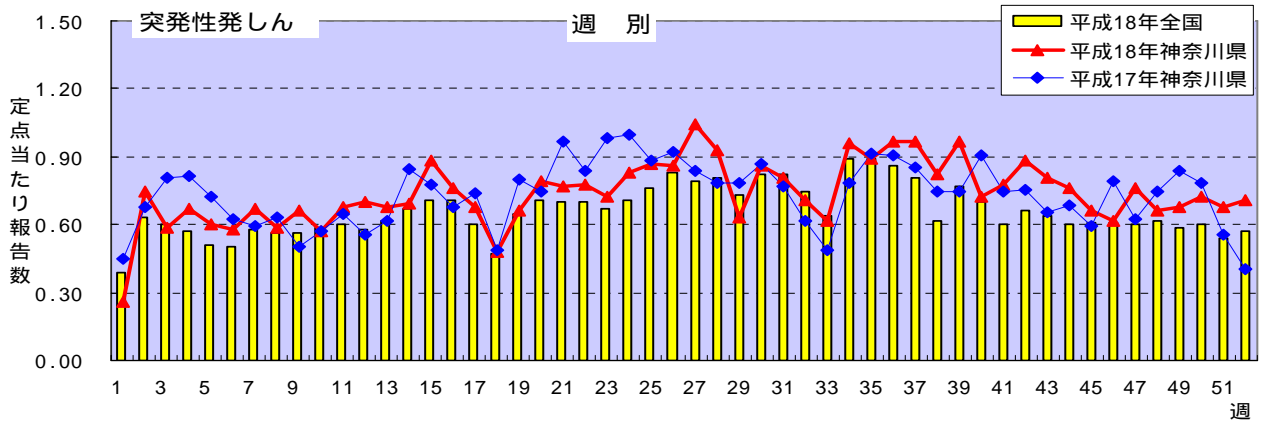
伝染性紅斑

23 週から 30 週を除いて前年を上回って推移した。年齢では 5 歳が最も多かった。



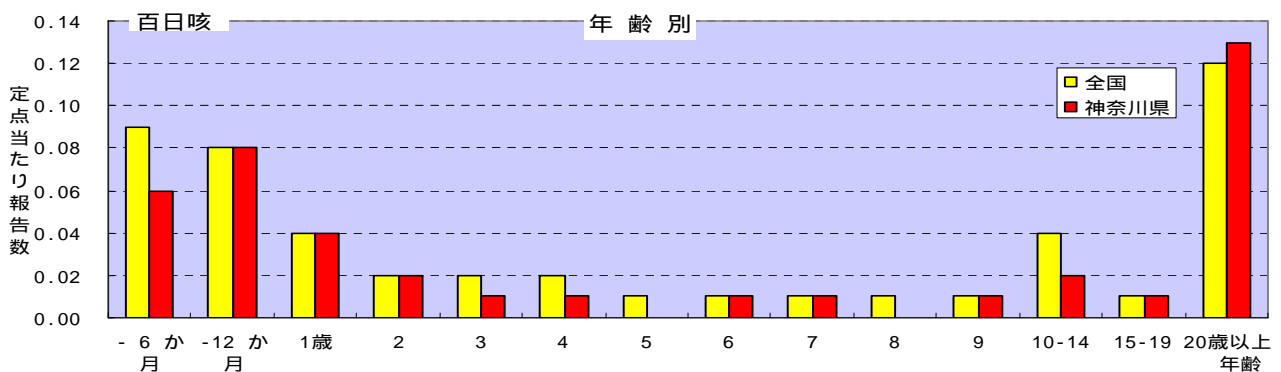
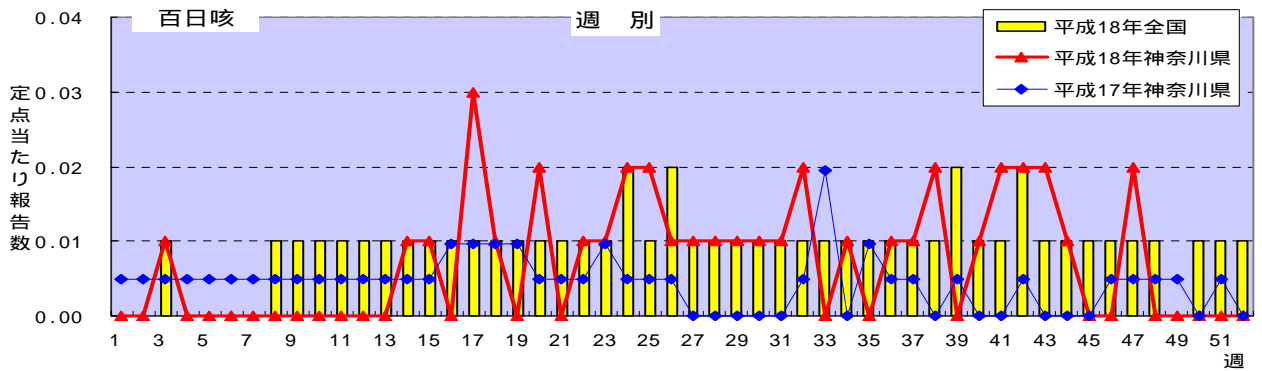
突発性発しん

ほぼ前年並みの傾向であった。年齢は7～12月が最も多かった。



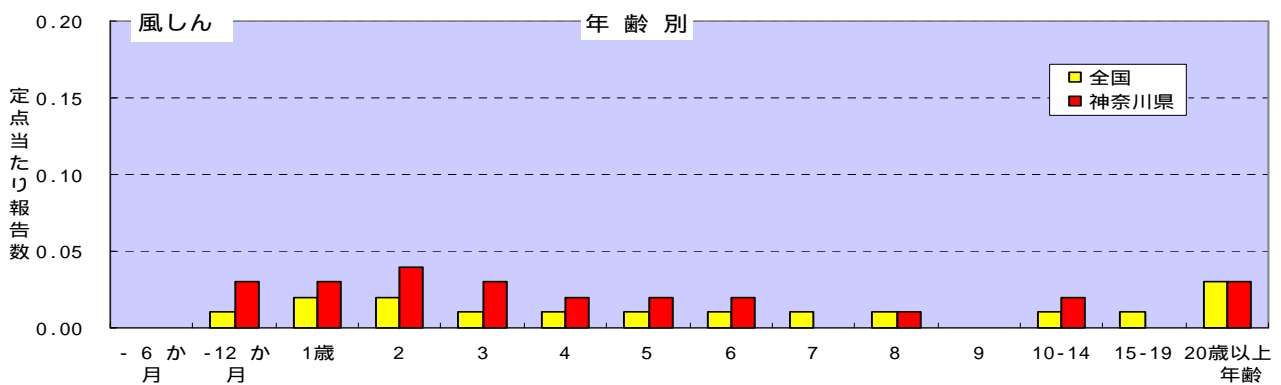
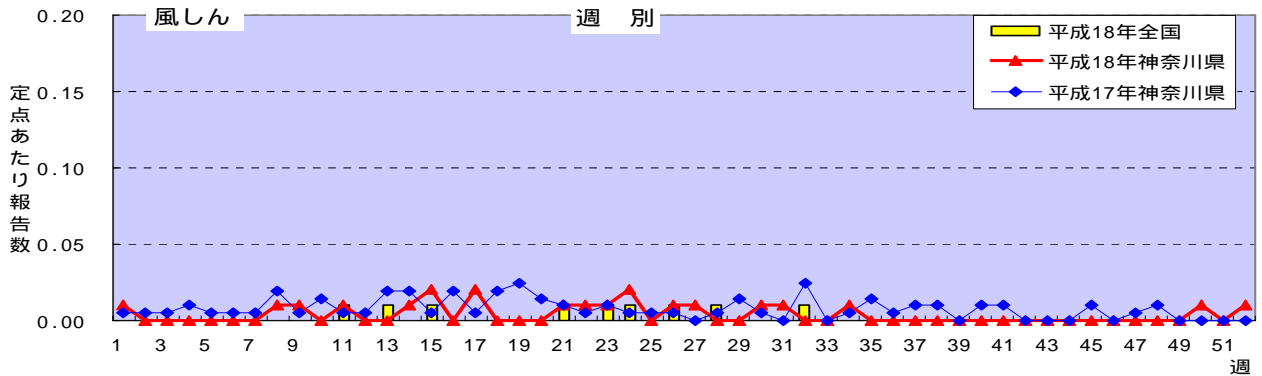
百日咳

年間を通じて散発的は報告があった。年齢では12月未満が多かった。



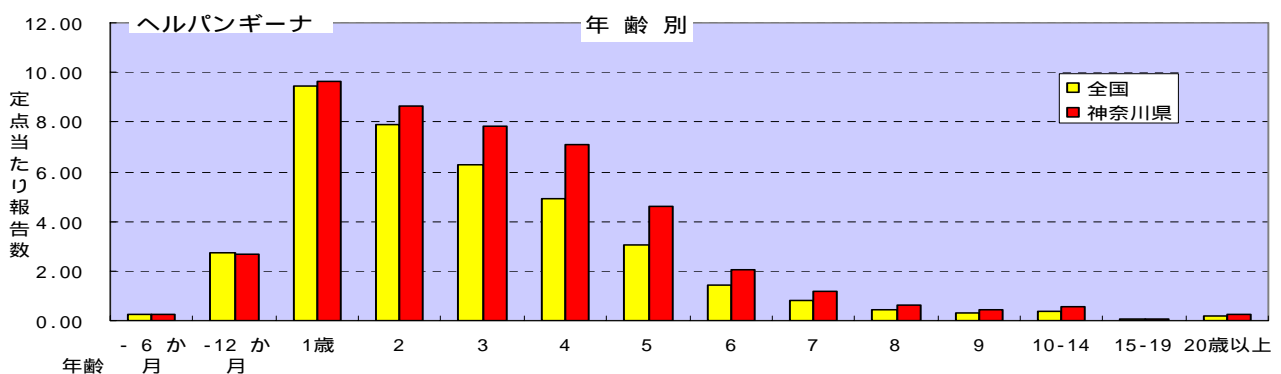
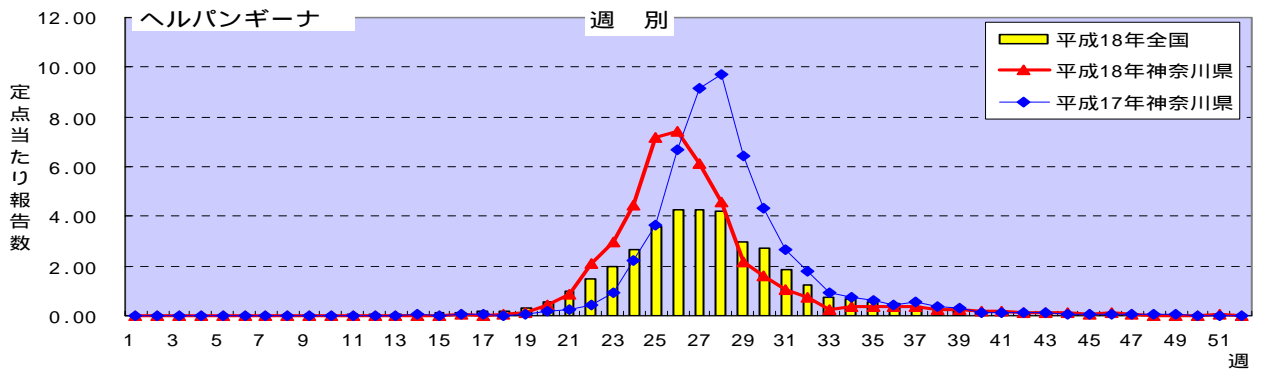
風しん

低位で推移した。年齢ではほぼ全年齢層で報告があった。



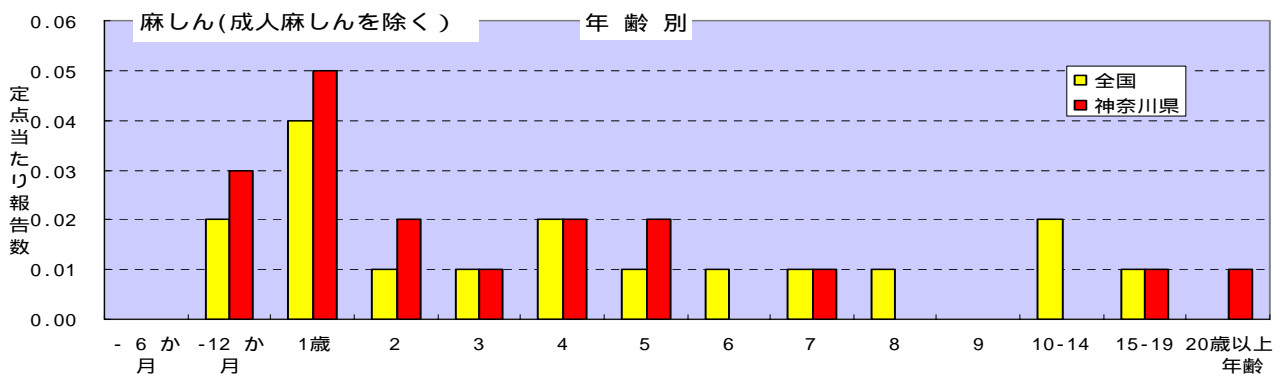
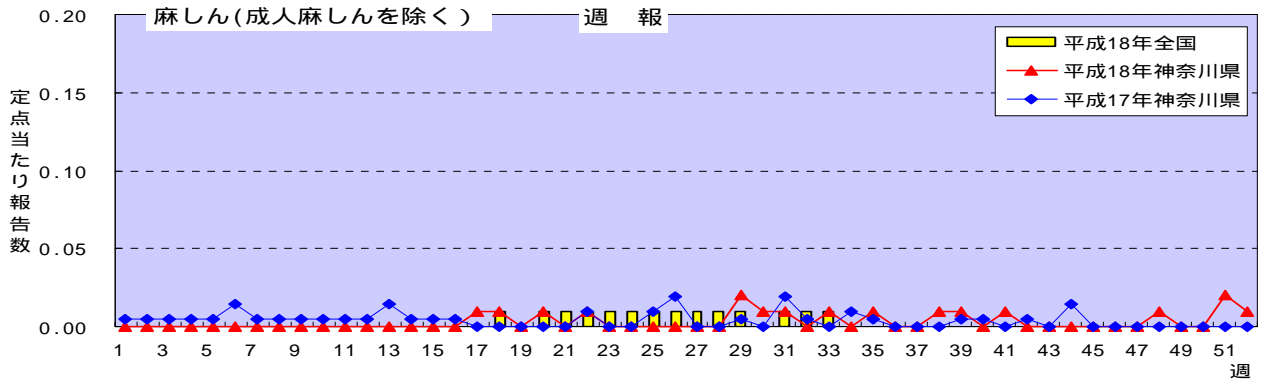
ヘルパンギーナ

前年よりも低位で推移したが、報告のピークは2週ほど早まった。年齢では1歳が最も多かった。



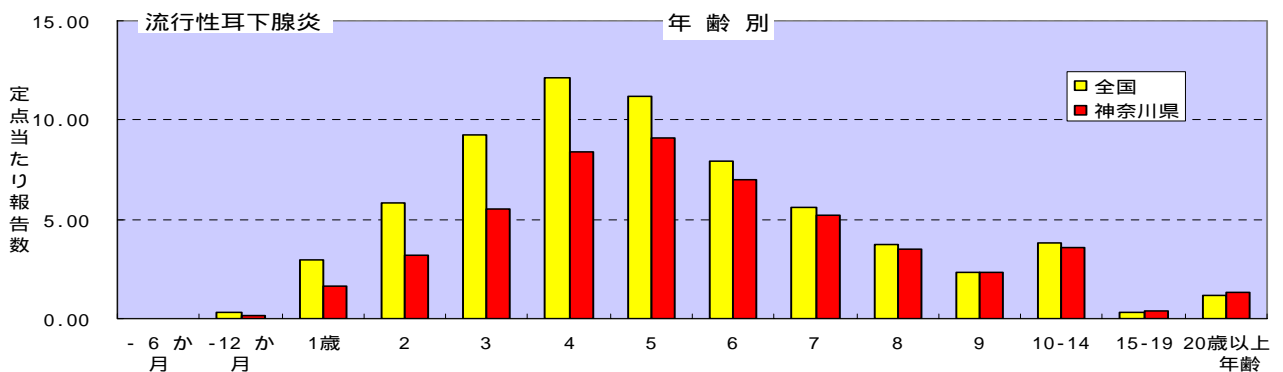
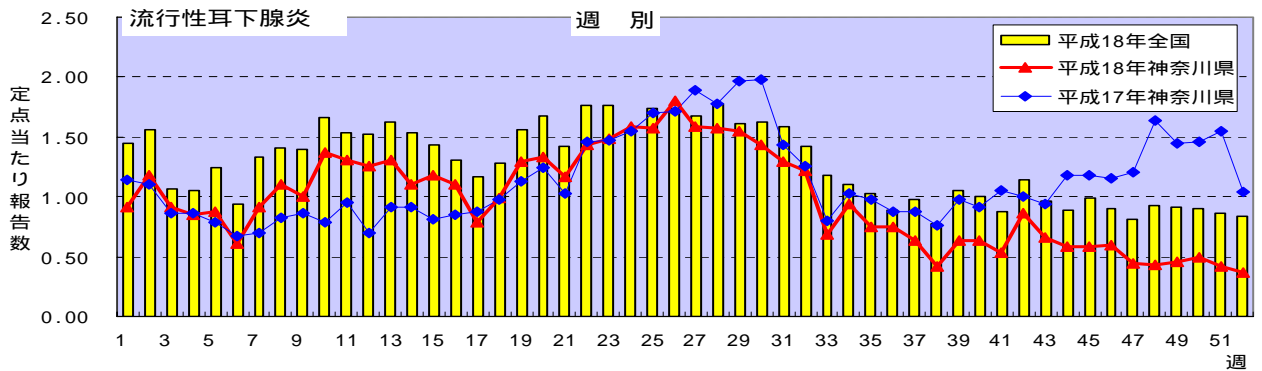
麻しん（成人麻しんを除く）

低位で推移した。年齢では1歳が最も多かった。



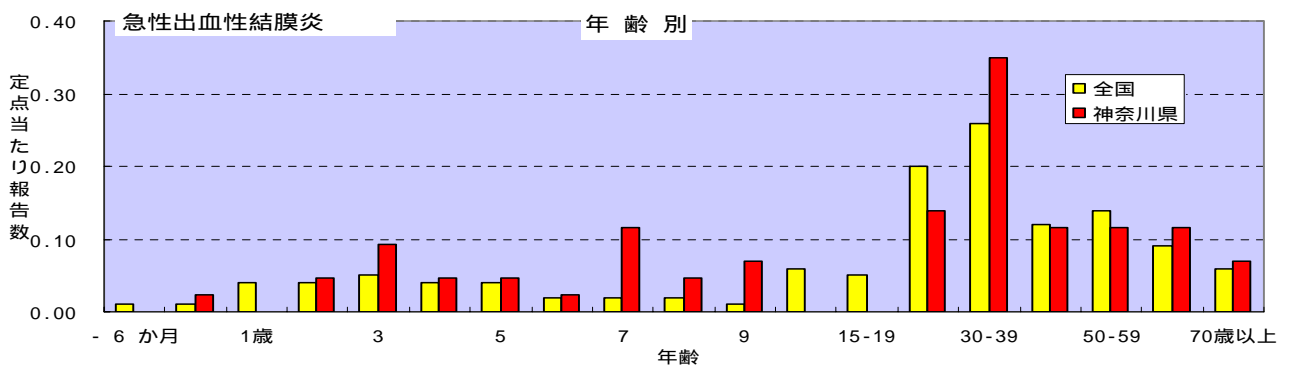
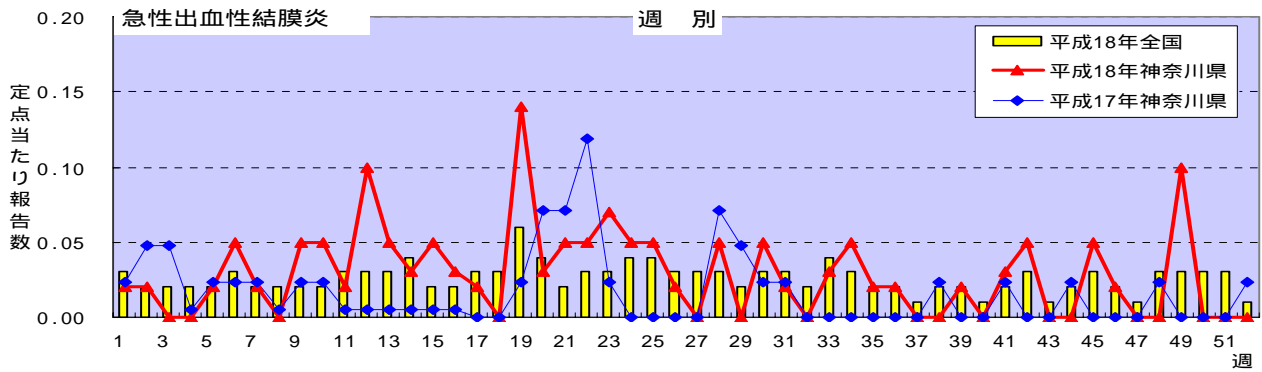
流行性耳下腺炎

35週以降は前年を大幅に下回った。年齢では5歳が多かった。



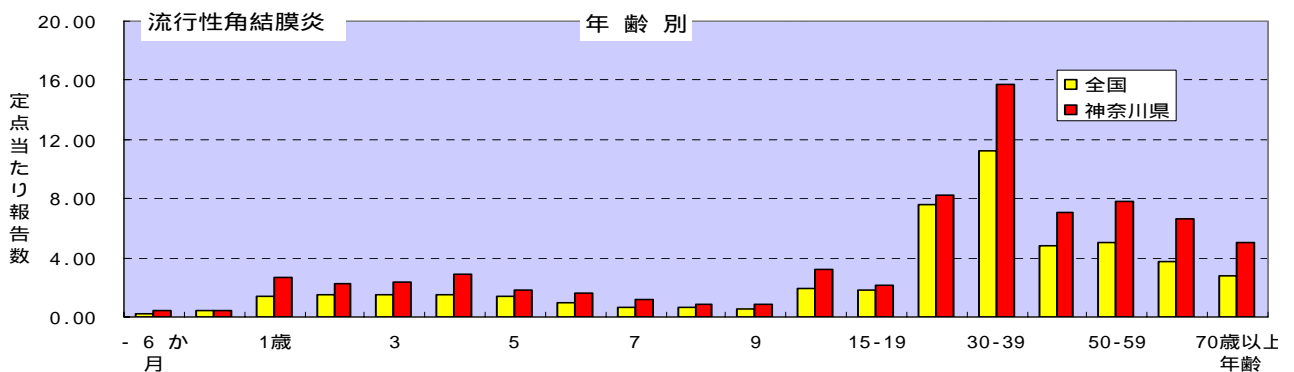
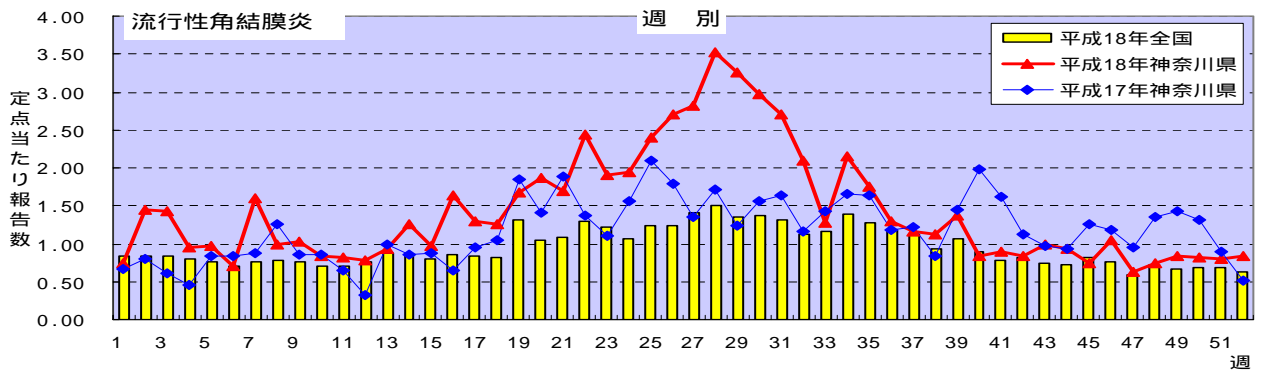
急性出血性結膜炎

前年同様散発的な報告があった。年齢では40～49歳に多くの報告があった。



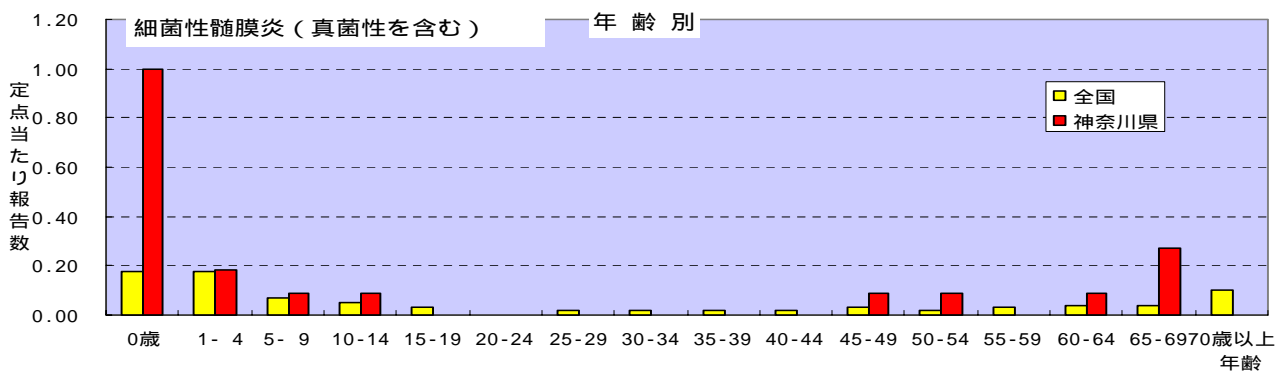
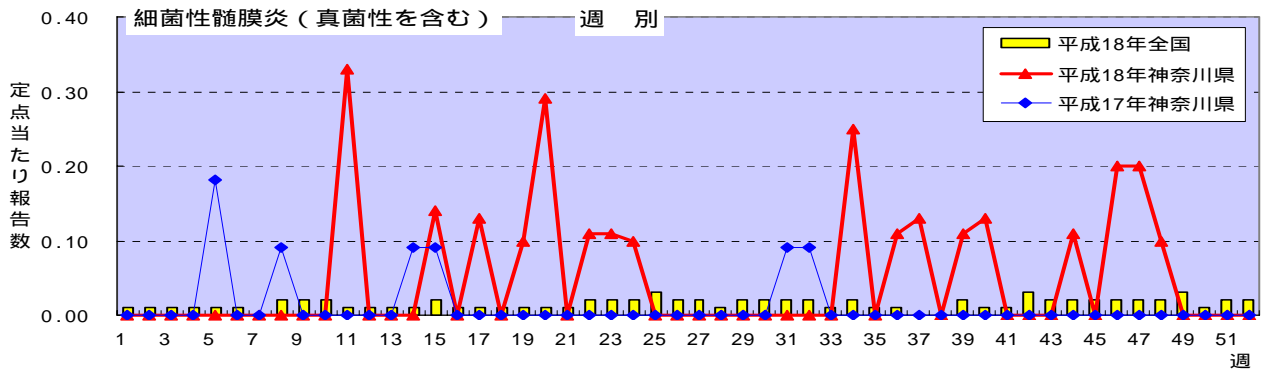
流行性角結膜炎

22週から32週までは前年を上回る報告があった。年齢では30～39歳が最も多くの報告があった。



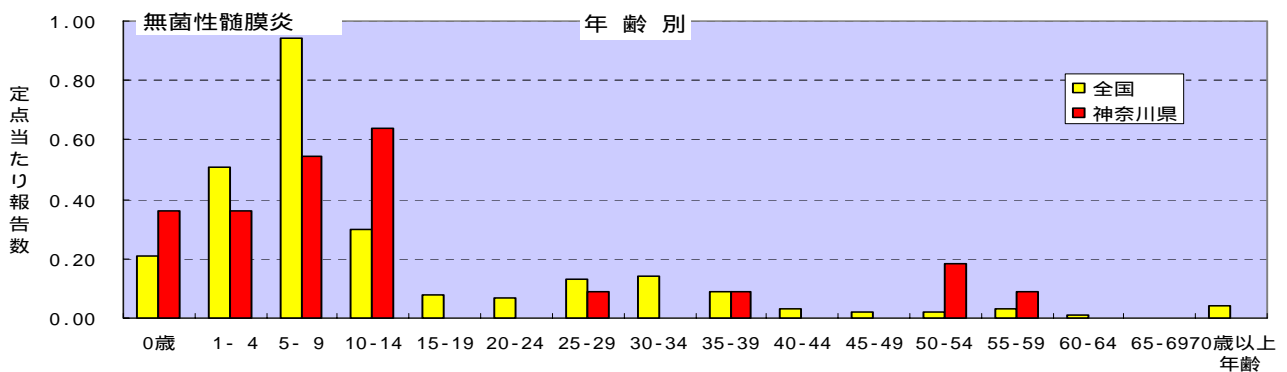
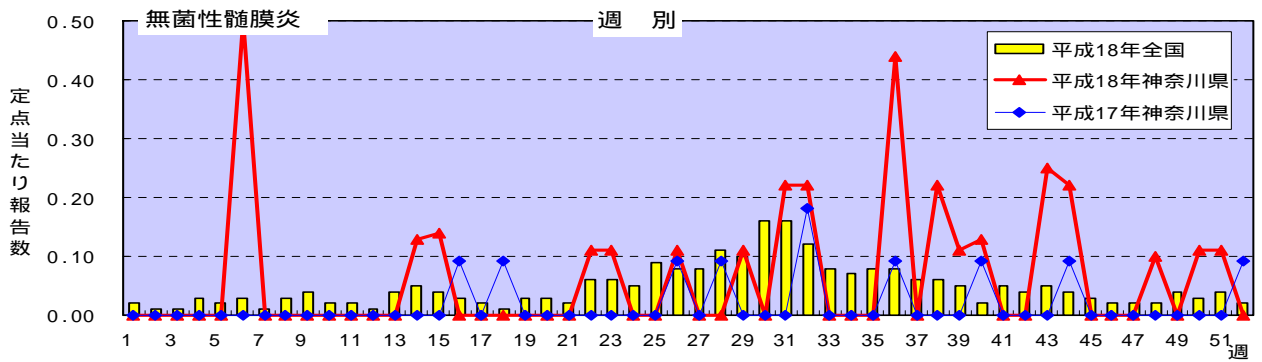
細菌性髄膜炎

散発的な報告であった。年齢では0歳に多くの報告があった。



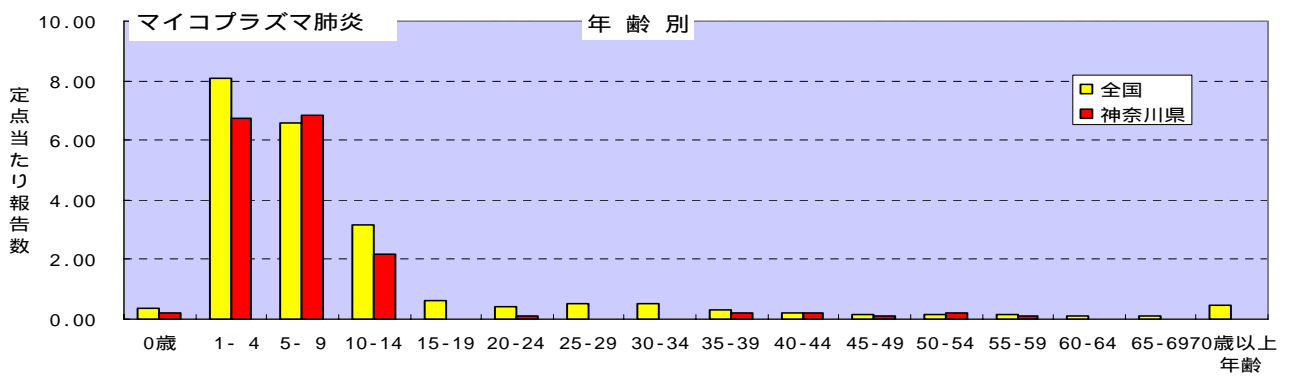
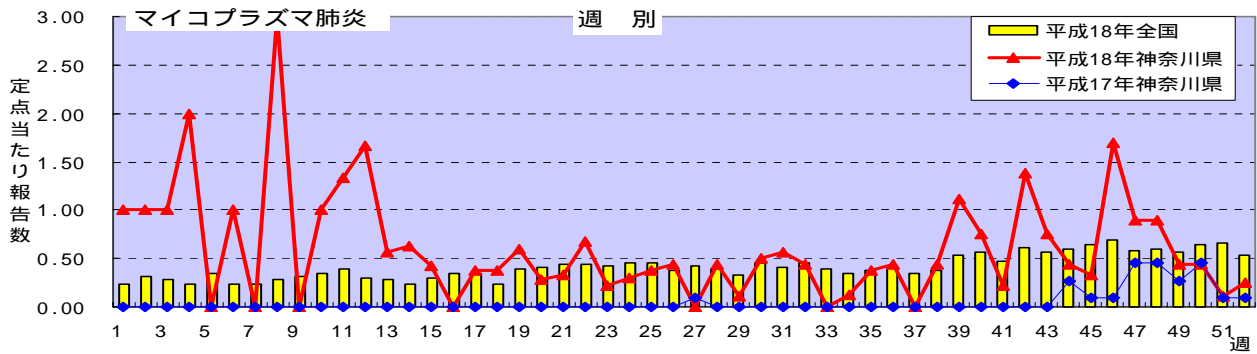
無菌性髄膜炎

散発的な報告であった。年齢では14歳以下が多数であった。



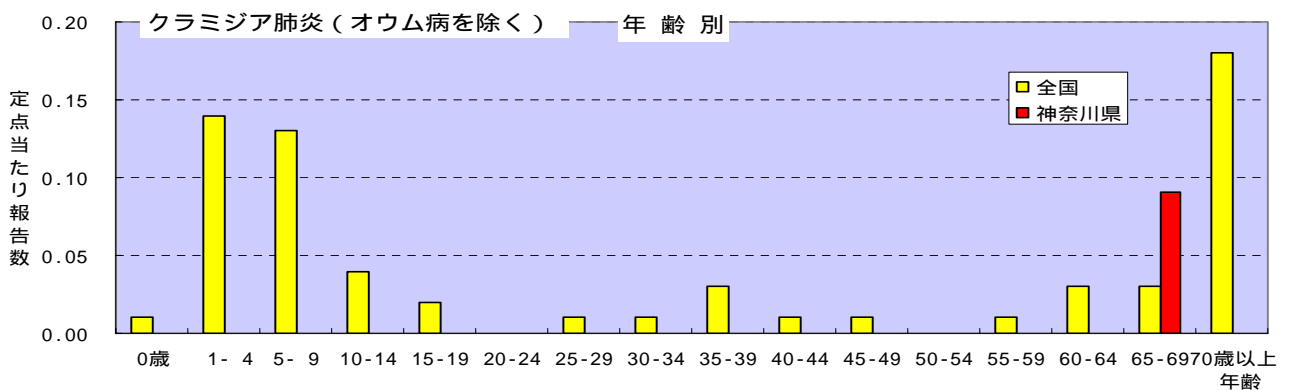
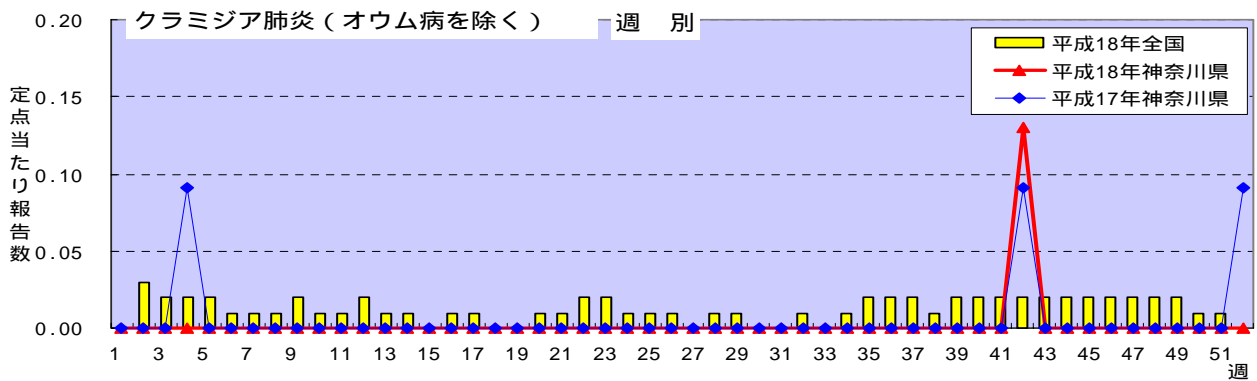
マイコプラズマ肺炎

前年17年に比べ多くの報告があった。年齢では9歳以下が大多数であった。



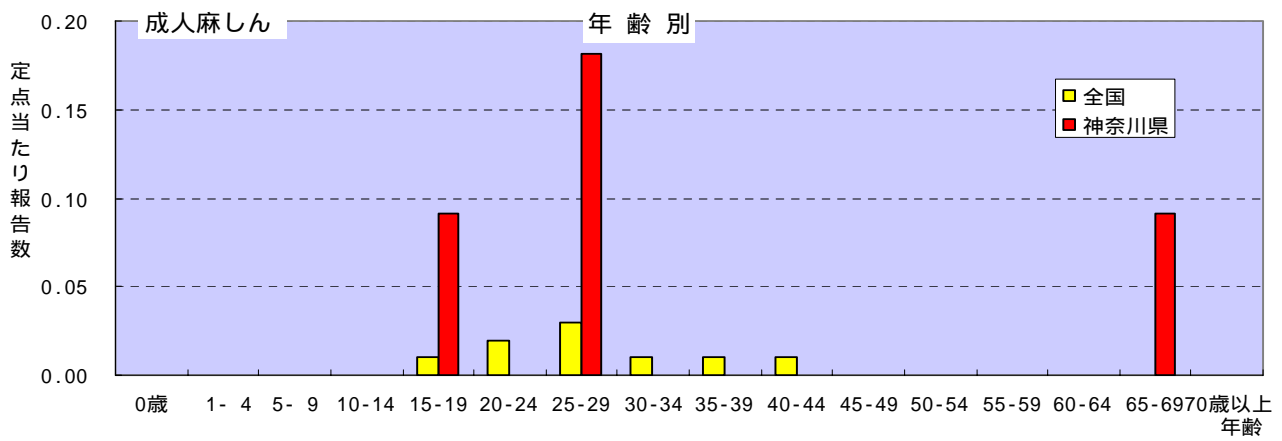
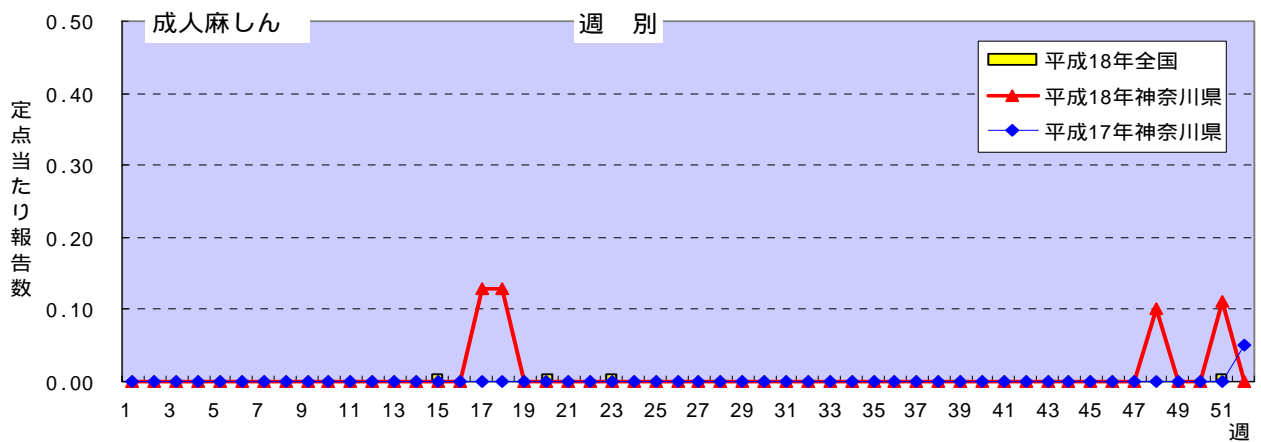
クラミジア肺炎（オウム病を除く）

散発的な発生であった。年齢では65～69歳に報告があった。



成人麻疹

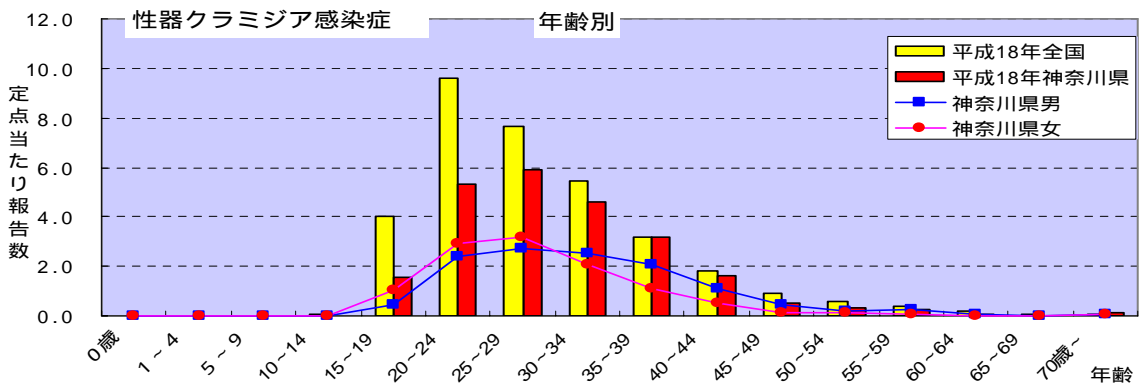
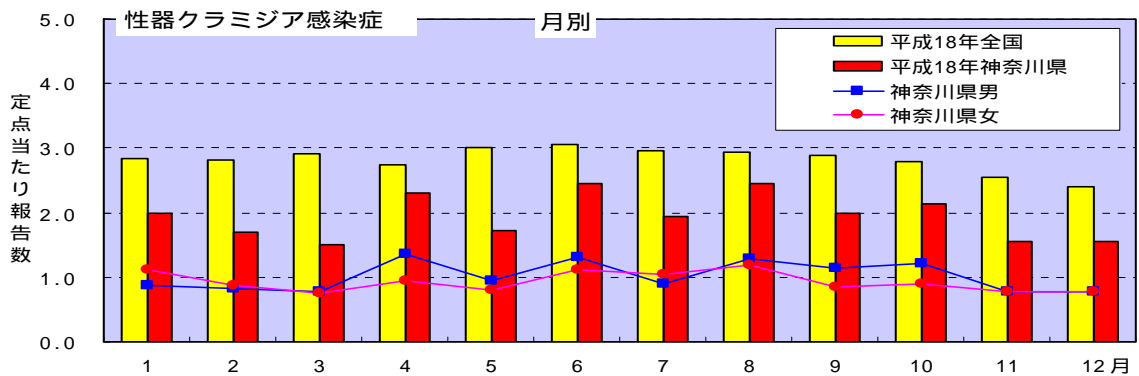
散発的な発生であった。年齢では15～19歳、25～29歳、65～69歳での報告であった。



(3) 月報対象疾患(神奈川県全県)

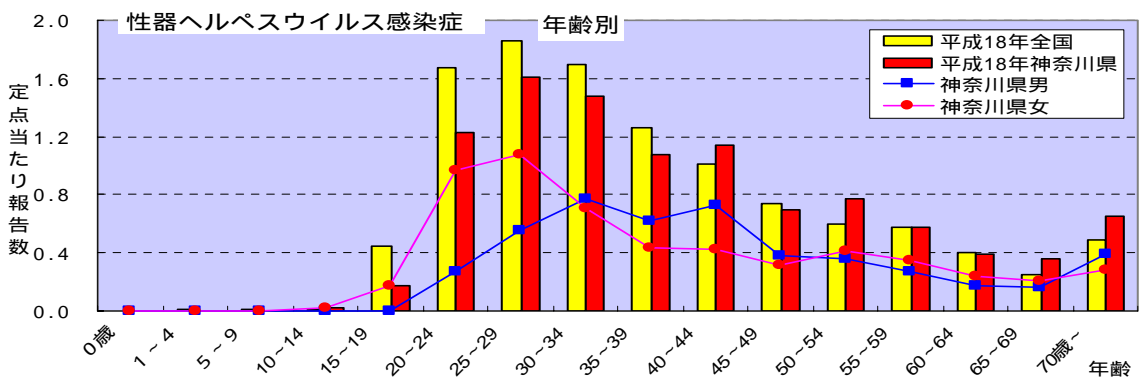
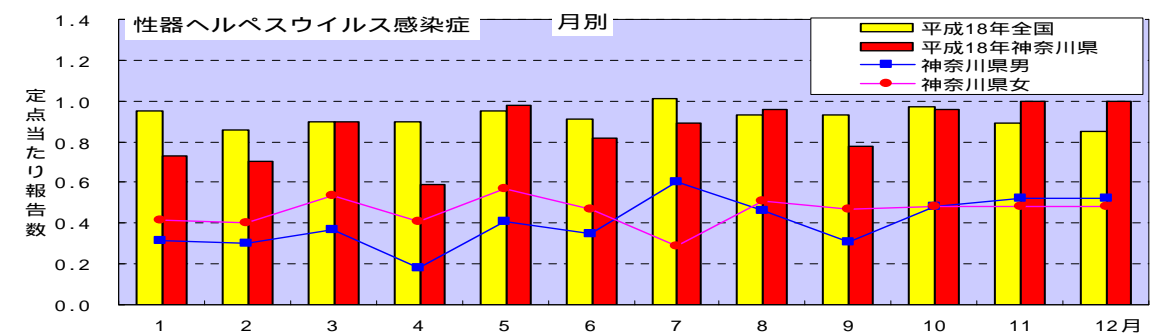
性器クラミジア感染症

年間を通して報告数に大きな変化はなかった。年齢別では25～39歳に多くの報告があった。



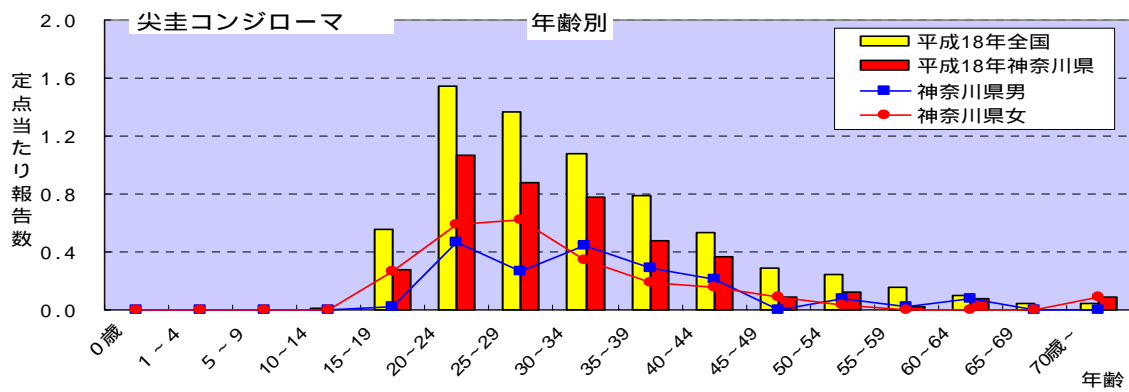
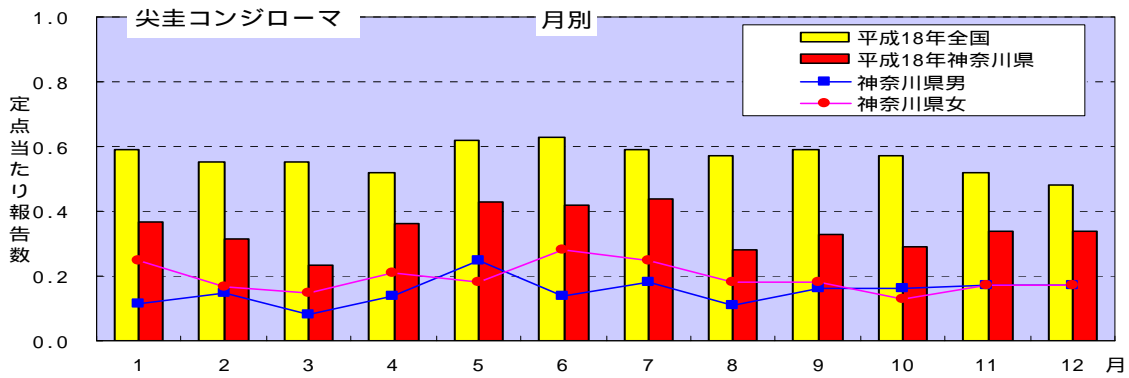
性器ヘルペスウイルス感染症

年間を通して報告があった。年齢別では25～49歳に多くの報告があった。



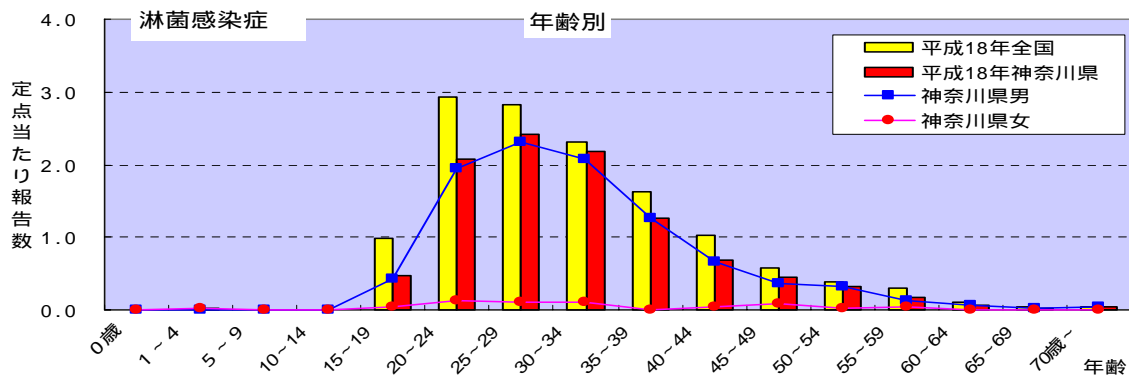
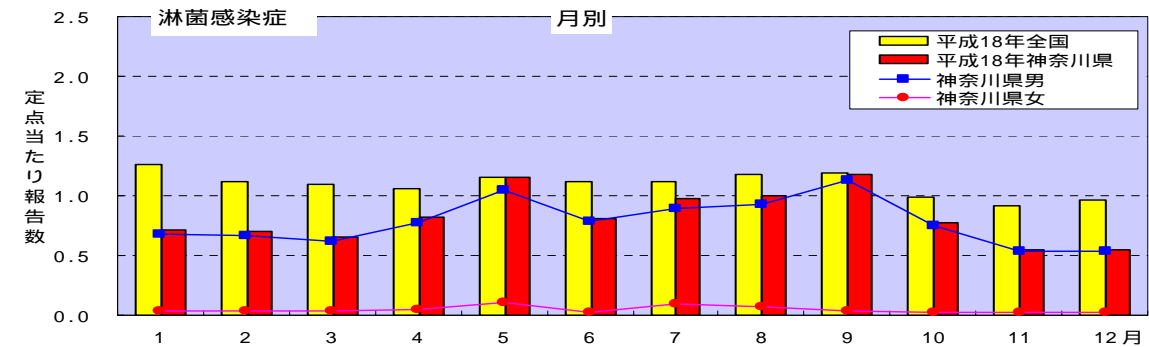
尖圭コンジローマ

年間を通して全国よりも低位であった。年齢別では25～39歳に多くの報告があった。



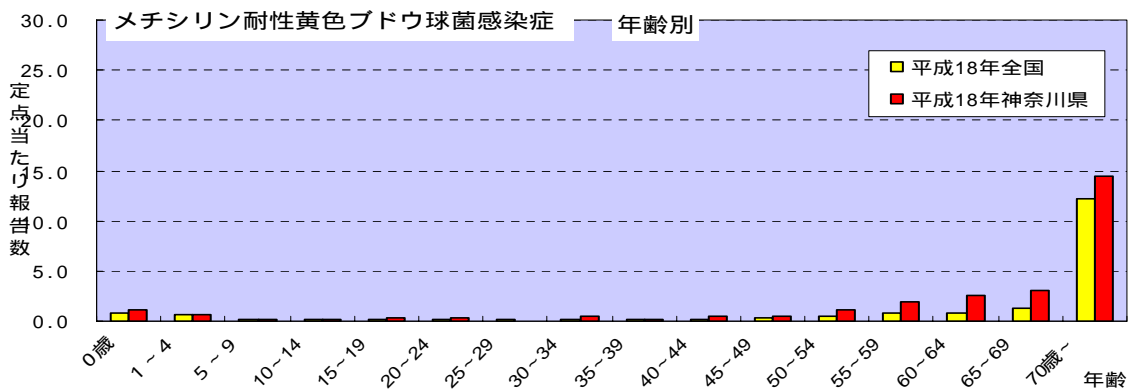
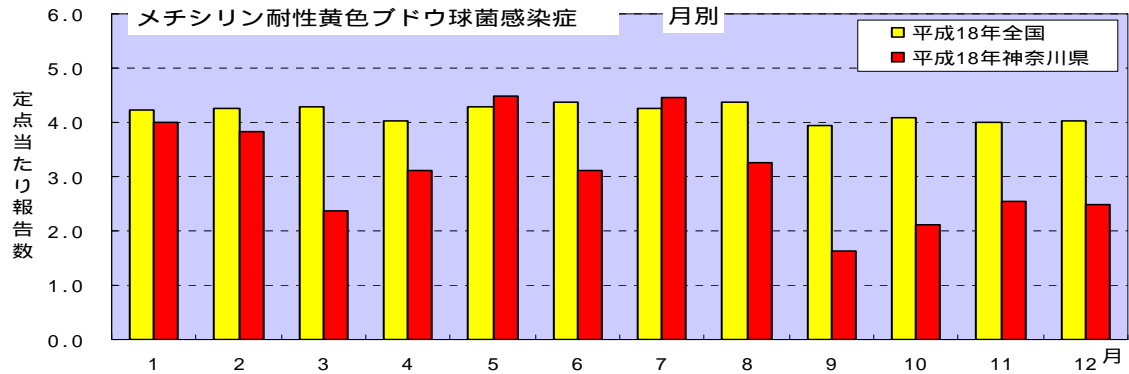
淋菌感染症

年間を通して報告があった。年齢別では25～39歳に多くの報告があった。



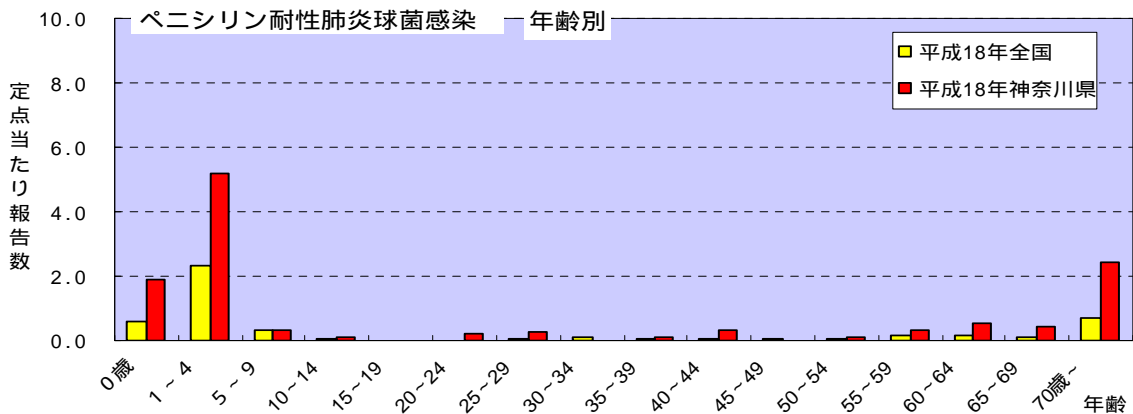
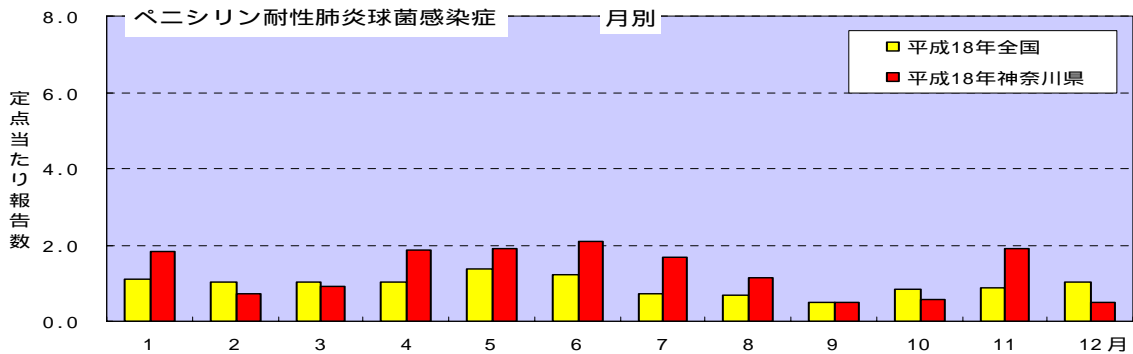
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間を通して報告があり、年齢別では70歳以上の報告が多かった。



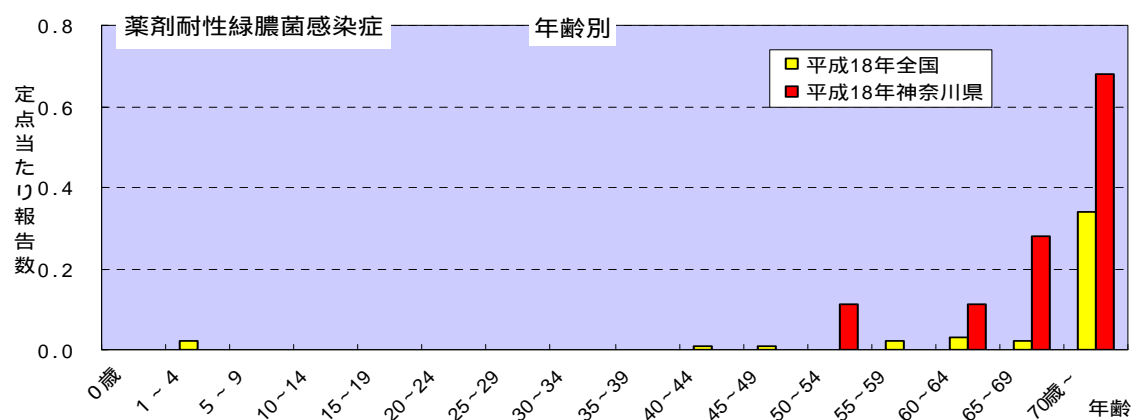
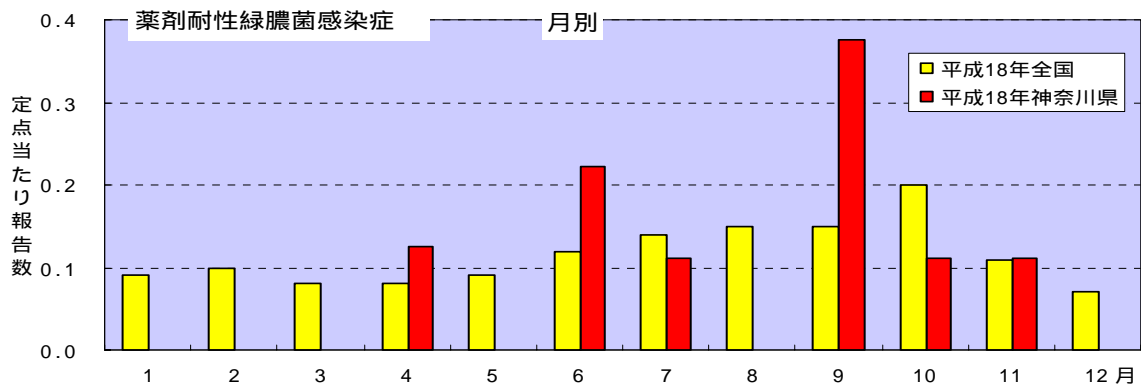
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

年間を通して報告があり、年齢別では5~9歳に多くの報告があった。



薬剤耐性緑膿菌感染症

9月に多くの報告があった。年齢別では70歳以上に多くの報告があった。



ウイルス性感染症

1 インフルエンザ

(1) 概況

(編集事務局)

平成 18～19 年のインフルエンザ様疾患の報告数は前年より低調であり、ピークは 6 週遅れの第 11 週（定点当たり 27.76 人）であった。市・域別では県域での報告数が多かった。

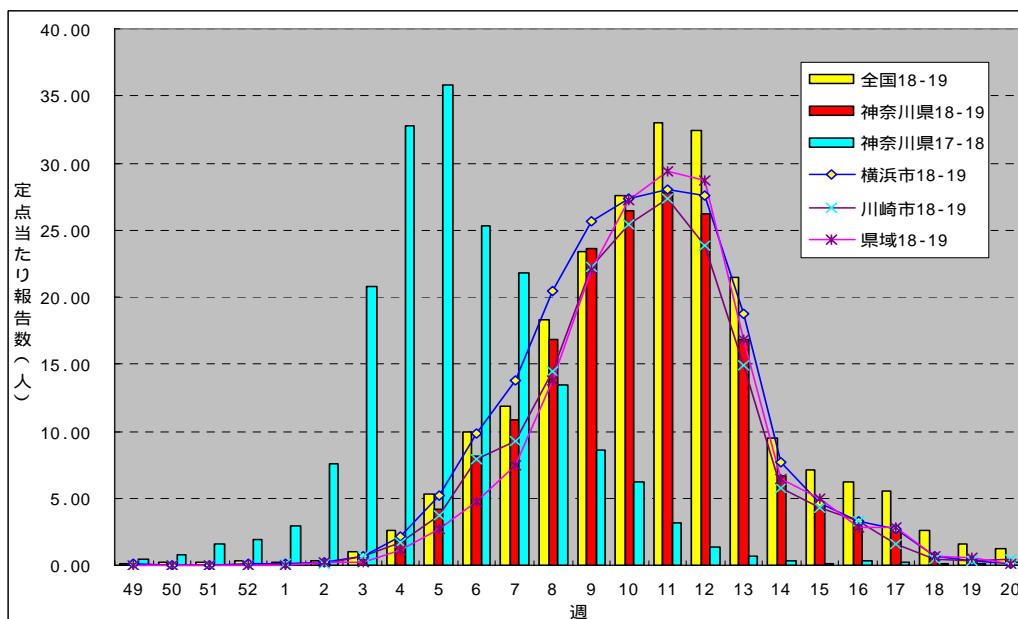


図 インフルエンザ様疾患定点当たり報告数（感染症発生動向）

平成 19 年 1 月から 3 月にかけて発生した集団かぜは、A 香港型(H3)と B 型であった。患者発生は前年よりも低調であったが、発生施設数や欠席者数は前年上回った。平成 10 年以降の初発で、年を越しての初発は初めてであった。

表 学校等における集団かぜの発生状況（神奈川県。平成 19 年 3 月 31 日現在）

資料：神奈川県健康増進課

区分 年度	発生年月日	終息年月日	発生施設数	学級閉鎖数	欠席者数	ウイルス型
9 (冬季)	9.12.3	10.3.19	1,794	3,293	38,782人	A 香港型 (H3)
10 (冬季)	10.11.6	11.3.18	1,938	2,949	33,370人	A 香港型 (H3) B 型
11 (冬季)	11.11.19	12.3.17	1,074	1,498	18,778人	A ソ連型 (H1) A 香港型 (H3)
12 (冬季)	12.12.12	13.3.19	143	144	1,535人	A ソ連型 (H1) B 型
13 (冬季)	13.11.16	14.3.19	791	1,059	12,336人	A ソ連型 (H1) A 香港型 (H3)
14 (冬季)	14.12.13	15.3.17	1,115	1,430	19,024人	A 香港型 (H3) B 型
15 (冬季)	15.12.8	16.3.22	554	699	8,941人	A 香港型 (H3) B 型
16 (冬季)	16.11.25	17.3.26	961	1,250	14,634人	A 香港型 (H3) B 型
17 (冬季)	17.12.5	18.3.18	715	881	9,962人	A ソ連型 (H1) A 香港型 (H3) B 型
18 (冬季)	19.1.17	19.3.24	754	984	12,412人	A 香港型 (H3) B 型

(2) 神奈川県(横浜市・川崎市を除く)のインフルエンザの動向

神奈川県衛生研究所

平成 18 年度冬季における神奈川県(横浜市・川崎市を除く)のインフルエンザ流行は、19 年 1 月から 4 月にかけて起こった。感染症発生動向調査によると、シーズン最初の患者発生報告は 18 年第 45 週(11/6~12)にあったが、年内は目立った報告数の増加はみられなかった。19 年第 4 週(1/22~28)以降に報告数は急増して第 11 週(3/12~18)にピーク(定点あたり報告数 28.02 人)を迎えた後、第 13 週(3/26~4/1)以降は急速に減少して第 18 週(4/30~5/6)にはほぼ終息(定点あたり報告数 0.68 人)した。本シーズン(18 年第 45 週~19 年第 18 週)における報告数の累積は 27,872 人と昨シーズンの 9 割程度の人数となり、中規模流行となった(図)。

例年のインフルエンザ流行は、第 2 週頃から患者報告が増加を始め、第 5 週頃にピークを迎えた後、第 13 週頃には終息する。しかし、本シーズンは、ピーク、終息ともに時期が遅かった。この流行パターンは、過去 7 年間で最も流行時期が遅かった平成 12 年度(2000/2001 年シーズン)と似ていた。

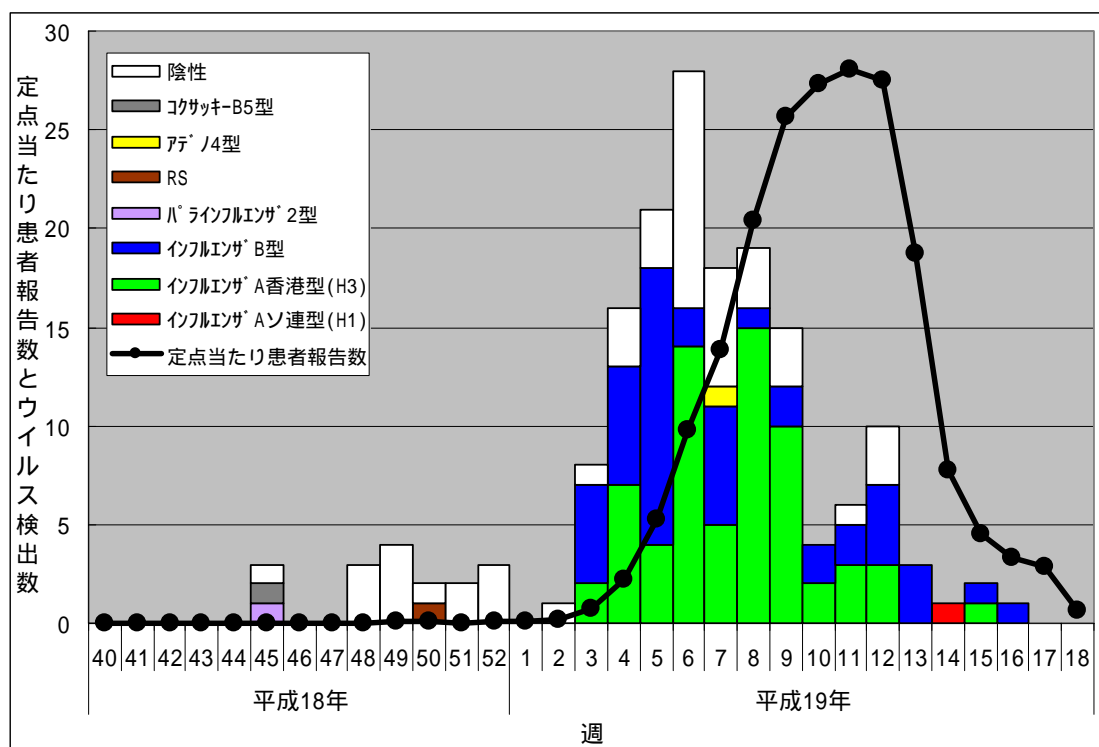


図 インフルエンザ様患者の定点あたり報告数とウイルス検出数の推移

神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市・藤沢市を除く)の感染症発生動向調査病原体定点で採取された 76 検体および相模原市と藤沢市からの一般依頼 42 検体についてウイルス分離を実施した。また、一部検体については PCR 法によるウイルス遺伝子検出(インフルエンザ、RS、パラインフルエンザ)を実施した。シーズンを通じて、インフルエンザウイルス A 香港型(H3)と B 型とが混在して検出される傾向が続いた。ウイルス分離および遺伝子検出をあわせたウイルス検出数の内訳は、インフルエンザウイルス A ソ連型(H1)1 件、同 A 香港型(H3)54 件、同 B 型 23 件、アデノウイルス 4 型 1 件、パラインフルエンザウイルス 2 型 1 件、RS ウイルス 1 件、コクサッキーウイルス B5 型 1 件であった。なお、インフルエンザウイルス A ソ連型(H1)は、4 月の検体からの検出である。

神奈川県(横浜市・川崎市を除く)の各保健所管内初発集団かぜ(12 集団 53 名)について上記と同様にウイルス分離および遺伝子検出を実施した。1 月に 6 集団、2 月に 5 集団、3 月に 1 集団の検査依

頼があり、1月はインフルエンザウイルスA香港型(H3)1集団、同B型5集団、2月は同A香港型(H3)2集団、同B型2集団、インフルエンザウイルス不検出1集団、3月は同B型1集団であった。集団かぜ患者からインフルエンザウイルス以外のウイルスは検出されなかった。

インフルエンザ分離株の抗原性の変異をHI試験の成績から見ると、Aソ連型(H1)はワクチン株のA/ニューカレドニア/20/99(H1N1)のホモ価とは4倍差を示した。A香港型(H3)はワクチン株のA/広島/52/2005(H3N2)のホモ価と同等～2倍差の類似株が4%、4～8倍差を示す株が40%、16倍以上の差を示す株が56%であった。B型は分離株の98%が本シーズンのワクチン株と同じビクトリア系統株であり、そのうち、ワクチン株のB/マレーシア/2506/2004(ビクトリア系統株)のホモ価と同等～2倍差の類似株が95%、4倍差の株が5%であった。また、B型は山形系統株が1株だけ分離されており、昨シーズンのワクチン株であったB/上海/361/2002(山形系統株)のホモ価とは4倍差を示した。

本シーズンはA香港型(H3)とB型との混合流行であったが、A香港型(H3)分離株はワクチン類似株ではないタイプが主流であり、B型分離株はほとんどがワクチン類似株であった。ウイルス分離数は5:4の割合でA香港型(H3)の方が多かった。

(渡邊寿美、斎藤隆行、尾上洋一、新川隆康)

(3) 横浜市のインフルエンザの動向

横浜市衛生研究所

横浜市結核・感染症発生動向調査による平成18年11月から平成19年5月までのインフルエンザ様疾患患者数は21,217人と昨シーズン同期間における23,300人とほぼ同規模であった。定点あたり患者数は2月上旬から増えはじめ、3月(第11週)に26.8人とピークとなり、その後減少した(図1)。

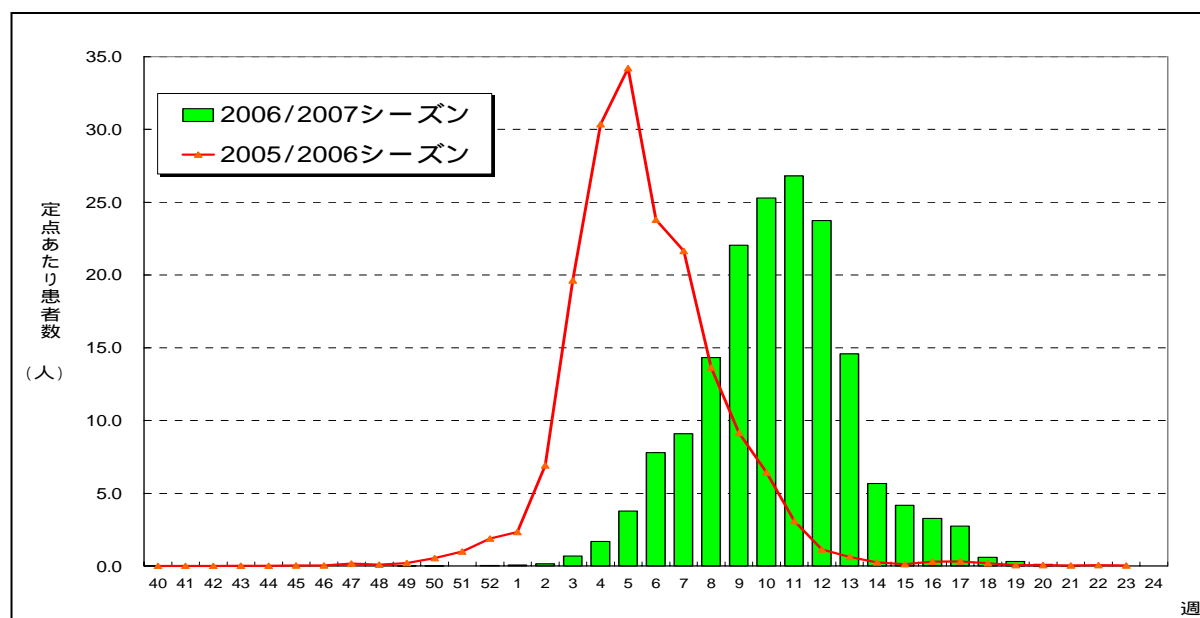


図1 定点あたり患者数

集団かぜの初発は平成19年2月7日(第6週)に保土ヶ谷区の小学校からの報告であった。その後、3月第11週まで続き、終息までの発生数は15区23施設8学級であった。検査依頼のあった8集団28人についてウイルス学的調査を実施し、6集団からB型ウイルスが、2集団からA香港型(H3)ウイルスが分離またはその遺伝子が検出された(表1)。

表 1 集団かぜ調査の検査

発生日月	週	区	学校名	ウイルス分離			遺伝子検索			
				検体数	分離株数	型	判定数	HA遺伝子	判定数	NA遺伝子
平成19. 2/7	第6週	保土ヶ谷	小学校	5	5	B	5	B	-	未実施
2/7	第6週	緑	小学校	5	3	B	5	B	-	未実施
2/14	第7週	都筑	中学校	4	3	B	4	B	-	未実施
2/21	第8週	神奈川	小学校	2	2	B	2	B	-	未実施
2/22	第8週	青葉	中学校	4	3	B	4	B	-	未実施
2/27	第9週	金沢	養護学校	2	1	AH3N2	0	陰性	2	NA2
2/27	第9週	旭	小学校	4	3	B	4	B	-	未実施
3/6	第10週	港北	小学校	2	0	-	0	陰性	2	NA2
合計			8施設	28	20	AH3N2:1 B:19	24	B:24	4	NA2:4

発生動向調査病原体定点ウイルス調査においては、平成 18 年 11 月から平成 19 年 5 月までの 7 カ月間に採取した鼻咽頭ぬぐい液 335 検体より、A ソ連型(H1)13 株、A 香港型(H3)62 株、B 型 58 株の合計 133 株が分離または遺伝子が検出された。また、定点以外の医療機関から依頼された検体では、A 香港型(H3)ウイルス 2 株が分離された。なお、この中には、RT-PCR で A ソ連型(H1)ウイルスが検出され、A 香港(H3)ウイルスが分離された 1 例が含まれていた。

A ソ連型(H1)型ウイルスについては平成 19 年 1 月 19 日(第 3 週)の中区定点検体から 1 株分離され、5 月まで散発的に分離・検出された。一方、A 香港型(H3)型ウイルスについては平成 18 年 12 月 7 日(第 49 週)の瀬谷区定点検体から 1 株分離され、年明け後は 2 月第 7 週をピークとして 5 月第 21 週まで分離された。他方、B 型ウイルスは平成 19 年 1 月 9 日(第 2 週)の青葉区と磯子区定点検体から 4 件 B 型ウイルスの遺伝子が検出された。その後、1 月 29 日(第 5 週)の戸塚区定点検体から 2 株分離され、第 9 週をピークとして 4 月第 16 週まで分離された(図 2)。

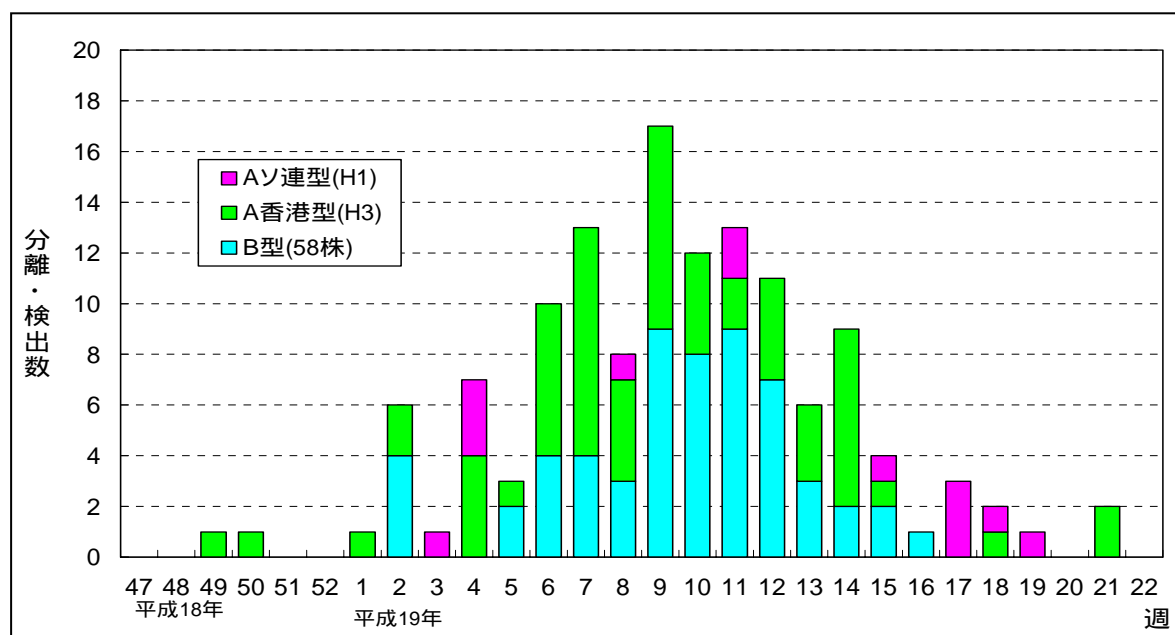


図 2 病原体定点ウイルス調査における分離・検出状況

集団かぜ調査および定点ウイルス等調査で分離されたウイルス株の抗原性状を調べたところ、A ソ連

型(H1)ウイルスの27%(3株)はワクチン株であるA/New Caledonia/20/99とHI価が類似していたが、73%(8株)はワクチン株に低い反応性を示した。一方、A香港型(H3)ウイルス64株はワクチン株であるA/広島/52/2005類似株であった。他方、B型ウイルス73株はワクチン株であるVictoria系統のB/Malaysia/2506/2004に類似したウイルスであった(図3)。

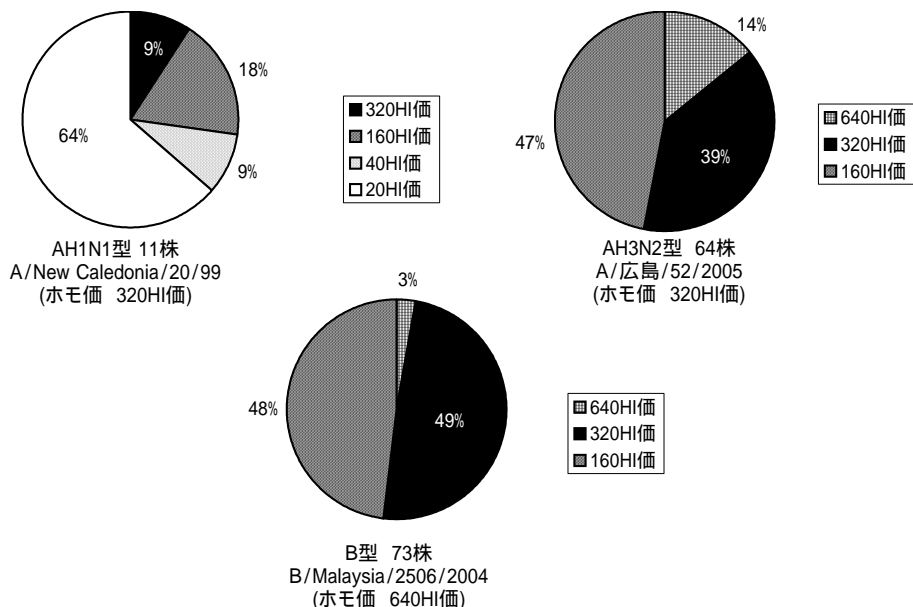


図3 2006/2007シーズン分離株のワクチン株に対するHI価

系統樹解析では、Aソ連型(H1)についてはワクチン株のA/New Caledonia/20/99より進化の進んだA/Solomon Islands/3/2006(2007/2008シーズン推奨ワクチン株)と同じグループであった。(図3)。

A香港型(H3)については2006/07シーズンワクチン株のA/広島/52/2005やA/Wisconsin/67/2005と同じグループであった(図4)。B型ウイルス株は2006/07シーズンワクチン株のB/Malaysia/2506/2004株と同じグループであった(図5)。

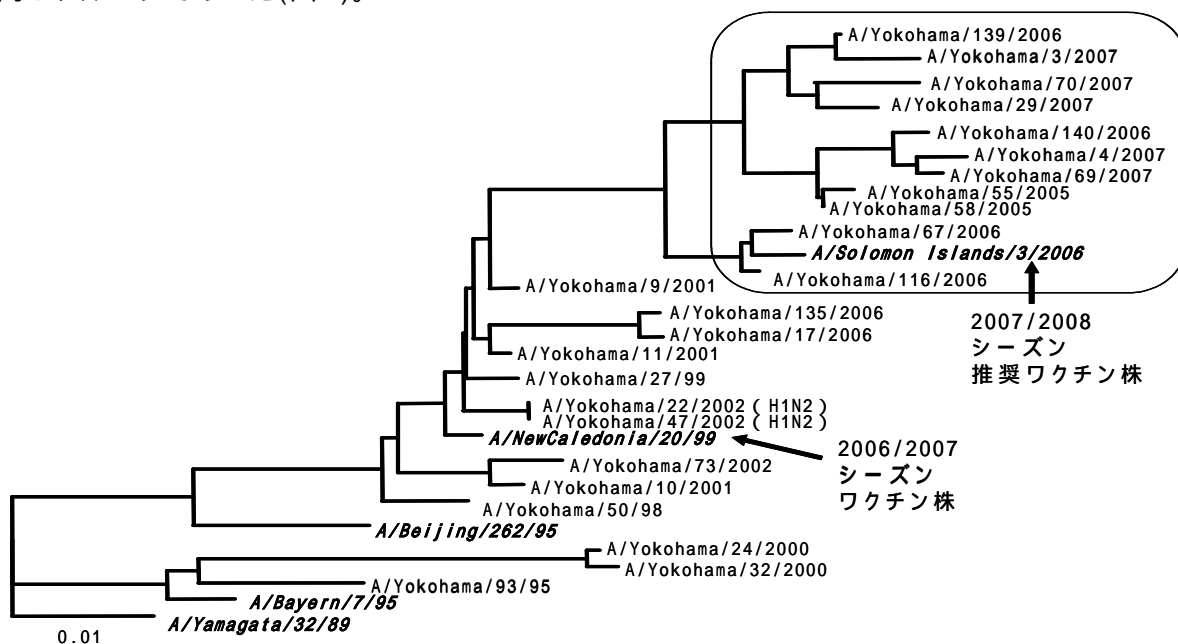


図3 AH1型ウイルスのHA1遺伝子NJ系統樹 981bp

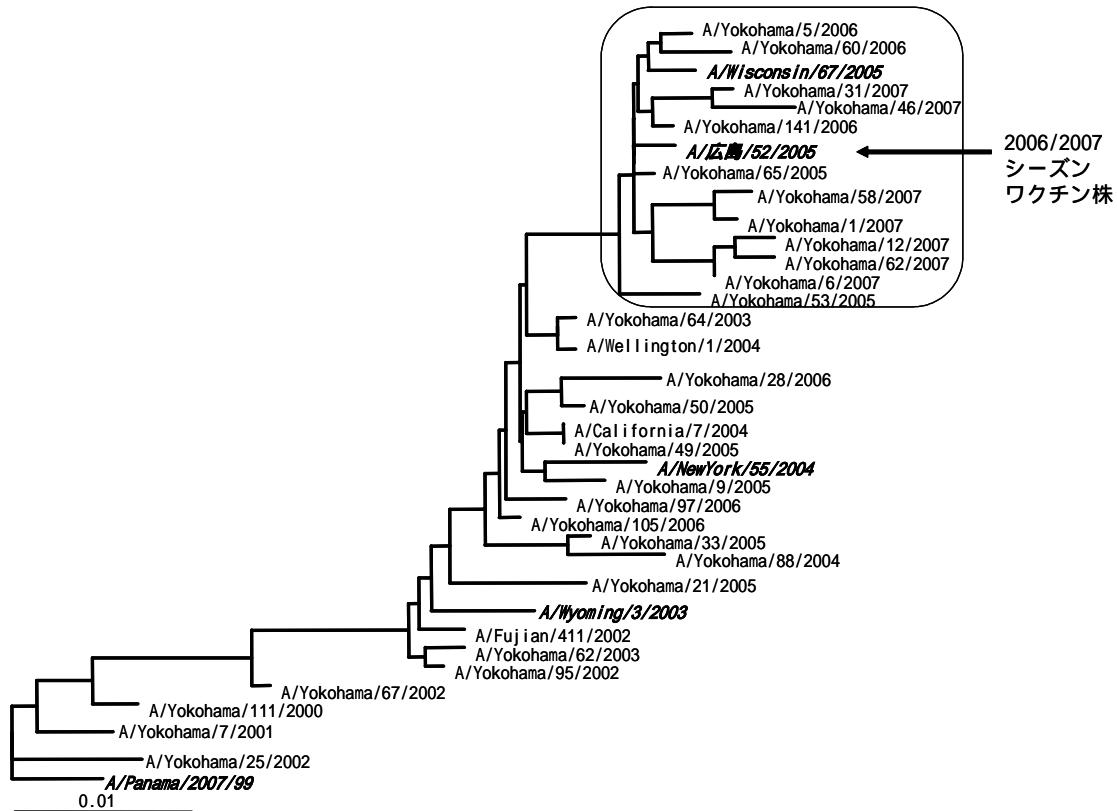


図4 AH3型ウイルスのHA1遺伝子NJ系統樹 986bp

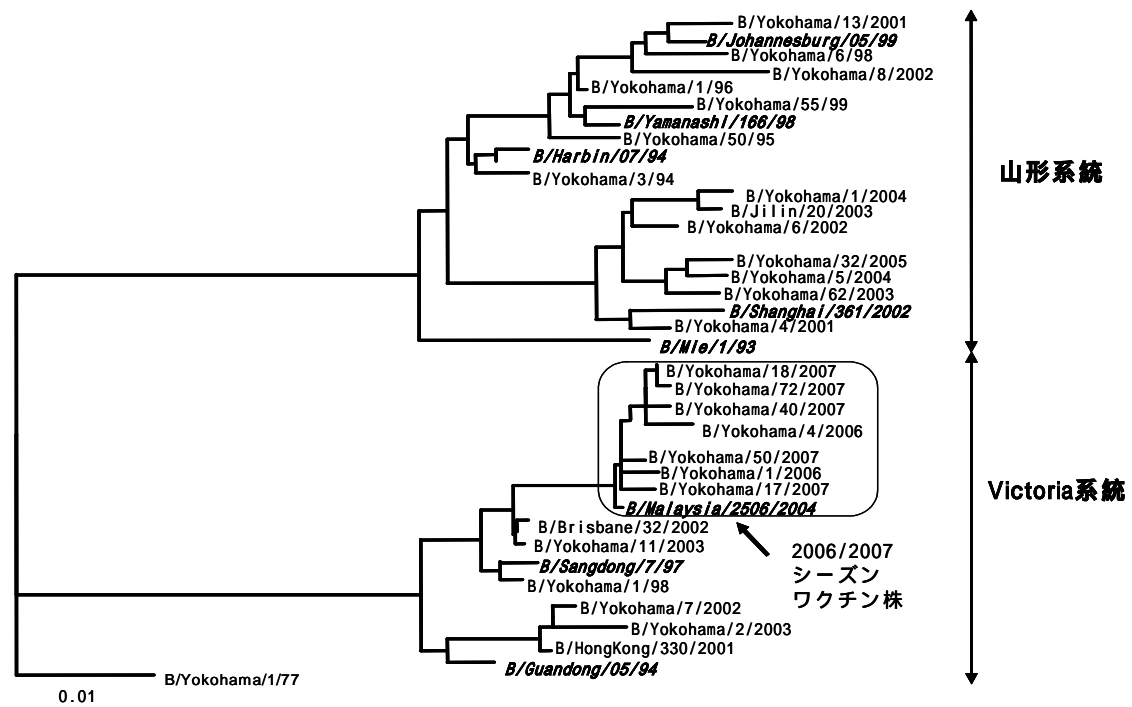


図5 B型ウイルスのHA1遺伝子NJ系統樹 1041bp

以上のように横浜市における2006/2007シーズンにおけるインフルエンザの流行は中規模なものであり、A香港型(H3)ウイルスとB型の混合流行であったが、Aソ連型(H1)ウイルスも散発に分離された。(川上千春、百木智子、七種美和子、野口有三、佐々木一也、豊澤隆弘)

(4) 川崎市のインフルエンザの動向

川崎市衛生研究所

川崎市感染症発生動向調査におけるインフルエンザ様疾患患者の発生状況(図1)から、定点あたりの患者数が1.0を超えたのが、18年1月の第4週で、その後患者数は急増し、3月の3週(11週)で定点あたりの患者数29.33と流行のピークを迎えた。定点あたりの患者数が1.0を下回ったのは5月の第1週(18週)で、総患者数は昨年とほぼ同程度の中規模な流行で、各5年間で最も遅い流行であった。平成18年4月から平成19年3月にかけて、定点医療機関で採取されたインフルエンザ様疾患患者の咽頭ぬぐい液、鼻腔ぬぐい液113例についてウイルス分離を行った。そのうち97例(85.8%)からインフルエンザウイルスが分離され、その内訳はA香港型(H3)60株、Aソ連型(H1)10株、B型27株であった。

図2によると、はじめてインフルエンザウイルスが分離されたのは1月12日(2週)でA香港型(H3)が分離された。1月の分離数はA香港型(H3)5株、Aソ連型(H1)1株であった。2月にはいると分離数は増加し、A香港型(H3)40株、Aソ連型(H1)6株、B型16株が分離された。3月には、A香港型(H3)11株、Aソ連型(H1)3株、B型9株が分離された。4月に入ってからA香港型(H3)が4株、B型1株が分離された。なお、今期のインフルエンザ様疾患患者からは3血清型が分離されたが、A香港型(H3)、B型の混合流行で、Aソ連型(H1)は1月1株、2月6株、3月3株と散発的に見られ、終息した。

集団かぜは平成19年2月21日に発生しはじめ、3月16日に終息するまでに7施設10学級でみられた。当所においては、3月13日に麻生区小学校の2名のうがい液からインフルエンザB型が分離された。

(清水英明、平位芳江)

図1 インフルエンザ様疾患患者数

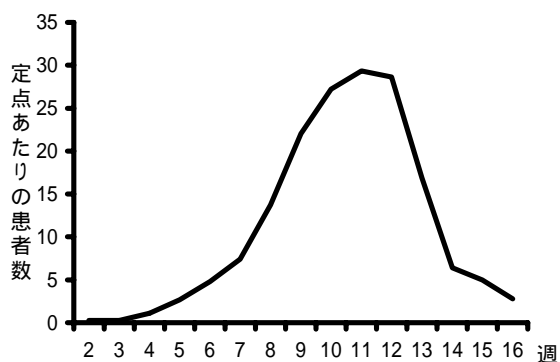
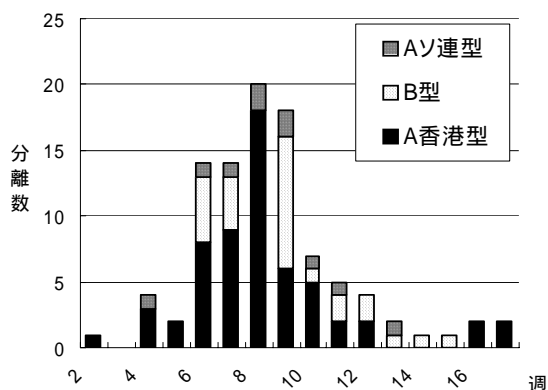


図2 週別インフルエンザウイルス分離状況



(5) インフルエンザ感受性調査

神奈川県衛生研究所

平成 18 年 9 月に採取された 0 歳以上の県民 266 名 (0~4、5~9、10~14、15~19、20~29、30~39、40~49、50~59、60 歳以上の 9 区分の年齢群各 30 名ずつ、ただし 5~9 歳のみ 26 名) の血清について、インフルエンザ各型に対する年齢別抗体保有状況を調査した。使用抗原は、A/ニューカレドニア/20/99 (H1N1)、A/広島/52/2005 (H3N2)、B/マレーシア/2506/2004、B/上海/361/2002 の 4 種類である。抗体保有率は、最低血清希釈倍数の 10HI 価と、感染防御能があるとされている 40HI 価の 2 点で集計した (図 1)。

A/ニューカレドニア/20/99(H1N1)は、12 年度から 7 シーズン連続してワクチン使用株となっている。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 10~14 歳の 96.7%、最低が 0~5 歳の 40.0%、40HI 価でみると最高が 10~14 歳の 80.0%、最低は 50~59 歳の 10.0%であった。全体としては、前年度よりも抗体保有率の上昇がみられ、前年度に小児を中心に A(H1)型の流行があったことを反映したと考えられた。(図 1.a)

A/広島/52/2005 (H3N2) は、18 年度から新しくワクチン使用株に採用された株である。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 5~9 歳の 88.5%、最低が 40~49 歳の 26.7%、40HI 価でみると最高が 5~9 歳の 57.7%、最低が 30~39 歳の 6.7%であった。前年度よりも全体的に抗体保有率の低下が見られ、来るインフルエンザシーズンにはこの型による流行が懸念された。(図 1.b)

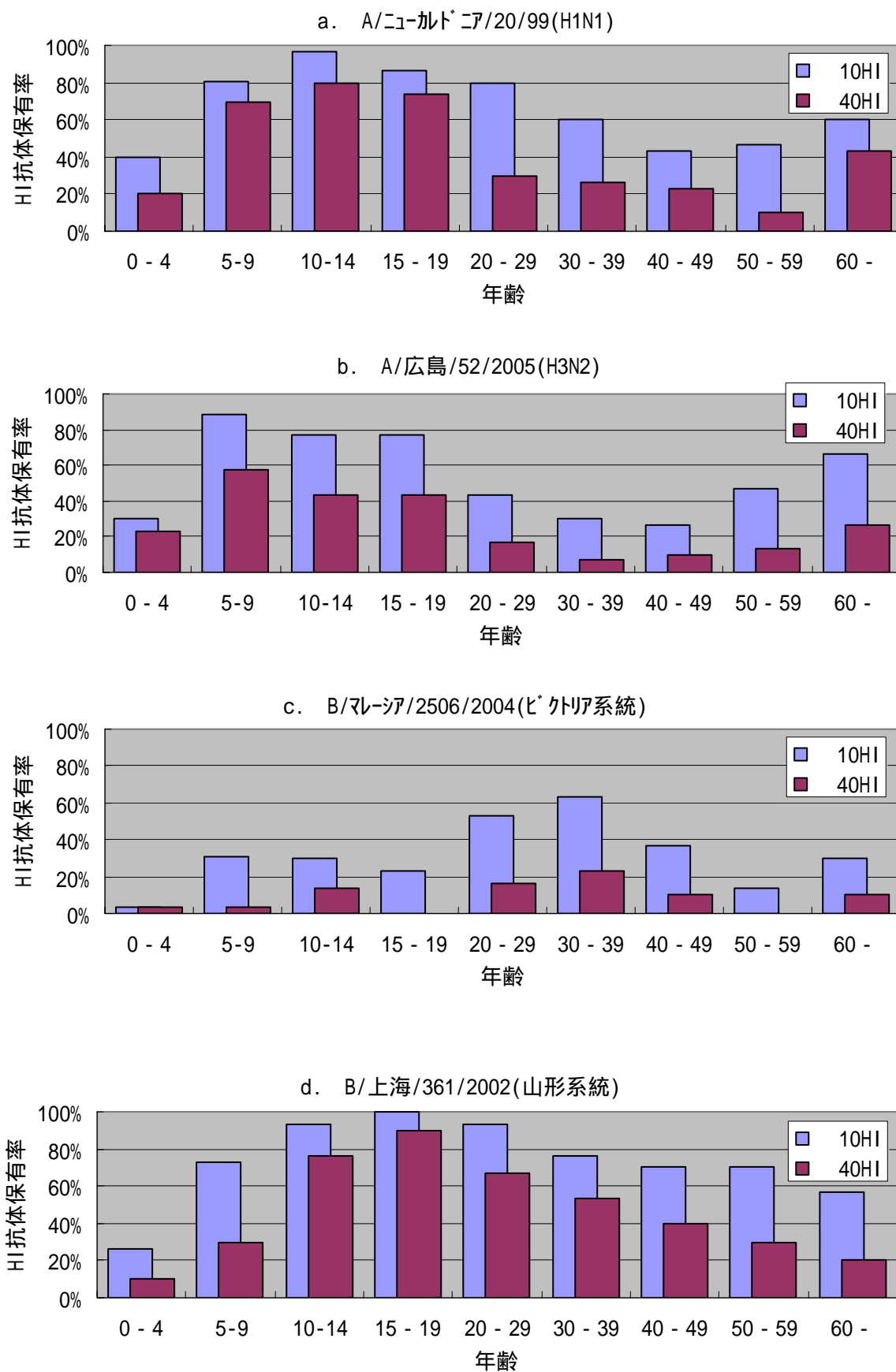
B/マレーシア/2506/2004 は、18 年度から新しくワクチン使用株に採用された株で "ビクトリア系統" に属する。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 30~39 歳の 63.3%、最低が 0~4 歳の 3.3%であった。40HI 価でみると最高が 30~39 歳の 23.3%、最低が 15~19 歳および 50~59 歳の 0.0%であった。ビクトリア系統株に対する抗体保有率は、前年度とほぼ同等であり、30~39 歳に保有率のピークがあることが特徴であった。ビクトリア系統株は、調査時以前の 18 年 5、6 月に散発的に 3 株が分離されているが、流行には至らなかったため、抗体保有率には影響しなかったと考えられる。(図 1.c)

B/上海/361/2002 は、ワクチン使用株 (マレーシア株) とは別系統の "山形系統" に属する株で、16~17 年度にワクチン使用株に採用された株である。本株に対する抗体保有率は、10HI 価でみると最高が 15~19 歳の 100.0%、最低が 0~4 歳の 26.7%であった。40HI 価でみると最高が 15~19 歳の 90.0%、最低が 0~4 歳の 10.0%であった。前年度には県域では B 型の流行が確認されていないにもかかわらず、全体的に前年度よりも抗体保有率の上昇がみられた一因として、2 シーズン連続してワクチン株として使用されたことにより一般住民に広く浸透しているためではないかと考えられる。(図 1.d)

40HI 価以上の抗体保有者の割合が 50%未満の年齢群をみると、A (H1N1) 型は 0~4 歳および 20 歳以上の各年齢群、A (H3N2) 型は 5~9 歳を除く全年齢群、B 型のビクトリア系統は全年齢群、B 型の山形系統は 0~9 歳および 40 歳以上の各年齢群、がそれに該当した。これらの年齢群ではインフルエンザに対する警戒が必要であると考えられた。

(渡邊寿美、尾上洋一、新川隆康)

図1 インフルエンザ感受性調査



2 HIV/エイズ

(1) 神奈川県 HIV/エイズの概況

(編集事務局)

平成 18 年の神奈川県の HIV 感染者・エイズ患者数は、総数で 4 年ぶりに増加し 78 人であった。感染者及び患者数ともに増加した(表 1)。

表 1 HIV 感染者・エイズ患者の性別年次推移(神奈川県) (人)

		平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	昭和60年からの累計
男性	総数	58	64	50	65	62	73	74	59	66	784
	感染者	36	39	32	36	40	39	45	41	45	485
	患者	22	25	18	29	22	34	29	18	21	299
女性	総数	12	15	12	18	7	13	8	10	12	192
	感染者	10	15	9	10	7	5	8	7	9	148
	患者	2	0	3	8	0	8	0	3	3	44
合計	総数	70	79	62	83	69	86	82	69	78	976
	感染者	46	54	41	46	47	44	53	48	54	633
	患者	24	25	21	37	22	42	29	21	24	343

平成 10 年以降の全国に占める神奈川県の HIV 感染者・エイズ患者数の割合は、総数において 4 年連続で減少し、平成 18 年は 5.7%であった。全国に占める割合が最も高いのは女性の感染者で 10.1%を占めた(表 2)。

表 2 HIV 感染者・エイズ患者の性別全国比の推移(神奈川県/全国) (%)

		平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	昭和60年からの累計
男性	総数	11.2	9.5	7.5	8.0	7.7	8.4	7.1	5.3	5.4	7.8
	感染者	11.3	9.3	8.2	6.7	7.5	6.8	6.4	5.3	5.2	7.4
	患者	11.0	9.7	6.4	10.3	8.2	11.7	8.4	5.3	5.7	8.4
女性	総数	9.0	9.7	9.8	13.1	5.9	11.6	6.5	11.1	9.4	8.2
	感染者	9.7	13.4	12.3	11.5	9.0	7.5	9.8	11.1	10.1	8.1
	患者	6.5	0.0	6.1	16.0	0.0	17.8	0.0	11.1	7.9	8.6
合計	総数	10.7	9.5	7.8	8.7	7.5	8.8	7.0	5.8	5.7	7.9
	感染者	10.9	10.2	8.9	7.4	7.7	6.9	6.8	5.8	5.7	7.6
	患者	10.4	8.3	6.4	11.1	7.1	12.5	7.5	5.7	5.9	8.5

エイズ相談件数は 4 年連続で増加し、平成 18 年の相談件数は前年比 17.1%増の 17,089 件であった。特に、(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)神奈川県においては 67.05%増の 6,373 件であった(表 3)。

表 3 エイズ相談件数年次推移 (件)

	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年
横浜市	5,729	5,483	5,425	6,316	5,110	5,269	4,891	5,396	5,937
川崎市	2,455	2,219	2,475	3,361	3,124	3,626	3,972	3,925	2,852
横須賀市	906	679	581	484	522	617	603	521	641
相模原市			248	436	291	492	847	939	981
藤沢市									305
上記を除く神奈川県	2,916	2,567	2,923	3,582	2,560	2,648	3,462	3,815	6,373
合計	12,006	10,948	11,652	14,179	11,607	12,652	13,775	14,596	17,089
前年比(%)	52.4	-8.8	6.4	21.7	-18.1	9.0	8.9	6.0	17.1

HIV 検査件数も 4 年連続で増加し、平成 18 年は前年比 22.3% 増の 9,620 件であった。横浜市での検査が全体の 46% を占めた(表 4)。

表 4 HIV 検査実施件数年次推移 (件)

	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年
横浜市	2,994	2,740	2,787	3,759	2,763	3,036	3,197	3,601	4,432
川崎市	1,459	1,451	1,405	1,818	1,560	1,802	2,077	1,943	2,083
横須賀市	253	211	195	201	218	237	299	293	298
相模原市			193	357	236	301	401	477	434
藤沢市									115
上記を除く神奈川県	1,756	1,630	1,235	1,583	1,045	1,026	1,247	1,553	2,258
合計	6,462	6,032	5,815	7,718	5,822	6,402	7,221	7,867	9,620
前年比(%)	59.8	-6.7	-3.6	32.7	-24.6	10.0	12.8	8.9	22.3

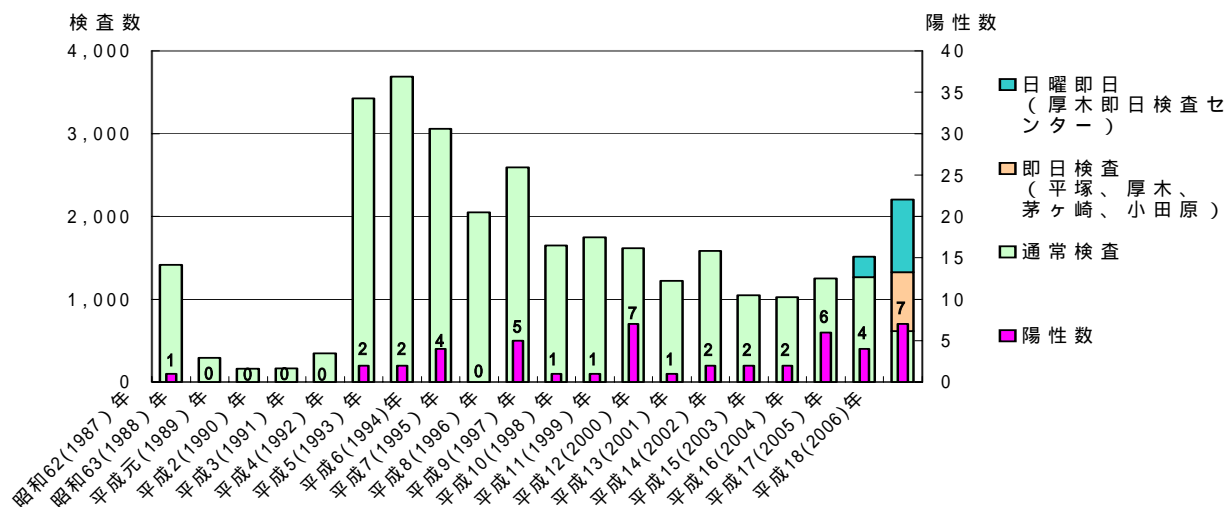
表 1～表 4 数値：県健康増進課

(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)における HIV 検査の実施状況
神奈川県衛生研究所

神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)では、昭和 62 年 2 月より保健所において HIV 抗体検査の受付が開始され、当衛研で検査を行っている。平成 5 年 4 月からは HIV 抗体検査が無料化され、同年 8 月からは HIV-1 型抗体検査に加え、HIV-2 型抗体検査も検査が可能となった。

平成 11 年 8 月からは厚生労働省「HIV 検査体制研究班」の協力により、夜間検査を行っている大和保健福祉事務所の検体について核酸増幅スクリーニング検査(NAT 検査)を導入し、平成 17 年 8 月からは HIV 即日検査機関として横浜 YMCA(厚木)に「厚木即日検査センター」を開設、平成 18 年 4 月からは平塚保健福祉事務所、6 月からは厚木、茅ヶ崎、小田原保健福祉事務所においても即日検査を実施している。また、11 月からは大和保健福祉事務所において、HIV 検査受検者で性感染症検査を希望する人に対し、梅毒抗体検査、性器クラミジア感染症抗原検査、同抗体検査が開始された。

HIV 検査数は検査が無料化された平成 5 年をピークに年々減少傾向にあったが、全国的に即日検査の導入が始まった平成 16 年以降、当県でも検査数が増加し始め、平成 17 年の HIV 即日検査センターの設置、平成 18 年の保健所への即日検査の導入により、検査数が急激に増加している(図 1)。



* 相模原は平成 12 年 4 月から、藤沢は平成 18 年 4 月から保健所設置市となった。
* 厚木即日検査センターは平成 17 年 8 月、平塚保健所は平成 18 年 4 月、厚木、茅ヶ崎、小田原保健所は平成 18 年 6 月から即日検査開始

図 1 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)での HIV 検査数、陽性数の推移

平成 18 年の検査数は 2,201 件であり、検査種別でみると、日曜即日検査では 874 件、保健所の即日検査では 712 件、大和保健所の平日および夜間通常検査では 317 件、その他の保健所の平日通常検査では 298 件であった（表 1）。即日検査を導入した保健所について、即日検査の実施が安定した平成 18 年 10～12 月の 3 カ月間および通常検査を実施していた前年同期間の 1 回当たり検査数を比較したところ、即日検査の導入によって受検者数が 2～10 倍増加していた（図 2）。

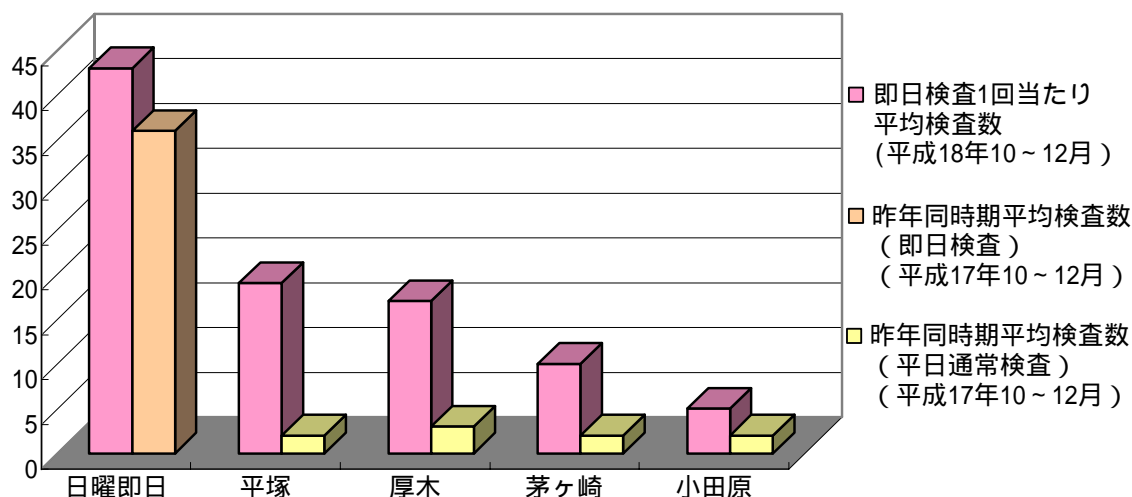


図2 即日検査導入による1回当たり平均検査数の比較

陽性数は 7 件ですべて HIV-1 型であった。検査の種類では、日曜即日検査が 4 件（陽性率 0.5%）、保健所での即日検査が 2 件（陽性率 0.3%）、大和保健所の平日および夜間通常検査が 1 件（陽性率 0.3%）、その他の保健所の平日通常検査では陽性はなかった（表 1）。このことから、受検者にとって利便性の高い検査機関において陽性率が高い傾向にあることが分かった。陽性 7 例の性別および国籍は、男性は 6 例ですべて日本国籍、女性は 1 例で外国籍であった。感染経路および検出された HIV-1 型サブタイプは、男性では同性間/両性間の性的接触による感染例はすべてサブタイプ B、異性間の性的接触による感染例においてはサブタイプ B が 2 例、サブタイプ A/E が 1 例であった。女性は異性間感染であり、サブタイプ A/E であった（表 2）。

表1 平成18年 神奈川県(横浜市・川崎市・横浜賀市・相模原市及び藤沢市を除く)での検査種別別による検査数、陽性数

検査の種類	検査数	陽性数	陽性率 (%)
日曜即日検査 (厚木即日検査センター)	874	4	0.5%
即日検査*	712	2	0.3%
大和保健所通常検査 (平日+夜間)	317	1	0.3%
平日通常検査**	298	0	0.0%
合計	2,201	7	0.3%

*平塚（平成18年4～12月）、厚木、茅ヶ崎、小田原（平成18年6～12月）

**鎌倉（即日イベント除く）、秦野、足柄上、津久井、三崎（平成18年1～12月）

藤沢、平塚（平成18年1～3月）、厚木、茅ヶ崎、小田原（平成18年1～5月）

表2 平成18年 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)で判明したHIV陽性7例の詳細

	性別	年代	国籍	感染経路	サブタイプ
1	男性	20代	日本	同性間	サブタイプB
2	男性	30代	日本	同性間	サブタイプB
3	男性	40代	日本	異性間	サブタイプA/E
4	男性	40代	日本	異性間	サブタイプB
5	男性	50代	日本	両性間	サブタイプB
6	女性	30代	外国	異性間	サブタイプA/E
7	男性	20代	日本	異性間	サブタイプB

平成18年のエイズ動向委員会の報告によると、全国のHIV感染者/エイズ患者数は日本人男性が全体の83%を占めており、そのうち同性間の性的接触が65%を占めていた。また、外国籍の感染者は全体の12%を占めていた。神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)においてもさらなるHIV検査の体制強化とともに、同性愛者および外国籍者等への予防・検査の普及啓発活動にもさらに重点をおいて取り組んでいく必要があると考える。

(佐野貴子、近藤真規子、渡邊寿美、斎藤隆行、尾上洋一、新川隆康、今井光信)

3 ウイルス性感染性胃腸炎

(1) 概況

(編集事務局)

平成 18 年のウイルス性集団胃腸炎の集団発生数は、前年の 40 件から 2.8 倍増の 111 件であった。特に、横浜市での発生件数は 63 件で全体の半数以上を占めた。

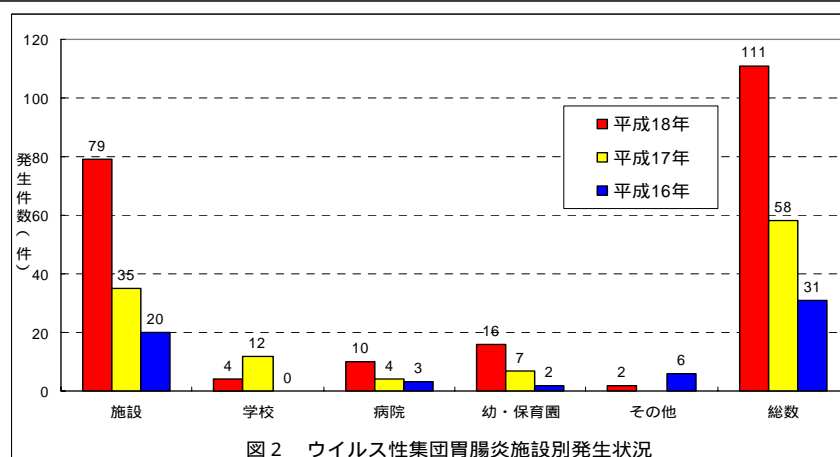
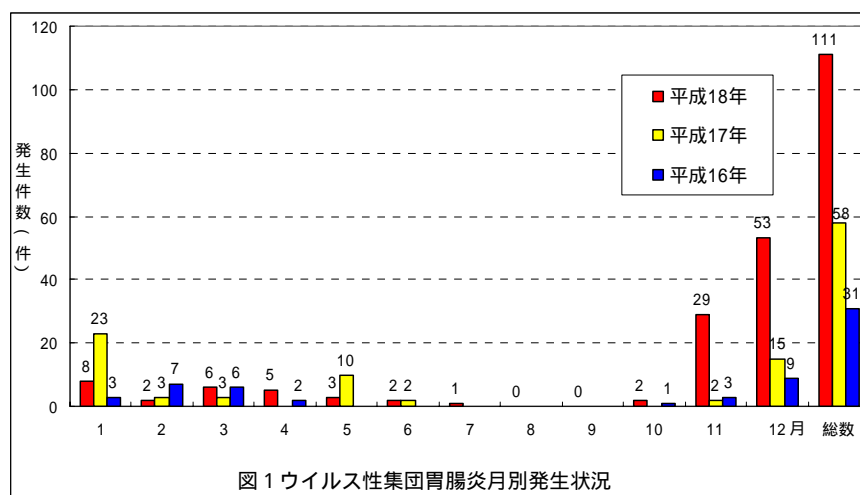
検査人数は 859 人から大幅に増加し 1,411 人で、多忙な年であった。検査人数に対する陽性者数の割合は前年の 56.2% から若干下回り 51.2% であった(表)。

表 ウイルス性感染性胃腸炎集団発生状況

	平成16年				平成17年				平成18年			
	発生事例数(件)	検査件数(人)	陽性数(人)	陽性率(%)	発生事例数(件)	検査件数(人)	陽性数(人)	陽性率(%)	発生事例数(件)	検査件数(人)	陽性数(人)	陽性率(%)
横浜市	11	215	73	34	25	337	230	68	63	815	397	49
川崎市	6	232	63	27	12	217	91	42	15	111	55	50
横須賀市	3	37	6	16	1	36	9	25	10	217	116	53
相模原市	2	13	8	62	2	39	20	51	1	7	7	100
藤沢市	/	/	/	/	/	/	/	/	3	13	11	85
上記を除く神奈川県	9	272	122	45	18	230	133	58	19	248	137	55
計	31	769	272	35	40	859	483	56	111	1,411	723	51

次に、平成 16 年以降 3 年間の月別発生状況では、平成 17 年は 1 月、5 月、12 月に多発したが、平成 18 年は 11 月、専ら 12 月に多発した(図 1)。

施設別では、平成 18 年は老人施設が全体の 71% の 79 件、幼・保育園が 14% の 16 件であった。また病院も 10% 弱の 10 件が発生した(図 2)。



(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

神奈川県衛生研究所

神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)ではウイルスが原因の集団胃腸炎が19事例発生した。ノロウイルスが18事例より検出され、その遺伝子群は18事例すべてGであった。3月におこった1事例では、ノロウイルスが4検体からとA群ロタウイルスが1検体から検出された。

この事例の主たる原因ウイルスはノロウイルスであると推測されたが、同じ施設で異なったウイルスが流行する可能性も示唆された。その他にはA群ロタウイルスが1事例より検出された。

今年、事例数も施設区分の割合も昨年と同程度であった。検出されたウイルスは1事例を除いて、ノロウイルスによるものであり、全国的なノロウイルスの流行状況と一致していた。

(宮原香代子、原田美樹、片山 丘、古屋由美子、尾上洋一、新川隆康)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果 神奈川県衛生研究所

番号	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群	備考
1	H18.1	施設	13	10	3	ノロウイルス	G	
2	H18.1	病院	24	7	3	ノロウイルス	G	
3	H18.1	学校	不明	2	2	ノロウイルス	G	
4	H18.1	施設	10	9	6	ノロウイルス	G	
5	H18.2	施設	32	3	1	ノロウイルス	G	
6	H18.3	施設	16	27	5*	ノロウイルス	G	*:A群ロタウイルス 検出の1検体を含む
7	H18.3	施設	20	24	11	A群ロタウイルス		
8	H18.4	学校	42	11	10	ノロウイルス	G	
9	H18.5	学校	19	3	3	ノロウイルス	G	
10	H18.10	病院	24	5	4	ノロウイルス	G	
11	H18.11	施設	9	7	3	ノロウイルス	G	
12	H18.11	施設	15	14	6	ノロウイルス	G	
13	H18.11	保育園	50	70	46	ノロウイルス	G	
14	H18.12	施設	4	2	2	ノロウイルス	G	
15	H18.12	幼稚園	16	3	3	ノロウイルス	G	
16	H18.12	施設	5	14	5	ノロウイルス	G	
17	H18.12	施設	17	31	18	ノロウイルス	G	
18	H18.12	施設	37	4	4	ノロウイルス	G	
19	H18.12	施設	19	2	2	ノロウイルス	G	
			372	248	137			

(3) 横浜市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

横浜市衛生研究所

平成18年における横浜市内で発生した感染症としての集団発生事例の取扱事例数は99事例であった。ノロウイルスが64事例より検出され、その遺伝子群はGが63事例、Gが1事例であり、Gが大部分を占め全国の状況と一致していた。その他にサポウイルスが1事例、A群ロタウイルスが4事例、C群ロタウイルスが1事例より検出された。このうちサポウイルスを原因とする保育園の事例は、横浜市内で初めて確認されたサポウイルスの集団発生であった。

(野口有三、宇宿秀三、熊崎真琴、佐々木一也)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果 横浜市衛生研究所

番号	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群
1	H18.1	病院	?	5	5	ノロウイルス	G
2	H18.1	施設	?	20	6	ノロウイルス	G
3	H18.1	保育園	?	14	6	A群ロタウイルス	
4	H18.3	保育園	9	3	2	A群ロタウイルス	
5	H18.3	保育園	16	10	6	C群ロタウイルス	
6	H18.4	施設	20	28	7	ノロウイルス	G
7	H18.4	施設	?	3	1	A群ロタウイルス	
8	H18.4	病院	?	13	10	ノロウイルス	G
9	H18.5	保育園	?	13	8	ノロウイルス	G
10	H18.5	保育園	?	3	3	A群ロタウイルス	
11	H18.6	幼稚園	10	67	50	サポウイルス	
12	H18.6	幼稚園	?	2	2	ノロウイルス	G
13	H18.7	病院	20	29	15	ノロウイルス	G
14	H18.10	保育園	?	24	16	ノロウイルス	G
15	H18.11	施設	?	25	11	ノロウイルス	G
16	H18.11	学校	?	31	8	ノロウイルス	G
17	H18.11	施設	8	13	8	ノロウイルス	G
18	H18.11	施設	12	5	3	ノロウイルス	G
19	H18.11	保育園	?	16	6	ノロウイルス	G
20	H18.11	施設	40	44	14	ノロウイルス	G
21	H18.11	病院	26	22	15	ノロウイルス	G
22	H18.11	施設	?	29	11	ノロウイルス	G
23	H18.11	施設	?	13	9	ノロウイルス	G
24	H18.11	保育園	?	7	3	ノロウイルス	G
25	H18.11	病院	?	29	7	ノロウイルス	G
26	H18.11	保育園	?	3	3	ノロウイルス	G
27	H18.11	保育園	?	15	8	ノロウイルス	G
28	H18.11	保育園	?	20	15	ノロウイルス	G
29	H18.11	施設	18	26	9	ノロウイルス	G
30	H18.11	施設	?	15	10	ノロウイルス	G
31	H18.11	施設	?	3	3	ノロウイルス	G
32	H18.11	施設	8	49	11	ノロウイルス	G
33	H18.11	施設	16	19	4	ノロウイルス	G
34	H18.11	施設	18	30	14	ノロウイルス	G
35	H18.12	施設	?	2	1	ノロウイルス	G
36	H18.12	施設	?	5	4	ノロウイルス	G
37	H18.12	施設	12	6	2	ノロウイルス	G
38	H18.12	施設	13	7	5	ノロウイルス	G
39	H18.12	施設	3	3	1	ノロウイルス	G
40	H18.12	施設	5	5	4	ノロウイルス	G
41	H18.12	施設	8	25	7	ノロウイルス	G
42	H18.12	病院	?	3	3	ノロウイルス	G
43	H18.12	施設	6	6	5	ノロウイルス	G
44	H18.12	施設	?	1	1	ノロウイルス	G
45	H18.12	施設	18	1	1	ノロウイルス	G
46	H18.12	施設	?	1	1	ノロウイルス	G
47	H18.12	施設	?	4	3	ノロウイルス	G
48	H18.12	施設	?	6	2	ノロウイルス	G
49	H18.12	施設	15	7	5	ノロウイルス	G
50	H18.12	施設	?	14	6	ノロウイルス	G
51	H18.12	病院	?	2	2	ノロウイルス	G
52	H18.12	施設	32	4	3	ノロウイルス	G
53	H18.12	施設	17	1	1	ノロウイルス	G
54	H18.12	施設	6	3	2	ノロウイルス	G
55	H18.12	施設	11	6	0	ノロウイルス	G
56	H18.12	施設	39	34	15	ノロウイルス	G
57	H18.12	その他	6	5	2	ノロウイルス	G
58	H18.12	施設	?	2	1	ノロウイルス	G
59	H18.12	保育園	21	3	1	ノロウイルス	G
60	H18.12	施設	?	4	4	ノロウイルス	G
61	H18.12	施設	?	1	1	ノロウイルス	G
62	H18.12	施設	?	3	2	ノロウイルス	G
63	H18.12	施設	?	3	3	ノロウイルス	G

815 397

(4) 川崎市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

川崎市衛生研究所

川崎市ではノロウイルスを原因とした集団胃腸炎が14例発生した。検出された遺伝子群はすべてGであった。また、ロタウイルスを原因とした集団胃腸炎が1例発生し、A群であった。

(奥山恵子、平位芳江)

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果 川崎市衛生研究所

番号	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群
1	H18.1	施設	27	19	8	ノロウイルス	G
2	H18.2	施設	60	10	7	ノロウイルス	G
3	H18.4	施設	18	4	2	ロタウイルス	A群
4	H18.11	施設	8	14	5	ノロウイルス	G
5	H18.11	病院	45	5	4	ノロウイルス	G
6	H18.11	施設	111	9	9	ノロウイルス	G
7	H18.12	施設	64	15	4	ノロウイルス	G
8	H18.12	施設	23	3	1	ノロウイルス	G
9	H18.12	施設	42	5	4	ノロウイルス	G
10	H18.12	施設	86	5	2	ノロウイルス	G
11	H18.12	施設	33	5	2	ノロウイルス	G
12	H18.12	乳幼児施設	16	3	2	ノロウイルス	G
13	H18.12	施設	36	4	2	ノロウイルス	G
14	H18.12	施設	35	3	1	ノロウイルス	G
15	H18.12	施設	3	7	2	ノロウイルス	G
			607	111	55		

(5) 横須賀市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

横須賀市健康安全科学センター

横須賀市ではノロウイルスが原因の集団胃腸炎が10事例発生した。検出遺伝子群は全てGであった。

表 ウイルス性集団胃腸炎の検出結果 横須賀市健康安全科学センター

番号	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群
1	H18.3	施設	6	33	6	ノロウイルス	G
2	H18.3	施設	35	47	4	ノロウイルス	G
3	H18.11	施設	32	32	24	ノロウイルス	G
4	H18.12	施設	25	18	12	ノロウイルス	G
5	H18.12	施設	4	2	2	ノロウイルス	G
6	H18.12	施設	35	21	21	ノロウイルス	G
7	H18.12	施設	46	37	23	ノロウイルス	G
8	H18.12	施設	8	6	6	ノロウイルス	G
9	H18.12	施設	14	14	13	ノロウイルス	G
10	H18.12	施設	10	7	5	ノロウイルス	G
			215	217	116		

(6) 相模原市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

相模原市衛生試験所

平成18年1月から平成18年12月の間に、ノロウイルスを原因とした感染症としての集団胃腸炎

で、当所において検査を行ったものが1例発生した。検出された遺伝子群はすべてGであった。

(清水寿美子、田向香織、前谷史恵、笹野亜也子、青木響子)

番号	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群
1	H18.11	施設	38	7	7	ノロウイルス	G
			38	7	7		

(7) 藤沢市のウイルスによる集団胃腸炎の検査結果

藤沢市保健所

平成18年4月から平成18年12月の間に、ノロウイルスを原因とした感染症としての集団胃腸炎が3例発生した。検出された遺伝子群はすべてGであった。

(佐藤 健、今井良美、東上門真哲、安田哲夫)

番号	発生年月	施設区分	発症者数	検査数	検出数	検出ウイルス	遺伝子群
1	H18.11	施設	37	6	5	ノロウイルス	G
2	H18.12	施設	51	4	3	ノロウイルス	G
3	H18.12	施設	13	3	3	ノロウイルス	G
			101	13	11		

4 ウエストナイル熱

(1) 概況

(編集事務局)

神奈川県内では、平成15年からウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランスを行っており、平成18年は35箇所、9,168匹を採取し検査したが、全ての検体でウエストナイルウイルス遺伝子は検出されなかった(表)。

表 ウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

検査機関	平成15年			平成16年			平成17年			平成18年		
	採取箇所数(箇所)	検体数(匹)	WNV遺伝子検出件数(件)	採取箇所数(箇所)	検体数(匹)	WNV遺伝子検出件数(件)	採取箇所数(箇所)	検体数(匹)	WNV遺伝子検出件数(件)	採取箇所数(箇所)	検体数(匹)	WNV遺伝子検出件数(件)
横浜市衛生研究所	20	2,168	0	22	8,637	0	25	6,587	0	23	8,356	0
川崎市衛生研究所	7	301	0	7	329	0	12	1,293	0	11	776	0
横須賀市健康安全科学センター	1	11	0	1	18	0	1	14	0	1	36	0
神奈川県衛生研究所	2	29	0	2	36	0	2	44	0	3	12	0
計	28	2,480	0	30	8,984	0	38	7,894	0	35	9,168	0

(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)のウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

神奈川県衛生研究所

近年、アメリカではウエストナイルウイルスが流行し、ウエストナイル熱・脳炎患者が発生している。ウエストナイル熱・脳炎はウエストナイルウイルスに感染したイエカやヤブカなどの蚊に刺されることによって起こる病気である。ウエストナイルウイルスは自然界においては、鳥と蚊の間で感染環が維持されている。これまで日本では患者の発生はなく、成田空港周辺等、一部の地域で行われていた鳥や蚊等の調査でもウエストナイルウイルスは検出されてはいない。しかし、ウエストナイルウイルスの侵入監視・流行予測の観点から、県域の蚊を捕獲しウエストナイルウイルス遺伝子の検出を試みた。

蚊は平成18年7月から10月までの期間に、月1回合計4回、厚木保健所管内、大和保健所管内の2箇所所で、捕虫機(ライトトラップ)を用いて捕獲した。

捕獲された蚊は、ヒトスジシマカ(メス)12匹と同定された。これらの蚊を3プールとして遺伝子検査を行ったが、すべての検体でウエストナイルウイルス遺伝子は検出されず、ウエストナイルウイルスの感染は確認されなかった。今後もウエストナイルウイルスの動向を監視するために、蚊の調査を継続する必要があると考えられた。

(古屋由美子、原田美樹、稲田貴嗣、尾上洋一、新川隆康)

表 ウエストナイルウイルス遺伝子検出状況

検体番号	採取月日	採取場所	蚊の種類	匹数	結果
1	7月10, 11日	厚木・大和保健所	ヒトスジシマカ	3	陰性
2	8月14, 15日	厚木・大和保健所	ヒトスジシマカ	8	陰性
3	10月1日	厚木保健所	ヒトスジシマカ	1	陰性

(3) 横浜市のウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

横浜市衛生研究所

近年、米国における WNV の流行に伴い、横浜市は行政的な防疫対策として死亡カラスと蚊を用いた WNV のサーベイランス事業を平成 15 年 7 月 15 日から実施している。

蚊における調査は、昨年度と同様にドライアイス併用のライトトラップにより採集された蚊を用いて行った。ライトトラップの設置場所は、環境創造局管理の公園計 18 箇所（各区 1 箇所）及び港湾局管理の敷地内 2 箇所の合計 20 箇所と、中区の独自事業の 2 箇所（大榎橋と本牧市民公園）と鶴見区の独自事業 1 箇所（大黒町スポーツ公園）の総計 23 箇所である。採集方法としては、毎週火曜日の夕方にライトトラップを設置し、翌日の朝にライトトラップと採集された蚊を回収する方法で行い、午前中までに当所へ蚊が搬入された。これら一連のライトトラップの設置、検体（死亡カラスと蚊）の回収、当所への検体の搬送に関しては、神奈川県ペストコントロール協会に委託して実施した。蚊の採集期間

表 横浜市の WNV 検査結果

区名	トラップ設置公園	回数 2006年 トラップ設置日	1~3	4~7	8~12	13~16	17~20	総計	内 訳					
			6月 集計	7月 集計	8月 集計	9月 集計	10月 集計		アカイ カ群	ヒトスジ シマカ	コガタア カイカ	ヤマトヤ ブカ	その他	
環境創造局(公園)トラップ設置場所		住所												
1	鶴見 馬場花木園	馬場2-20-1	58	212	271	192	21	754	21	713	2	5	13	
2	神奈川 三ツ沢公園	三ツ沢西町3-1	20	95	157	99	38	409	17	371	2	4	15	
3	西 野毛山公園	老松町63-10	46	106	77	30	10	269	192	52	0	11	14	
4	中 根岸森林公園	根岸台	35	146	179	82	12	454	269	128	5	35	17	
5	南 清水ヶ丘公園	清水が丘73-1	26	27	24	6	7	90	39	27	0	10	14	
6	港南 久良岐公園	上大岡東3-12-1	4	20	13	8	17	62	4	37	0	0	21	
7	保土ヶ谷 横浜市児童遊園地	狩場町213	38	33	29	16	14	130	55	36	0	9	30	
8	旭 こども自然公園	上大池町65	11	32	90	28	7	168	84	68	1	5	10	
9	磯子 根岸なつかし公園	下町86	28	37	63	53	26	207	37	121	2	17	30	
10	金沢 長浜公園	長浜106-6	5	26	104	41	39	215	11	190	0	3	11	
11	港北 岸根公園	岸根町725	23	44	98	32	20	217	146	60	3	2	6	
12	緑 霧が丘公園	霧が丘5-24	4	7	109	62	2	184	2	107	1	72	2	
13	青葉 桜台公園	桜台42	0	5	51	37	7	100	1	83	0	15	1	
14	都筑 都筑中央公園	茅ヶ崎中央57	1	15	34	31	12	93	2	55	0	15	21	
15	戸塚 舞岡公園	舞岡町1703	4	16	22	34	20	96	11	20	1	7	57	
16	栄 飯島わんわん公園	飯島町2908-2	8	27	78	70	34	217	13	176	0	6	22	
17	泉 泉中央公園	和泉町3026-1	20	25	70	38	26	179	8	107	0	6	58	
18	瀬谷 瀬谷狹路公園	阿久和西3-52-6	11	22	44	20	15	112	2	37	0	34	39	
港湾局トラップ設置場所														
19	中 シンボルタワー	本牧埠頭1-16	81	249	387	168	78	963	559	94	303	0	7	
20	鶴見 大黒中央公園	大黒埠頭1	32	120	303	58	83	596	87	450	52	4	3	
中区独自事業														
21	中 大榎橋	海岸通1丁目	3	5	5	1	3	17	17	0	0	0	0	
22	中 本牧市民公園	三之谷59	0	31	179	50	126	386	27	347	0	2	10	
鶴見区独自事業														
23	鶴見 大黒町スポーツ広場	大黒町4	254	668	814	702	30	2468	526	1414	22	0	506	
総 計			712	1968	3201	1858	647	8386	2130	4693	394	262	907	
WNV遺伝子の検出結果			(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)						
JEV遺伝子の検出結果			(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)						

(備考) 蚊の種類の中には、キンバラナガハシカ等が含まれる

は、6月13日から10月23日までの全20週実施し、検査した蚊の総個体数は、8,386匹であった。

蚊の種類別ではアカイエカ群2,130匹、ヒトスジシマカ4,693匹、コガタアカイエカ394匹、ヤマトヤブカ262匹、その他907匹であった。WNVと日本脳炎ウイルス(JEV)の検査結果は、全て不検出であった。

(野口有三、宇宿秀三、熊崎真琴、小曾根恵子、伊藤真弓、佐々木一也)

(4) 川崎市のウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

川崎市衛生研究所

市内7箇所の保健所に設置したライトトラップに捕獲された蚊を毎週1回採取し、平成18年4月5日から11月29日まで(全35週138回)の蚊におけるウエストナイルウイルスの保有状況138件、また、ヒトスジシマカにおいてはデングウイルスの保有状況49件も併せて調査した。

市内4箇所の公園に設置したライトトラップに捕獲された蚊を毎週1回採取し、平成18年6月12日から10月24日まで(全20週105回)の蚊におけるウエストナイルウイルスの保有状況105件を、また、ヒトスジシマカにおいてはデングウイルスの保有状況41件も調査した。

検査はPCR法を用いて行った。776匹の蚊においてウエストナイルウイルス遺伝子はすべて陰性であった。また、ヒトスジシマカ325匹のデングウイルス遺伝子もすべて陰性であった。蚊の種類はアカイエカ群が全体の43.8%(340/776)、ヒトスジシマカが41.9%(325/776)、オオクロヤブカ3.4%(26/776)、ヤマトヤブカ8.1%(63/776)、コガタアカイエカは2.6%(20/776)であった。

(清水英明 平位芳江)

表 川崎市のWNVサーベイランス調査における蚊の月別および種別採集数

採取日2006年		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	総計	
保健所 検査分	川崎保健所	1	3	6	9	8	5	3	1	36	
	幸保健所	3	1	2	2	7	3	2		20	
	中原保健所			2	2	1	1	2		8	
	高津保健所	1	1	2	4	5	3	5	1	22	
	宮前保健所				1	1		4	1	7	
	多摩保健所	1	1		2	3	2		1	10	
	麻生保健所		3	5	6	10	7	2	2	35	
	合計	6	9	17	26	35	21	18	6	138	
	蚊の種類										
	アカイエカ群	9	11	32	30	25	11	13	5	136	
	ヒトスジシマカ		2	7	15	38	12	6		80	
	コガタアカイエカ					1	3		1	5	
	ヤマトヤブカ		1		2	1		1		5	
	カツライエカ						1			1	
総計	9	14	39	47	65	27	20	6	227		
ウエストナイルウイルス遺伝子の検出結果	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	
デングウイルス遺伝子の検出結果		陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性			陰性	

採取日2006年		6月	7月	8月	9月	10月	総計	
公園 検査分	東扇島中公園	4	5	7	8	5	29	
	夢見ヶ崎動物公園	5	7	7	5	3	27	
	緑ヶ丘霊園	4	7	6	4	6	27	
	早野聖地公園	4	5	6	3	4	22	
	合計	17	24	26	20	18	105	
	蚊の種類							
	アカイエカ群	25	64	46	30	39	204	
	ヒトスジシマカ	22	58	113	35	17	245	
	コガタアカイエカ			15			15	
	ヤマトヤブカ	1	16	27	9	5	58	
	オオクロヤブカ	4	6	3	3	10	26	
	キンバラナガハシカ			1			1	
	総計	52	144	205	77	71	549	
	ウエストナイルウイルス遺伝子の検出結果	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性
デングウイルス遺伝子の検出結果	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	陰性	

備考 検体は全てメス

(5) 横須賀市のウエストナイル熱媒介蚊のサーベイランス

横須賀市健康安全科学センター

ウエストナイル熱媒介蚊の調査として平成 18 年 7 月より 10 月まで計 4 回、横須賀市健康安全科学センター敷地内にて蚊を捕獲(ドライアイス併用 CDC 型ライトトラップ法)し、分類した後、RT-PCR 法によるウエストナイルウイルス遺伝子検査を実施した。結果は、表に示すとおり捕獲した 36 匹の蚊(イエカ類 30 匹、ヤブカ類 6 匹)から遺伝子は検出されなかった。

今後もウエストナイルウイルスの国内侵入、流行、拡大を防止するため、引き続き調査を行い監視することが必要と思われる。

(沼田和也)

表 ウエストナイルウイルス遺伝子検査結果(平成 18 年)

	採取日	種類	匹数	結果
7 月分	6月29日	イエカ類	3	陰性
8 月分	8月1日	イエカ類	7	陰性
8 月分	8月1日	ヤブカ類	2	陰性
9 月分	8月31日	イエカ類	12	陰性
9 月分	8月31日	ヤブカ類	2	陰性
10 月分	10月2日	イエカ類	8	陰性
10 月分	10月2日	ヤブカ類	2	陰性
計			36	

5 その他のウイルス性感染症

(1) 日本脳炎

ア 概況

(編集事務局)

全国では日本脳炎患者は毎年5~8人程度の報告があるが、神奈川県内では平成2年を最後に発生報告はない。神奈川県衛生研究所では豚の日本脳炎ウイルス抗体保有状況調査を行っており、豚の日本脳炎ウイルス抗体の保有率は低い。また、横浜市衛生研究所ではウエストナイルウイルス(WNV)のサーベイランス事業として採取した蚊の日本脳炎ウイルスの検査を実施しており、蚊から日本脳炎ウイルスは検出されていない(42ページ参照)。

イ 神奈川県((横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の日本脳炎感染源調査

神奈川県衛生研究所

近年におけるわが国の日本脳炎患者は、西日本を中心に発生が見られている。日本脳炎ウイルスの侵淫度を追跡し流行予測を行うため、豚の日本脳炎ウイルス抗体保有状況を調査した。

神奈川県食肉センターに持ち込まれた生後5~8ヵ月齢の県内産の豚を対象に、平成18年7月から9月までの期間に、8回、20頭ずつ、計160頭について、血中のJaGAr01株に対する血球凝集抑制抗体及び2-メルカプトエタノール感受性抗体をそれぞれ測定した。

その結果8月に検査した60検体中2検体から血球凝集抑制抗体が検出されたが、2-メルカプトエタノール感受性抗体は検出されなかった。この結果より、今年度は県内での日本脳炎ウイルスの活動は確認されなかった。神奈川県では平成18年度も平成17年度と同様に、患者発生はなかった。

(原田美樹、古屋由美子、尾上洋一、新川隆康)

表 日本脳炎ウイルスに対するHI抗体保有状況

採血月日	検査数	HI抗体価						抗体陽性率 (%)	2-メルカプトエタノール 感受性抗体保有率(%)
		<10	10	20	40	80	160		
7.18	20	20						0.0	
7.27	20	20						0.0	
8. 8	20	20						0.0	
8.17	20	20						0.0	
8.29	20	18		1	1			10.0	0/2=0.0%
9. 5	20	20						0.0	
9.14	20	20						0.0	
9.28	20	20						0.0	

(2) 神奈川県((横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の麻疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

昭和53年から義務接種として始まった、わが国の麻疹ワクチンの接種は、平成6年10月の予防接種法改正にともない勧奨性に変わった。小児の麻疹ウイルスに対する免疫状態を把握しておくことが必要なことから、昭和54年以降、麻疹ウイルスに対する抗体の保有状況調査を行っている。

平成18年8月から12月の間に採取された小児の血清86例について麻疹ウイルス抗原を吸着してあるゼラチン粒子による凝集反応法で麻疹ウイルスに対する抗体の測定を行った。

年齢別の抗体保有率は1歳以下が66.7%、他の年齢層（2～14歳）は86.7～100%を示し、平均抗体保有率は88.4%であった。

今後も継続して麻疹ウイルスに対する抗体保有状況の把握を行うとともに、予防接種の必要性和麻疹に関する適切な知識を普及してゆくことが大切と思われる。

（古屋由美子、片山 丘、尾上洋一、新川隆康）

表 麻疹抗体保有状況

抗体価 年齢（歳）	平成18年（採血 18年8月～12月）										17年	16年	15年	14年	
	PA抗体価									検査数 （人）	陽性率 （%）	陽性率 （%）	陽性率 （%）	陽性率 （%）	
	<8	8	16	32	64	128	256	512	1024						
0～1	5			3	1			3	3	15	66.7	61.5	73.7	76.2	46.7
2～3						1		2	6	9	100.0	100.0	100.0	100.0	76.9
4～5	1				1		5	5	6	18	94.4	100.0	100.0	100.0	100.0
6～7						2	1	2	3	8	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
8～9						3	1	1	1	6	100.0	92.9	100.0	100.0	76.9
10～14	4					9	8	1	8	30	86.7	93.5	93.9	88.5	96.6
合計（人） （%）	10 11.6	0 0.0	0 0.0	3 3.5	2 2.3	15 17.4	15 17.4	14 16.3	27 31.4	86 100.0	88.4 100.0	91.2	92.2	90.7	83.1

（3）神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く）の風しん抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

風しん流行の予測とその推移を知るため、住民の風しんウイルスに対する感受性の実態を把握しておくことは重要である。

平成18年においては、一般健康人男女186名を対象として、風しんウイルスに対する赤血球凝集抑制抗体の測定を行った。

結果は年齢別抗体保有状況を陰性率で見ると、1歳以下50.0%、1～4歳5.0%、5～9歳20.0%、10～14歳25.0%、15歳以上0.0～36.4%となり平均陰性率は16.7%であった。

次に抗体価をみると16～256倍が71.5%を占め、平均抗体価は $2^{5.9}$ であった。

以上の成績より、抗体保有率の低い年齢層が今後の感染と流行の主体になると考えられる。これらの年齢層の抗体保有状況の推移を監視するとともに、妊娠前および妊娠可能年齢層への風しんワクチン接種は継続して奨励する必要があると思われる。

（古屋由美子、片山 丘、尾上洋一、新川隆康）

表 風しん抗体保有状況

抗体価 年齢（歳）	平成18年（採血 18年8月～12月）										17年	16年	15年	14年	
	HI抗体価									検査数 （人）	陰性率 （%）	陰性率 （%）	陰性率 （%）	陰性率 （%）	
	<8	8	16	32	64	128	256	512	1024						
<1	3	1	1	1						6	50.0	70.0	12.5	50.0	38.5
1～4	1	1	6	4	4	2	2			20	5.0	25.0	35.0	30.0	41.2
5～9	4	3	3	5	4	1				20	20.0	10.0	5.0	10.0	20.0
10～14	5		5	8	2					20	25.0	45.0	40.0	35.0	35.0
15～19	6	2	4	4	3	1				20	30.0	15.0	20.0	20.0	10.0
20～24	4	2		3	1		1			11	36.4	25.0	25.0	25.0	22.2
25～29	4	2	3	4	5	1				19	21.1	21.4	10.5	22.2	20.0
30～34	1		2	3	6	2	3			17	5.9	12.5	6.3	12.5	14.3
35～39		2		4	5	2				13	0.0	7.1	14.3	0.0	26.7
40～49	1	1	2	5	7	2	1		1	20	5.0	20.0	15.0	30.0	15.0
50	2	7	4	3	3		1			20	10.0	10.0	5.0	5.0	5.0
合計（人） （%）	31 16.7	21 11.3	30 16.1	44 23.7	40 21.5	11 5.9	8 4.3	0 0.0	1 0.5	186 100.0	16.7 100.0	22.1	17.5	20.4	21.8

細菌性感染症

1 腸チフス・パラチフス

(1) 概況

(編集事務局)

平成 18 年に報告のあった腸チフスは 10 件、パラチフスは 1 件であった。チフスの市域別発生状況は横浜市 7 件、川崎市で 3 件、藤沢市 1 件で、いずれも海外由来であった。前年 17 年に比べ腸チフスは 8 件の増、パラチフスは 5 件の減であった(3 ページ参照)。

(2) 横浜市のチフス菌等のファージ型別結果

横浜市衛生研究所

平成 18 年 1 月～12 月の間に横浜市内で分離されたチフス菌は 6 件で、パラチフス A 菌は 1 件であった。チフス菌、パラチフス A 菌共に全ての株は海外旅行歴のある日本人の患者から分離されており、旅行先はチフスの 1 人がインドネシア、チフスの 4 人がインド、チフスの 1 人がインドおよびネパール、パラチフスの 1 人がインド、ネパール、タイであった。これらの菌は静脈血または糞便から分離された。情報とチフス菌のファージ型別内訳は表に示したとおりである。薬剤感受性は、インドネシア由来の 1 株を除きインド亜大陸周辺国由来の 6 株はナリジクス酸耐性で、チフスまたはパラチフスと診定される前にフルオロキノロン系薬剤を服用しているものの解熱しない例が報告されている。また、インド由来のチフス 3 株は 5 剤または 6 剤に耐性を示しており今後とも薬剤感受性の動向を監視していきたい。

(松本裕子、山田三紀子、武藤哲典)

表 横浜市のチフス菌等のファージ型別結果

番号	分離月日	性別	年齢	菌種	ファージ型	備考
1	1.20	男	43	チフス	UVS2	インドネシアへ渡航
2	3.30	男	26	チフス	E1	インドへ渡航
3	4.10	男	26	チフス	E1	インドへ渡航
4	5.11	男	26	チフス	E1	インドへ渡航
5	6.10	女	25	パラチフスA	1	インド、ネパール、タイへ渡航
6	10.5	男	21	チフス	E9	インド、ネパールへ渡航
7	11.6	男	10	チフス	E1	インドへ渡航

(3) 川崎市のチフス菌等のファージ型別結果

川崎市衛生研究所

平成 18 年 1～12 月に川崎市内で分離されたのはチフス菌 2 件であり、詳細は表に示したとおりである。

(小嶋由香)

表 川崎市のチフス菌等のファージ型別結果

番号	分離月日	性別	年齢	菌種	ファージ型	備考
1	4.13	男	29	チフス	B1	妻がフィリピンに渡航
2	9.12	男	27	チフス	DVS	バングラディッシュに渡航

3 細菌性腸管系感染症

(1) 概況

(編集事務局)

平成 18 年の腸管出血性大腸菌感染症は 2 年続けて増加し、210 件であった。県域が 38 件から 67 件、横浜市が 76 件から 64 件へ減少、藤沢市が 7 件から 31 へと大幅増となった(3 ページ参照)。

(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の腸管出血性大腸菌の分離状況

神奈川県衛生研究所

腸管出血性大腸菌(Enterohemorrhagic *Escherichia coli*: EHEC)の患者が確認された場合には、各医療機関は直ちに所轄の保健所に報告し、これを受けて、所轄保健所は分離された菌株を衛生研究所に送付している。衛生研究所では、集められた菌株について生化学的性状、血清型、毒素型等を確認し、必要に応じてパルスフィールド・ゲル電気泳動(PFGE)法による分子疫学調査を実施している。

神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)における平成 18 年 1 月~12 月の腸管出血性大腸菌(EHEC)の分離株数は、O157 が 45 株、O26 が 8 株、O28ac 1 株および O 血清型不明(OUT)が 1 株の計 55 株で、とくに 7 月から 9 月にかけて多く分離された。表 1 に所轄保健福祉事務所の分離数と毒素型を、表 2 に月別分離状況を示した。

今年度、注目すべき事例として、8 月 28 日から 9 月 7 日にかけて茅ヶ崎および平塚保健所管内において発生した O157(*Stx1*・2)による事例があげられる。8 月後半に茅ヶ崎と平塚の 2 家族(6 人)が関連した同一食を感染源とする O157(*Stx1*・2)による感染が報告され、また、同時期に O157(*Stx1*・2)分離株 23 株が送付された。地域における感染拡大を懸念して PFGE 法による分子疫学調査を実施したところ、2 家族から分離された 6 株と平塚の散発事例と報告された 4 株の計 10 株で PFGE パターンが一致したことから同一の感染源による散発的集団事例の可能性が示唆された。この事例では、横浜市・川崎市および相模原市にご協力頂き、PFGE パターンの映像を電送して注意を喚起すると同時に、分与して頂いた菌株について PFGE 解析を実施して比較検討した結果、この事例と一致する PFGE パターンは確認できなかった。

(石原ともえ、伊東久美子、黒木俊郎)

表 1 所轄保健福祉事務所における EHEC の分離状況(平成 18 年)

保健福祉事務所	O157		O26	O28ac	OUT	合計
	(<i>Stx1</i> ・2)	(<i>Stx2</i>)	(<i>Stx1</i>)	(<i>Stx2</i>)	(<i>Stx1</i> ・2)	
茅ヶ崎	12	3				15
平塚	8	1	1		1	11
鎌倉		2	2	1		5
厚木	9	2	1			12
大和	4					4
小田原	3		3			6
足柄上			1			1
秦野	1					1
合計	37	8	8	1	1	55

表2 所轄保健福祉事務所における EHEC の月別分離状況(平成 18 年)

保健福祉事務所	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
茅ヶ崎			1	2		1		8	1		2		15
平塚			1		2		2	3	3				11
鎌倉			1	1	1	1	1						5
厚木			2			1	3	5	1				12
大和							3	1					4
小田原					1	1	3	1					6
足柄上					1								1
秦野										1			1
合計			5	3	5	4	12	18	5	1	2		55

(3) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の赤痢菌の検出

神奈川県衛生研究所

平成 18 年に神奈川県(横浜・川崎・横須賀・相模原市および藤沢市を除く)において報告のあった細菌性赤痢は 11 件であるが、当所において分離された赤痢菌の内訳は 6 株(表)で、すべて *Shigella sonnei* であった。

(石原ともえ、伊東久美子、黒木俊郎)

表 分離された赤痢菌の血清型

番号	所轄保健所	分離月	性別	年齢	菌種	渡航歴
1	秦野	4	男	40	<i>S. sonnei</i>	インドネシア
2	平塚	5	女	1	<i>S. sonnei</i>	カンボジア
3	平塚	5	女	30	<i>S. sonnei</i>	マレーシア
4	厚木	7	男	62	<i>S. sonnei</i>	中国・マレーシア
5	鎌倉	11	女	23	<i>S. sonnei</i>	ベトナム
6	厚木	12	男	7	<i>S. sonnei</i>	インド

(4) 搾乳体験で腸管出血性大腸菌 O157 による感染が疑われた事例

横浜市衛生研究所

2006 年 10 月 2 日、市内 A 区在住の 1 歳女児 1 名が腸管出血性大腸菌 O157(以下 O157)感染症と診断され、福祉保健センターに届け出があった。10 月 3 日に採取されたその家族 4 名の便検査を当所において実施したところ、5 日に 9 歳の兄からも O157:H7(VT1&2)が検出された。

この家族は 9 月 24 日に 5 名で B 区の牧場の搾乳体験に参加し、子供 3 名がウシの搾乳とミニ動物園で触れあい体験をしていたことが判明した。また、搾乳体験用のウシ 2 頭とその近くで飼育されていたウシ 3 頭計 5 頭の糞便より O157 の検出を当所で試みた。

その結果 2 頭から O157:H7(VT1&2)が検出され、うち 1 頭は 23 日の搾乳体験牛であった。これらヒト由来 2 株とウシ由来 2 株の Xba を用いたパルスフィールド・ゲル電気泳動(PFGE)による分子疫学的解析を行ったところ、同一パターンを示し、搾乳体験による感染事例であることが示唆された。続いて、10 月 14 日に C 区の 3 歳女児(保育園児)が同区のクリニックを受診した。18 日に O157:H7(VT1&2)が検出され、福祉保健センターに届け出がされた。

21日に生後11ヶ月の弟(保育園児)からO157:H7(VT1&2)が検出された。この家族も9月23日に4名で同牧場の搾乳体験をしていた。この2株のPFGEによる解析結果は、前記ヒト由来株およびウシ由来株と同一パターンを示し、この事例も、搾乳体験による感染であることが示唆された。10月16日に当該牧場のウシ全47頭について神奈川県の家畜保健衛生所で検査が実施され、11株のO157:H7(VT1&2)が分離された。これら11株の分与を受け、PFGEによる解析を試みた。その結果、11株のうち1株を除いた10株は前記のウシ由来2株およびヒト由来4株と同一パターンを示した。

このような事例の発生の把握や感染源の究明には、疫学的調査の重要性とPFGEによる分子疫学的解析の有用性が改めて認識された。

(武藤哲典 松本裕子 山田三紀子 石黒裕紀子 北爪晴恵 佐々木一也)

(5) 川崎市の下痢症患者からの腸管病原菌検出状況

川崎市衛生研究所

平成18年1月～12月までに川崎市内の医療機関を訪れた下痢症患者を対象にして腸管系病原菌検査を実施した。

材料は、市内医療機関にCary-Blairの輸送培地を配布し、医療機関を訪れた下痢症患者から大便を採取し、保健所を經由して搬入された検体について検査を行った。検査方法は、既報と同様に行った。

病原菌検出状況は表1に示すとおり、検体数698件中腸管病原菌陽性数86件(12.3%)であり、サルモネラ7件(1.0%)、腸管病原性大腸菌(EPEC)9件(1.3%)、腸管出血性大腸菌(EHEC)2件(0.3%)、毒素原生大腸菌(ETEC)1件(0.1%)、腸炎ピブリオ5件(0.7%)、カンピロバクター・ジェジュニ62件(8.9%)、エルシニア・エンテロコリチカ1件(0.1%)、エロモナス・ソブリア1件(0.1%)の検出であり、検出病原菌のうちカンピロバクター・ジェジュニが72.1%を占め、下痢症患者の主要病原菌であった。同一患者から2菌種の病原菌が検出された事例は2事例みられた。

検出病原菌の血清型は表2に示すとおりである。サルモネラは7株分離され、5血清型に型別された。*S. Infantis*が2株、*S. Enteritidis*、*S. Hader*、*S. Typhimurium*、*S. Rissen*がそれぞれ1株ずつであった。EPECは7血清型に型別され、O126、O128が2株ずつ、O55、O111、O146、O157、O166が1株ずつであった。EHECはO157:H7(VT1+VT2)、O145:H-(VT2)が1株ずつ、ETECはO169(ST)が1株であった。腸炎ピブリオは5株分離され、3血清型に型別され、K7、K25、K46が1株ずつ、KUTが2株であった。エルシニア・エンテロコリチカ1件はO3であった。

以上のように本市内の下痢症患者から腸管系病原菌が12.3%検出され、カンピロバクター・ジェジュニが8.9%と最も多く検出された。また、その他の食中毒菌も低率ながら分離されていることから今後も細菌性下痢症の原因菌追究のため検査を強化していく必要があると思われる。

(小嶋由香 本間幸子 須藤始代 駒根綾子 岡田京子 小川正之)

表 1 散発下痢症患者からの病原菌検出状況（平成 18 年）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体数	37	42	43	44	53	64	45	62	61	63	91	93	698
陽性数	3	2	3	3	7	7	11	13*	17	12	7	1	86*
(%)	(8.1)	(4.8)	(7.0)	(6.8)	(13.2)	(10.9)	(24.4)	(21.0)	(27.9)	(19.0)	(7.7)	(1.1)	(12.3)
サルモネラ	1				1			2	1	1	1		7(1.0)
腸管病原性大腸菌				1		1		3*	1	2	1		9(1.3)*
腸管出血性大腸菌								1	1				2(0.3)
毒素原性大腸菌								1					1(0.1)
腸炎ピブリオ							2	2*	1				5(0.7)*
カビ・カンタリウム	2	2	3	2	6	6	9	5*	13	8	5	1	62(8.9)*
エルシニア・インテロコリカ										1			1(0.1)
エロモナス・ソリリア								1*					1(0.1)*

備考：*印は、同一人から 2菌種の病原菌が検出された事例（2事例）

表 2 検出病原菌の血清型（平成 18 年）

病原菌	株数	菌種および血清型
サルモネラ	7	<i>S. Infantis</i> (2)、 <i>S. Enteritidis</i> (1)、 <i>S. Hader</i> (1)、 <i>S. Typhimurium</i> (1)、 <i>S. Rissen</i> (1)、未決定菌(1)
腸管病原性大腸菌	9	O126(2)、O128(2)、O55(1)、O111(1)、O146(1)、O157(1)、O166(1)
腸管出血性大腸菌	2	O157:H7(VT1;VT2)(1)、O145:H-(VT2)(1)
毒素原性大腸菌	1	O169(ST)(1)
腸炎ピブリオ	5	K7(1)、K25(1)、K46(1)、KUT(2)
エルシニア・インテロコリカ	1	O3(1)

(6) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況

横須賀市健康安全科学センター

平成 18 年 1 月から 18 年 12 月に実施した市内各医療機関からの下痢・腹痛を主症状とする患者糞便及び菌株材料の腸管系病原菌検査の結果について報告する。材料は菌株材料 156 件、糞便材料 29 件の合計 185 件で、検査方法は定法により行った。

病原菌検出状況は表 1 に示す。検査した 185 件全ての内、陽性数は 18 件(9.7%)であった。陽性の内訳は、腸管病原性大腸菌が 7 株、腸管出血性大腸菌が 5 株、赤痢菌と毒素原性大腸菌が各々 2 株ずつ、サルモネラ、黄色ブドウ球菌が各々 1 株であった。

検出病原菌の血清型は表 2 に示す。赤痢菌は *S. sonnei* が 2 株、サルモネラは *S. Typhimurium* が 1 株、腸管出血性大腸菌は O26:H11、O157:H7 が各々 2 株、O165:NM が 1 株、毒素原性大腸菌は O6:H16、O25:NM が各々 1 株、腸管病原性大腸菌は O111:H21 が 4 株と最も多く検出され、次いで O128:H12 が 2 株、O126:H27 が 1 株であった。

以上、本年は昨年に比べ腸管出血性大腸菌と腸管病原性大腸菌の検出例が低かったが、腸管出血性大腸菌では当センターにおいて初めて O165:NM が検出された。本年は陽性数も昨年の 15.2% に比べ 9.7% と減少しているが、腸管出血性大腸菌 O165 のような新たな血清型の病原菌も検出されており、今後もこれら散発下痢症患者の病原菌検査について引き続き実施していく。

(山口純子)

表1 散発下痢症からの病原菌検出状況 (平成18年)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体件数	11(0)	5(0)	26(2)	14(0)	22(0)	16(0)	14(0)	16(2)	14(0)	16(0)	14(0)	17(0)	185†(4)
陽性数	1(0)	0(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	3(0)	4(2)	2(0)	1(0)	2(0)	1(0)	18(2)
%	9.1	0.0	3.8	7.1	4.5	6.3	21.4	25.0	14.3	6.3	14.3	5.9	9.7
病原菌													
赤痢菌								1(1)	1(0)				2(1)
サルモネラ											1(0)		1(0)
腸管出血性大腸菌					1(0)		1(0)		1(0)	1(0)	1(0)		5(0)
毒素原性大腸菌								2(1)					2(1)
腸管病原性大腸菌	1(0)		1(0)	1(0)			2(0)	1(0)				1(0)	7(0)
黄色ブドウ球菌						1(0)							1(0)

備考： † 印の内訳 (菌株 156件, 糞便 29件)

() は海外渡航者由来を示す。

表2 検出病原菌の血清型 (平成18年)

病原菌	株数	菌種及び血清型
赤痢菌	2	<i>S. sonnei</i> (2)
サルモネラ	1	<i>S. Typhimurium</i> (1)
腸管出血性大腸菌	5	O26:H11 (2), O157:H7 (2), O165:NM (1)
毒素原性大腸菌	2	O6:H16 (1), O25:NM (1)
腸管病原性大腸菌	7	O111:H21 (4), O126:H27 (1), O128:H12 (2)

備考： () は菌株数を示す。

(7) 相模原市の腸管病原菌検出状況 (二類及び三類感染症発症者の家族等の病原菌検索)

相模原市衛生試験所

平成18年1月から12月までに、感染症法二類及び三類の感染症を発症した患者の家族、家族以外の患者接触者及び海外旅行同行者の病原菌検索を実施した。

検査対象事例は8事例で、発症者の発症原因の推定については、海外渡航先での感染が疑われるものが3事例、渡航経験が無く国内での感染が疑われるものが5事例であった。

検査対象者は55名で、病原菌検索の内訳は赤痢菌3名、腸管出血性大腸菌 O157 46名、同 O26 3名、同 O121 3名であった。検査対象者数と陽性数の合計の内訳は下表のとおりであった。

検査は、赤痢菌については直接平板塗抹により分離、同定を行った。腸管出血性大腸菌については、増菌培養と直接平板塗抹とを併用し分離、同定を行った。また、腸管出血性大腸菌のペロトキシン検索にはPCR法を実施した。

病原菌検索の結果、腸管出血性大腸菌は O157:H7 が2事例で各々1名ずつ検出された。今回検出された腸管出血性大腸菌は、全て発症者と同じ家族の検便によるものであり、2事例とも非発症者であった。それぞれの PFGE パターンを国立感染症研究所に依頼したところ、1名は発症者と家族検便の PFGE パターンが一致し、もう1名も完全に一致はしなかったが、ほぼ同一の PFGE パターンを示した。いずれも発症者と同じく、接触している可能性が高いことから、腸管出血性大腸菌を保菌するに至ったのではないかとと思われる。また今回の2名とも非発症であったため、本人に感染を拡大させる意識が少ないことから、感染が広範囲につながる可能性が示唆される。今後とも発症者からの感染拡大防止の一環として、迅速な対応を図りたい。

(笹野亜也子、清水壽美子、田向香織、前谷史恵、青木響子)

表 二類及び三類感染症病原菌検索状況(平成 18 年)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体件数				3			3	3	4	39(1)		3(1)	55(2)
事例数				3			1	1	1	1		1	8
赤痢菌				3									3
腸管出血性大腸菌O157									4	39(1)		3(1)	46(2)
腸管出血性大腸菌O26							3						3
腸管出血性大腸菌O121								3					3

()は陽性数

(8) 藤沢市の二類及び三類感染症発症者の家族等の病原菌検出状況

藤沢市保健所

平成 18 年 4 月から平成 18 年 12 月の間に、二類及び三類感染症を発症した患者の家族や接触者を対象に実施した便細菌検査の病原菌検出状況について報告する。

内訳の詳細は表に示したとおりである。検査の対象となった事例数及び検体数は 11 事例、204 検体であった。赤痢菌については 2 事例で 3 検体、チフス菌については 1 事例で 3 検体、腸管出血性大腸菌 O157 については 7 事例で 20 検体、腸管出血性大腸菌 O26 については 1 事例で 178 検体の検査を実施した。なお、赤痢菌、チフス菌についてはいずれも海外渡航先での感染が疑われた事例であった。

病原菌の検出状況については、赤痢菌、チフス菌は検出されなかった。腸管出血性大腸菌 O157 は 1 検体、腸管出血性大腸菌 O26 では 31 検体の陽性が確認された。なお、腸管出血性大腸菌 O26 の事例は集団感染事例で、経過観察のため同一人から複数回検出されているので陽性数が多くなっている。本件における感染者は初発患者を含め 15 名であった。

(佐藤 健、今井 良美、東上門 真哲、安田 哲夫)

表 二類及び三類感染症病原菌検出状況(平成 18 年)

病原菌	事例数	検体数	陽性数
赤痢菌	2	3	0
チフス菌	1	3	0
腸管出血性大腸菌O157	7	20	1
腸管出血性大腸菌O26	1	178	31
計	11	204	32

備考： 印は経過観察者からの複数回検出例を含む

3 河川等の環境調査

(1) 概況

(編集事務局)

平成 18 年の河川等の環境調査は、調査対象の菌種等は異なるが 4 衛生研究所等が実施した。検査定点は平成 17 年と同様 32 定点であったが、検体数は神奈川県衛生研究所が事業終了により大幅に減少し 182 件、分離数も 203 件であった。

表 河川水病原菌検出状況

検査機関	平成 15 年			平成 16 年			平成 17 年			平成 18 年		
	定点数 (箇所)	検体数 (件)	病原菌 分離数 (件)	定点数 (箇所)	検体数 (件)	病原菌 分離数 (件)	定点数 (箇所)	検体数 (件)	病原菌 分離数 (件)	定点数 (箇所)	検体数 (件)	病原菌 分離数 (件)
横浜市衛生研究所	8	96	80	8	96	66	8	96	80	8	96	83
川崎市衛生研究所	4	11	12	4	12	15	4	16	19	4	16	20
横須賀市健康安全科学センター	10	40	101	10	40	86	10	40	84	10	40	89
神奈川県衛生研究所	10	120	67	10	120	81	10	120	97	10	30	11
計	32	267	260	32	268	248	32	272	280	32	182	203

(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の河川水腸管系病原菌調査 神奈川県衛生研究所

コレラ菌を対象にした河川水定点調査は、平成元年より腸管系病原菌調査として継続してきた。平成 17 年度で事業が終了したため、平成 18 年 1 月から 3 月までの成績を報告する。

1. 材料および方法

神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)の一級および二級の 10 河川にそれぞれ 1 箇所の定点を設け、毎月 1 回ずつ採取した河川水について、各種腸管系病原菌の検索を行った。調査の対象はコレラ菌 O1 および O139、チフス菌、パラチフス A 菌、赤痢菌、腸管出血性大腸菌の二類および三類感染症原因菌とサルモネラ、コレラ菌 non-O1,O139 とした。

各増菌培地に、河川水 500ml をろ過して菌を捕捉したメンブランフィルターを接種し、培養した。赤痢菌の検索は、少量の Buffered pepton water でメンブランフィルターから捕捉物を洗い出し、その洗浄液の 1 白金耳を直接塗抹した。腸管出血性大腸菌 O157 は、36、8 時間増菌後、免疫磁気ビーズ法を用いて分離した。各病原菌の検索方法の概要と使用した増菌および分離培地を表 1 に示した。分離に応じた確認試験を行い、生化学的性状および血清学的性状等の確認を行い、菌種および菌型を同定した。

2. 結果および考察

河川水 30 検体の結果を表 2 に示した。平成 18 年 1 月から 3 月は二類あるいは三類感染症の病原体は検出されなかった。コレラ菌 non O1,O139 は 7 定点の 7 検体(23.3%)から検出された(表 3)。チフス菌、パラチフス A 菌以外のサルモネラは 8 検体(26.7%)から検出された。10 定点のうち、下山川は毎月、引地川は 2 月および 3 月に検出された(表 4)。検出された血清型を表 5 に示した。S. Enteritidis

が2月に引地川と酒匂川から検出された。また、2月の引地川からは *S. Enteritidis* と *S. Agona* が同時に検出された。

(黒木俊郎 三宅芳枝 伊東久美子 石原ともえ)

表1 調査項目および使用培地

調査項目	増菌培地	分離培地
1. コレラ菌O1,O139	アルカリ性ペプトン	TCBS,PMT
2. <i>Vibrio cholerae</i> nonO1,O139		
3. チフス菌	セレナイト・シスチン	SS,DHL
4. パラチフスA菌		
5. <i>Salmonella</i>	ハーナ・テトラチオン酸塩基礎培地	SS, DHL, ESサルモネラ
6. 腸管出血性大腸菌O157	Buffered Peptone Water (培養8時間後にIMS法)	CT-SMAC
7. 赤痢菌	直接塗抹	SS,DHL

表2 腸管系病原菌の河川からの検出状況(平成18年)

検出菌	1月	2月	3月	計
コレラ菌O1,O139	0	0	0	0
チフス菌	0	0	0	0
パラチフスA菌	0	0	0	0
赤痢菌	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌	0	0	0	0
コレラ菌 non-O1,O139	4	1	2	7
サルモネラ	2	4	2	8

表3 定点別のコレラ菌 non-O1,O139 の検出状況(平成18年)

	1月	2月	3月	計
1 下山川	-	-	+	
2 森戸川	-	+	-	
3 滑川	+	-	-	
4 境川	-	-	-	
5 引地川	-	-	-	
6 相模川	+	-	-	
7 金目川	+	-	-	
8 中村川	-	-	-	
9 酒匂川	+	-	-	
10 早川	-	-	+	
計	4	1	2	7

表4 定点別のサルモネラの検出状況(平成18年)

	1	2	3	計
1 下山川	+	+	+	
2 森戸川	-	+	-	
3 滑川	-	-	-	
4 境川	-	-	-	
5 引地川	-	+	+	
6 相模川	-	-	-	
7 金目川	+	-	-	
8 中村川	-	-	-	
9 酒匂川	-	+	-	
10 早川	-	-	-	
計	2	4	2	8

表5 分離されたサルモネラの血清型(平成18年)

血清型	分離検体数
O4群	
Agona	1
Derby	1
Saintpaul	1
UT	1
O7群	
Infantis	1
O9群	
Blegdam	1
Enteritidis	2
Javiana	1

(3) 横浜市の河川等の環境調査 - 腸管系病原菌検索 -

横浜市衛生研究所

河川水の細菌学的定点観測は昭和53年より継続しており、現在は鶴見川水系が2定点、これ以外は各水系ともすべて1定点で計8定点において観測を行っている。検査対象菌はコレラ菌、コレラ菌O1、O139以外、腸炎ビブリオ、赤痢菌、チフス菌およびパラチフスA菌を含むサルモネラである。今回は平成18年1月から12月までの検査成績について報告する。

上記8定点の河川水、臨港鶴見川橋定点の底泥について毎月1回検体採取を行い、菌検索は従来と同様の方法で行った。

河川水からの病原菌の検出状況を表1に示した。コレラ菌、赤痢菌、チフス菌およびパラチフスA菌は、今年はいずれの定点からも検出されなかった。

コレラ菌O1、O139以外は、延べ53定点(55.2%)で検出され、昨年(58.3%)よりわずかに検出率が減少した。チフス菌、パラチフスA菌以外のサルモネラは延べ7定点(7.3%)で7菌種が分離された。河川水および底泥中のコレラ菌O1、O139以外の検出状況を表2、3に示した。各河川とも前年同様な年間を通じて各調査地点で検出されている。底泥中のコレラ菌O1、O139以外の菌数は、平成6年から同様に年間を通しては低い値を示していたが、本年は9月に高い値(79個/100ml)を示した。

表4に示したとおり、底泥中の腸炎ビブリオは年間を通して検出された。また、河川水からの腸炎ビブリオは17定点より検出され昨年より増加した。3月、4月は河川水定点から検出されなかった。

河川水からのサルモネラの検出状況を表5に示した。チフス菌およびパラチフスA菌以外のサルモネラは、本年は2、5、9および10月に検出された。検出されたサルモネラの血清型は表6に示した。O8群が3菌種、O9群が2菌種、O4群およびO7群が各1菌種検出された。

河川の環境調査は、今後の問題として病原菌の分離だけでなく、患者からの病原菌分離状況等の情報と併せて流行菌型の予測、集団発生の予測、また患者および保菌者の追跡等の疫学的解析に必要である。

(武藤哲典 松本裕子 山田三紀子 北爪晴恵 石黒裕紀子)

表1 河川水からの病原菌検出状況(定点数)(平成18年)

病原菌	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
コレラ菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌O1、O139以外	4	1	0	2	1	7	7	7	8	5	7	4	53
腸炎ビブリオ	1	1	0	0	1	3	3	2	2	2	4	4	23
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
サルモネラ													
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	2	0	0	1	0	0	0	3	1	0	0	7

表2 河川水中のコレラ菌O1、O139以外(平成18年)

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	+	-	-	-	-	+	-	-	+	-	+	-
2. 川向橋	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-
3. 水道橋	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-
4. 清水橋	+	+	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+
5. 小泉橋	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+
6. 侍従橋	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-
7. 鷹匠橋	+	-	-	+	-	+	+	+	+	+	+	+
8. 東西橋	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	+	+

表3 臨港鶴見川橋底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の MPN (平成 18 年)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
コレラ菌 O1、O139以 (個/100ml)	13	<0.2	<0.2	<0.2	<0.2	<0.2	2	<0.2	79	5	<0.2	<0.2

表4 河川水中および底泥中の腸炎ビブリオ (平成 18 年)

採取地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋		+(+)	+(+)	-(+)	-(+)	-(+)	+(+)	+(+)	+(-)	-(+)	-(+)	+(-)	+(+)
2. 川向橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3. 水道橋		-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-
4. 清水橋		-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+	+
5. 小泉橋		-	-	-	-	-	+	+	-	+	+	+	+
6. 侍従橋		-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	+	+
7. 鷹匠橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8. 東西橋		-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-

() 内は底泥中の腸炎ビブリオ

表5 河川水のサルモネラ (平成 18 年)

採取地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋		-	-	-	-	-	0	-	-	+	-	-	-
2. 川向橋		-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-
3. 水道橋		-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-
4. 清水橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5. 小泉橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6. 侍従橋		-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-
7. 鷹匠橋		-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8. 東西橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表6 分離されたサルモネラの血清型 (平成 18 年)

	血清型	分離菌株数
O4群	Agona	1
O7群	Infantis	1
O8群	Corvallis	1
	Nagoya	1
	Newport	1
O9群	Enteritidis	1
	型別不能	1
計		7

(4) 川崎市の河川等の環境調査 腸管系病原菌検索

川崎市衛生研究所

平成 18 年に実施した河川水等からの腸管系病原菌の検査結果について報告する。

1 月、4 月、7 月、10 月の 4 回、川崎市菅埠頭、大師橋横 (多摩川)、六郷橋横 (多摩川)、未吉橋横 (鶴見川) の 4 定点より採水し計 16 検体について病原菌検査を実施した。

病原菌検出状況は表に示したとおりであり、腸炎ビブリオが 12 件 (75.0%) と年間を通して検出された。その他の病原菌ではコレラ菌 O1 以外が 4 月に 2 件、7 月と 10 月に 1 件ずつ、ビブリオ・バルニフ

イースが7月に2件、10月に1件、サルモネラ (*S.Typhimurium*) が10月に1件であった。コレラ菌01、ビブリオ・ミミカス、ビブリオ・フルビアリス、ビブリオ・ファーニシー、腸管出血性大腸菌0157は検出されなかった。

(岡田京子、駒根綾子)

表 河川水等からの病原菌検出状況 (平成18年)

病原菌	月				計 (%)
	1	4	7	10	
コレラ菌01	0	0	0	0	0
コレラ菌01以外	0	2	1	1	4(25.0)
腸炎ビブリオ	2	2	4	4	12(75.0)
ビブリオ・ミミカス	0	0	0	0	0
ビブリオ・フルビアリス	0	0	0	0	0
ビブリオ・ファーニシー	0	0	0	0	0
ビブリオ・バルニフィーカス	0	0	2	1	3(18.8)
サルモネラ	0	0	0	1	1(6.3)
腸管出血性大腸菌0157	0	0	0	0	0
検体数	4	4	4	4	16

(5) 横須賀市の河川水腸管系病原菌検索

横須賀市健康安全科学センター

平成18年1月から18年12月まで実施した河川水のコレラ菌、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミミカス、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌など、腸管系病原菌の検査結果について報告する。

調査定点は市内10河川10定点であり、採水は2月、5月、8月、11月の年4回実施した。また、検査は昨年と同様の方法により行った。

河川水の病原菌検出状況は表1に示した。本年はコレラ菌O1,O139(CT+)以外が20定点(50.0%)、腸炎ビブリオは16定点(40.0%)、ビブリオ・ミミカスは13定点(32.5%)、ビブリオ・フルビアリス/ファーニシーは1定点(2.5%)、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリアは23定点(57.5%)、プレジオモナス・シゲロイデスが1定点(2.5%)、カンピロバクター・ジェジュニ/コリが5定点(12.5%)、エルシニア・エンテロコリチカは10定点(25.0%)から検出された。しかし、コレラ菌O1,O139(CT+)、赤痢菌、チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌O157、腸管出血性大腸菌O157以外、毒素原性大腸菌、組織侵入性大腸菌及び腸管病原性大腸菌はいずれも検出されなかった。

コレラ菌O1,O139(CT+)以外の検出状況を表2に示した。コレラ菌O1,O139(CT+)以外は2月には4定点、5月には3定点、8月には7定点、11月には6定点から検出された。また、10定点の内1定点においては毎回検出された。

腸炎ビブリオの検出状況は表3に示した。腸炎ビブリオは2月には2定点、5月、8月は4定点、10月には6定点から検出された。また、10定点の内2定点においては毎回検出された。

以上、市内10河川、10定点(河川水)の病原菌についてはコレラ菌O1,O139(CT+)以外をはじめ、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミミカス、ビブリオ・フルビアリス/ファーニシー、エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア、プレジオモナス・シゲロイデス、カンピロバクター・ジェジュニ/コリ、エルシニア・エンテロコリチカが検出された。

(天野肇)

表1 河川水から検出した病原菌 (平成18年)

病原菌	月				計 (%)
	2	5	8	11	
コレラ菌O1,O139 (CT+)	0	0	0	0	0 (0)
コレラ菌O1,O139 (CT+)以外	4	3	7	6	20 (50)
腸炎ビブリオ	2	4	4	6	16 (40)
ビブリオ・ミミカス	0	1	5	7	13 (32.5)
ビブリオ・フルビアース/ファーニシイ	0	0	1	0	1 (2.5)
エロモナス・ヒドロフィラ/ソブリア	6	5	7	5	23 (57.5)
プレジオモナス・シゲロイデス	0	1	0	0	1 (2.5)
赤痢菌	0	0	0	0	0 (0)
チフス菌	0	0	0	0	0 (0)
パラチフスA菌	0	0	0	0	0 (0)
その他のサルモネラ	0	0	0	0	0 (0)
腸管出血性大腸菌O157	0	0	0	0	0 (0)
腸管出血性大腸菌O157以外	0	0	0	0	0 (0)
毒素原性大腸菌	0	0	0	0	0 (0)
組織侵入性大腸菌	0	0	0	0	0 (0)
腸管病原性大腸菌	0	0	0	0	0 (0)
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ	0	0	0	5	5 (12.5)
エルシニア・エンテロコリチカ	1	1	0	8	10 (25)
検体数	10	10	10	10	40

4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(1) 概況

(編集事務局)

感染症発生動向調査の定点当たり患者報告数によると、平成18年のA群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、前年17年に比べ年間を通して報告数が多かった。特に第13週までは2倍を上回る報告数があった。47週以降は前年と同様の傾向であった。前年同様川崎市での報告数が最も多かった。

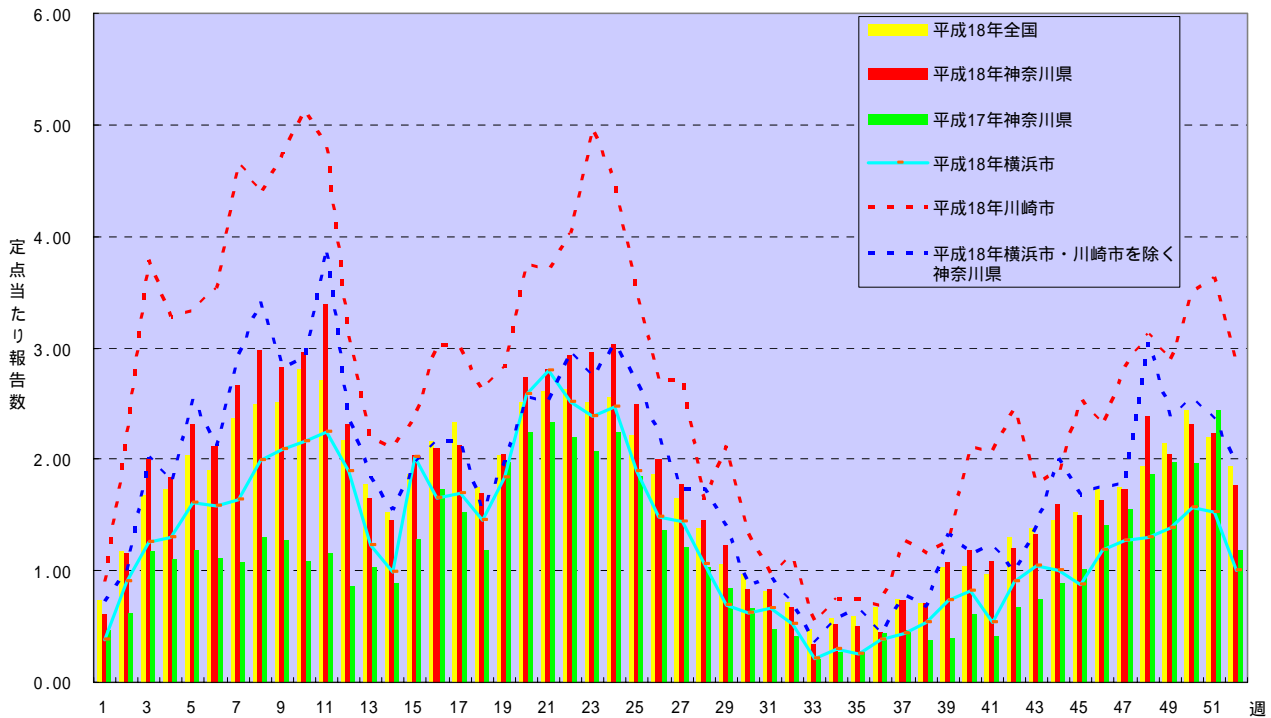


図 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎報告数

(2) A群溶血性レンサ球菌のT型別成績

神奈川県衛生研究所

横浜市衛生研究所(2株)、川崎市衛生研究所(10株)、相模原市衛生試験所(12株)および神奈川県衛生研究所(28株)の県内4施設から報告された計52株のA群溶血性レンサ球菌のT型別成績を図1に示した。

検出されたT型は1型、3型、4型、6型、12型、13型、25型、28型およびB3264型の9種類であった。これらの内、T1型が18株(34.6%)と最も多く、以下、T4型8株(15.4%)、T12型8株(15.4%)、T3型5株(9.6%)の順で、これら4血清型で全体の75%を占めた。

最近4年間のT型の経年推移を図2に示した。T4型および12型は例年比較の多数検出されている。T1型はこの数年増加傾向があり、殊に2006年の増加は顕著であった。また、T25型が2005年に多数検出されているが、これは相模原市内で食品を介したT25型による咽頭炎の集団発生があったため、2006年は減少している。

(大屋日登美、岡崎則男、高橋智恵子)

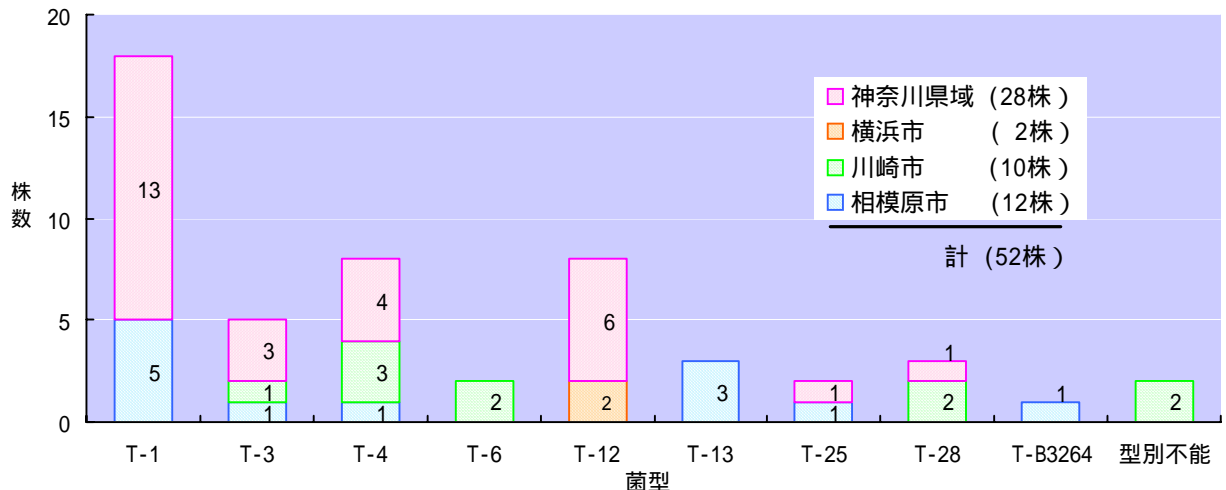


図1 A群溶血性レンサ球菌T型の検出状況(2006年1～12月)

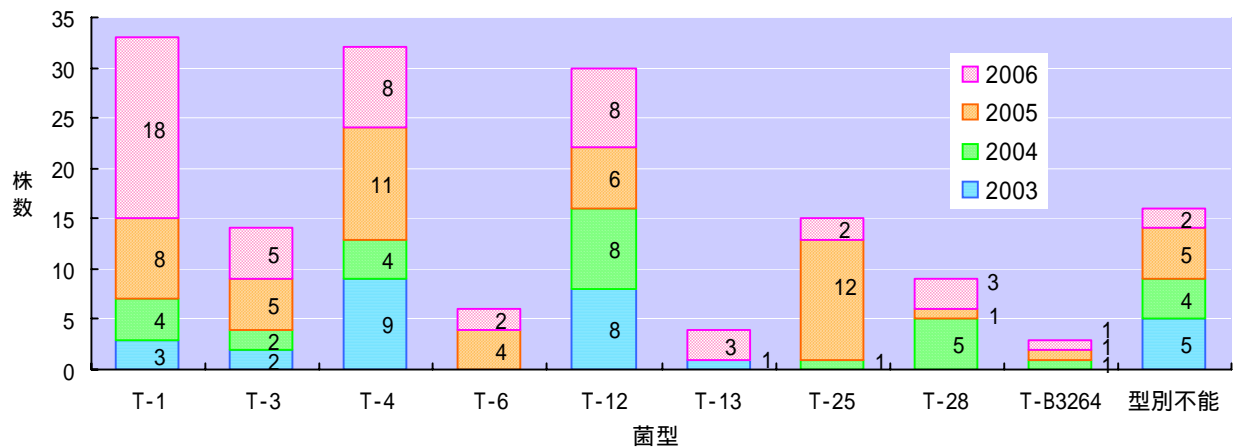


図2 A群溶血性レンサ球菌T型の経年推移(2003～2006年)

(3) 川崎市のA群溶血性レンサ球菌咽頭炎

川崎市衛生研究所

川崎市における感染症発生動向調査の一環として、定点医療機関において咽頭ぬぐい液を採取し当所に搬入された検体について溶血性レンサ球菌の検索を実施した。平成18年1月から12月までの検出状況は表1に示すとおりであり、11件中A群溶血性レンサ球菌が10件(90.9%)から分離された。そのT型別を表2に示した。T-3が1件、T-4が3件、T-6が2件、T-28が2件、その他型別不能が2件であった。

表1 A群溶血性レンサ球菌分離状況(平成18年)

検査年月	検査件数	陽性数(%)			
		A群	B群	C群	G群
18/1	2	1(50.0)			
2	0				
3	0				
4	0				
5	2	2(100.0)			
6	3	3(100.0)			
7	1	1(100.0)			
8	1	1(100.0)			
9	0				
10	1	1(100.0)			
11	0				
12	1	1(100.0)			
合計	11	10(90.9)			

備考：()内の数字は、検査件数に対する%を表す。

表2 A群溶血性レンサ球菌T型別(平成18年)

区分	T型					計
	3	4	6	28	UT	
株数	1	3	2	2	2	10

5 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)のQFT検査成績

神奈川県衛生研究所

QFT検査は平成18年1月に健康保険が適用され、同年に日本結核病学会から使用指針も提示されたことから、国内でも実施する機関が増えてきている。

神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)では平成17年11月から県域の結核接触者検診におけるQFT検査を実施しており、平成18年にも194例の依頼があった。表に示すように、陽性22例(11.3%)、判定保留20例(10.3%)および陰性152例(78.4%)であった。このように、ツベルクリン反応(以下ツ反)等で結核感染が疑われた例の約80%がQFT陰性であり、結核感染診断におけるQFT検査の有用性が改めて認識される結果となった。

ツ反結果が判明している被験者130例のQFT検査結果とツ反最大発赤径(mm)の関係を図に示した。BCG接種者で患者接触歴を有する被験者の結核感染を疑う判定基準(平成18年、結核病学会)である発赤径30mmを境界とした場合、29mm以下の47例中、QFT陽性は5例(10.6%)、判定保留を含めると8例(17.0%)であり、30mm以上の83例中では陽性8例(9.6%)、判定保留を含めると18例(21.7%)であった。このように、発赤径30mm以上でQFT陽性率が若干高くなる傾向が見られるものの、29mm以下でも相当数のQFT陽性例があり、ツ反ではかなりの結核感染例が見落とされる可能性が示された。今後、QFT検査を導入した結核対策を更に充実させていく必要があると思われる。

(岡崎則男、大屋日登美、高橋智恵子、新川隆康)

表 結核接触者検診における QFT 検査結果

検査 例数	陽 性		判定保留		陰 性	
	例数	%	例数	%	例数	%
194	22	11.3	20	10.3	152	78.4

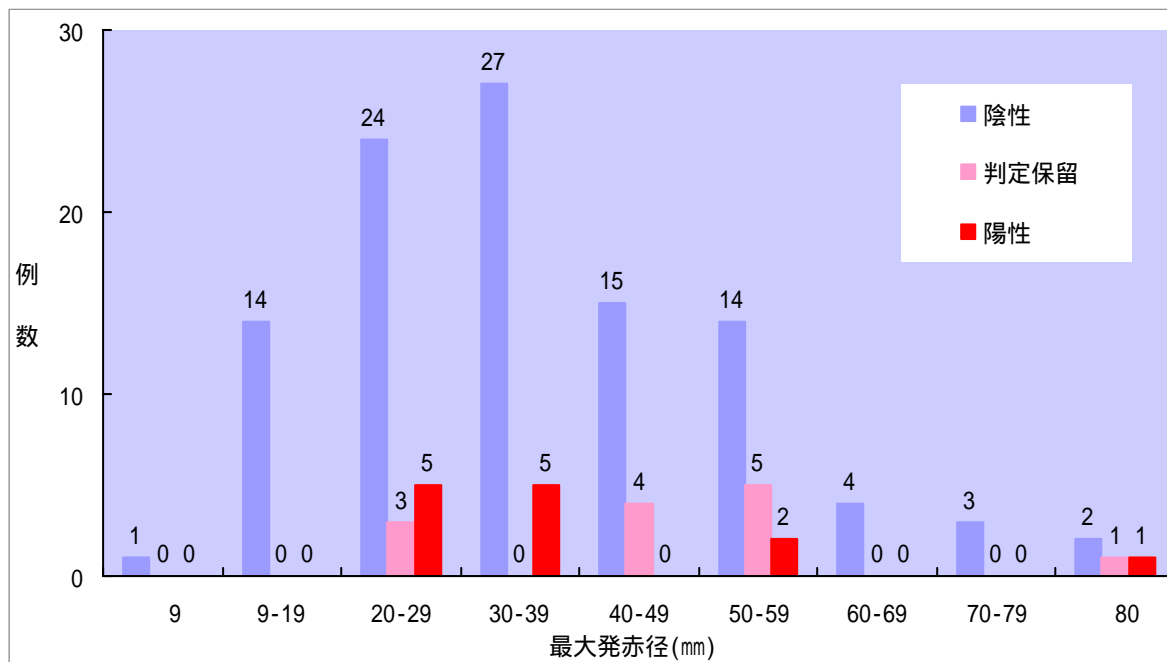


図 QFT 検査結果とツ反最大発赤径 (n=130)

その他の感染症

1 つつが虫病

(1) 概況

(編集事務局)

平成 18 年の神奈川県内のつつが虫病患者の報告数は、直近 5 年間では 4 年ぶりに減少し前年比 7 件減の 15 件であった。保健所別では 15 件中 14 件が足柄上保健所管内から、1 件が秦野保健所管内からの報告であった(図 1)。また、季節的には月別の患者発生報告(報告月)は 11 月 13 件、12 月が 2 件であった(図 2)。

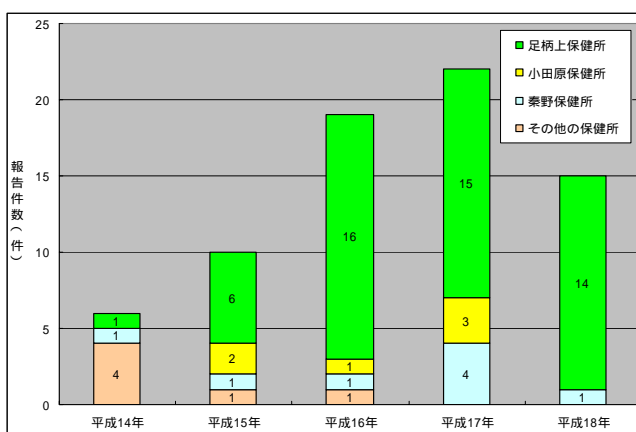


図 1 つつが虫病患者地域別報告数

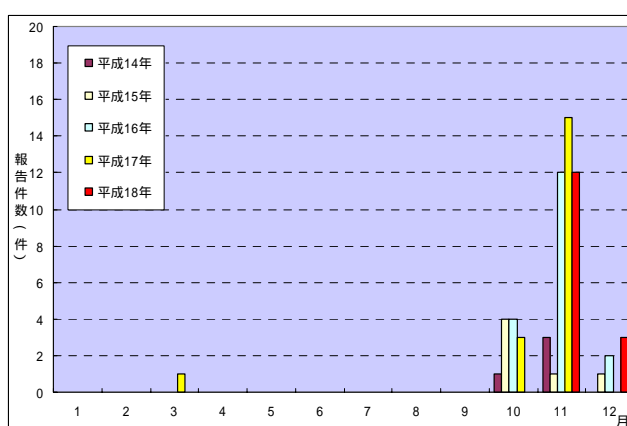


図 2 つつが虫病患者月別報告状況(報告月)

(2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市及び藤沢市を除く)で発生したつつが虫病

神奈川県衛生研究所

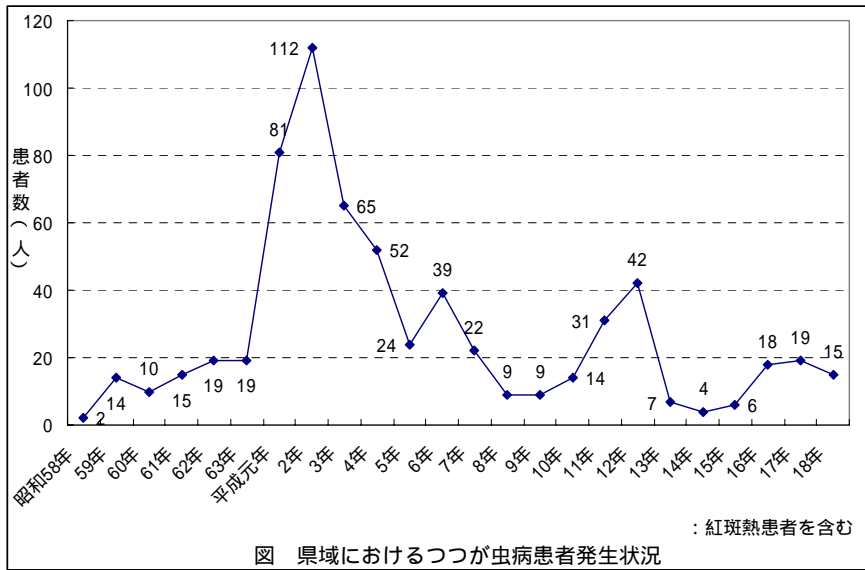
昭和 58 年から平成 18 年までのつつが虫病患者発生数を年次別にみると、昭和 58 年から昭和 63 年までは確定患者 2~19 名で推移し、平成元年 81 名、平成 2 年 112 名と増加したが、平成 3 年からは 65 名、平成 4 年 52 名(含む紅斑熱患者 2 名)、平成 5 年 24 名、平成 6 年 39 名、平成 7 年 22 名、平成 8 年 9 名、平成 9 年 9 名と減少した。その後、平成 10 年 14 名、平成 11 年 31 名、平成 12 年 42 名と僅かながらであるが増加し、平成 13 年 7 名、平成 14 年 4 名、平成 15 年は 6 名と再び減少し、平成 16 年 18 名、平成 17 年 19 名、平成 18 年 15 名と推移した(図)。

つつが虫病患者 15 名の推定感染株は、Kawasaki 株 10 名、Kuroki 株 4 名、不明が 1 名であった。

つつが虫病患者発生を季節別にみると、昭和 58 年から平成 16 年の 21 年間すべてで毎年秋期(9~11 月)に患者が多く、平成 18 年についても、10 月 6 名、11 月 7 名、12 月 2 名であり、秋期に大部分の患者が発生した。

患者の感染場所(聞き取り調査により推定できたもの)を検討すると、県外で感染して本県で届出されたと思われるものを除いて、平成 18 年では山北町、南足柄市、松田町、開成町、小田原市、厚木市、箱根町であった。厚木市や箱根町は、過去 5 年間一度も患者の感染場所となっていなかった地域であった。また、平成 18 年のつつが虫病感染時の行動も、昨年と同様に山地や平地の畑、田圃などでの農作業が多く、日常生活での感染の機会が多いことが判明した。

(片山 丘、古屋由美子、尾上洋一、新川隆康)



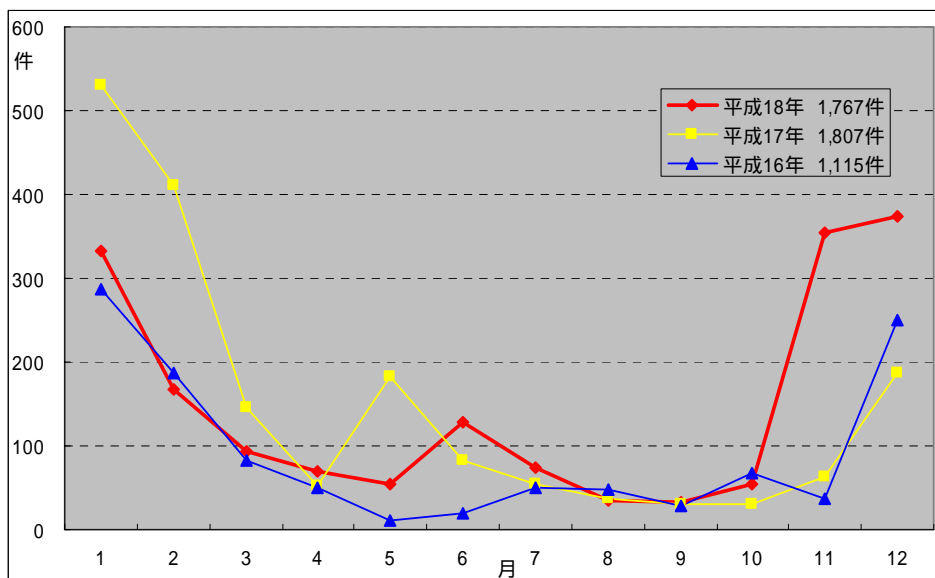
資料2 病原微生物検出状況

1 ウイルス検出概況

(編集事務局)

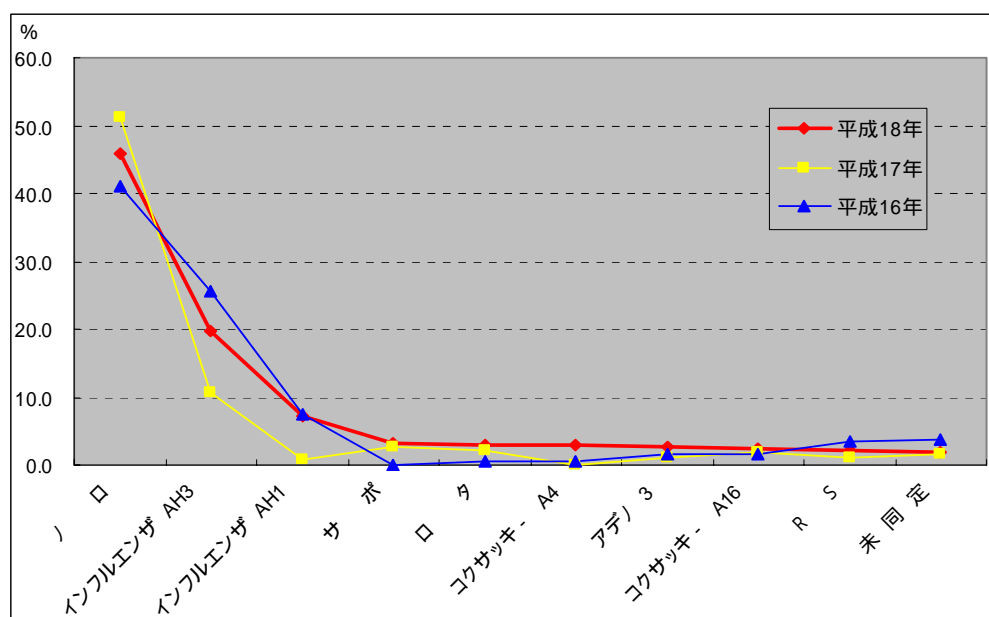
平成18年に県内で検出されたウイルスは、前年より減少し、1,767件であった。月別では、年末のノロウイルスによる感染性胃腸炎や食中毒の多発により、11月、12月に多く検出され、前年の傾向とは異なった(図1)。

図1 検出ウイルス月別状況



検出ウイルス種類別では、前年と同様ノロウイルスが最も多く検出され、続いてインフルエンザウイルスA香港型(H3)、インフルエンザウイルスAソ連型(H1)であった(図2)。

図2 検出ウイルス上位10種



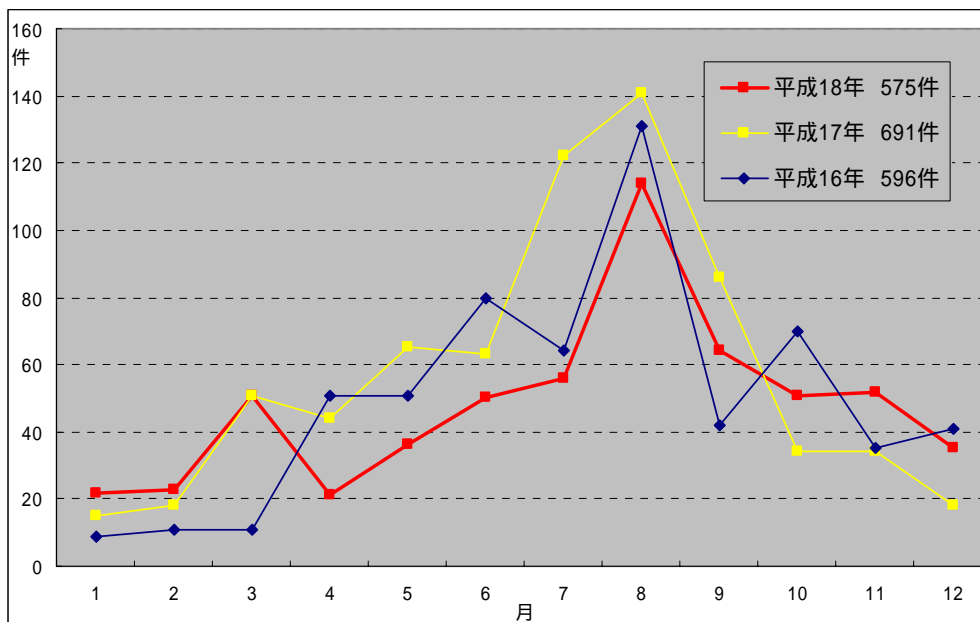
神奈川県、神奈川県衛生研究所、横浜市衛生研究所、川崎市衛生研究所、横須賀市健康安全科学センター、相模原市衛生試験所及び藤沢市保健所の各ウイルス検出状況は、70ページ以下に記載。

2 病原細菌検出概況

(編集事務局)

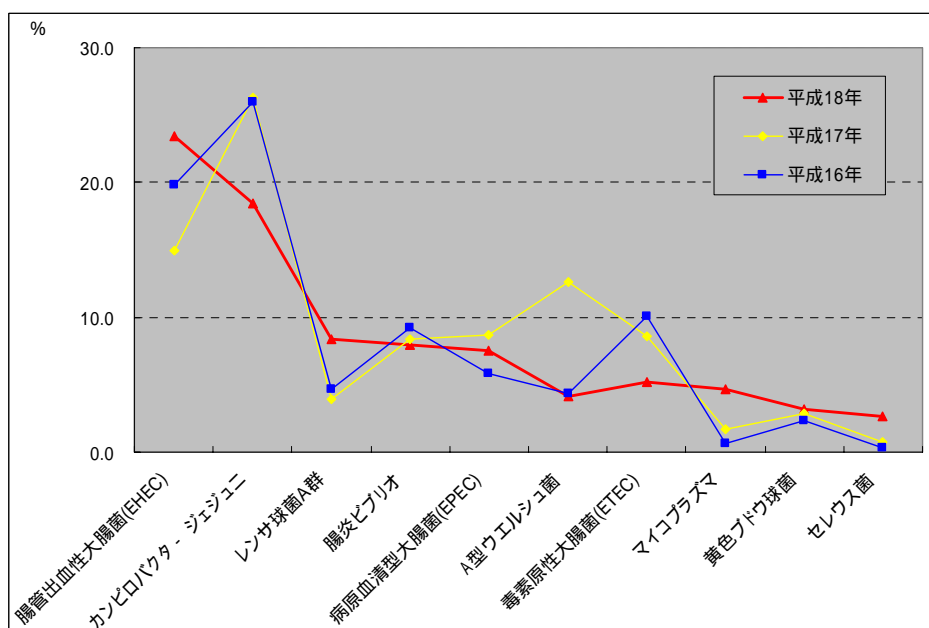
平成 18 年に県内で検出された病原細菌は、平成 17 年の 691 件から 575 件へと大幅に減少した。月別では例年同様 8 月が最も多く、続いて 9 月であった(図 1)。

図 1 病原細菌月別検出状況



最も多く検出された病原細菌は、平成 16、17 年はカンピロバクター ジェジュニであったが、平成 18 年は腸管出血性大腸菌(EHEC)が最も多く、全体の 23.5%を占めた(図 2)。

図 2 検出細菌数上位 10 種



神奈川県、神奈川県衛生研究所、横浜市衛生研究所、川崎市衛生研究所、横須賀市健康安全科学センター、相模原市衛生試験所及び藤沢市保健所の各病原細菌検出状況は、81 ページ以下に記載。

3 - 1 神奈川県（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	つが虫病	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	インフルエンザ様	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	その他	合計
インフルエンザ AH1								117			11	128
インフルエンザ AH3								327			19	346
インフルエンザ B				1				8				9
パラインフルエンザ 1								2				2
パラインフルエンザ 2								1			5	6
パラインフルエンザ 3											6	6
R S		1		1				2			33	37
ヒトメタニューモ			1	1				1			11	14
ポリオ 1											2	2
ポリオ 2											1	1
コクサッキー - A2						1					3	4
コクサッキー - A4					4	32					16	52
コクサッキー - A5					2	3					4	9
コクサッキー - A9					1						5	6
コクサッキー - A10						3						3
コクサッキー - A16					43	1						44
コクサッキー - B5								1	4		1	6
エコ - 18					7					3	1	11
エコ - 25											1	1
エコ - 30			1							1		2
エンテロ 71					12						2	14
ライノ										1	3	4
ムンプス							4	1		2		7
アデノ 1						1					3	4
アデノ 2			3								6	9
アデノ 3			30		2	1		2	4		8	47
アデノ 4						1			1			2
アデノ 5								1				1
アデノ 8									1			1
アデノ 37			1						3			4
アデノ 40 / 41				4								4
アデノ（型未決定）				2							1	3
単純ヘルペス 1			1		4	2		1			5	13
ヒトヘルペス 6						2					3	5
ロタ				42						1	12	55
ノロ				434							377	811
サボ				5							50	55
未同定				1	1		1	4			27	34
オリエンチア ツツカムシ	4											4
計	4	1	37	491	76	47	5	468	9	13	616	1,767

3 - 2 神奈川県衛生研究所（月別）

月 検出ウイルス	平成 16年	平成 17年	月												平成 18年
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
インフルエンザ AH1		6	19	19	6										44
インフルエンザ AH3	159	77	136	35	1										172
インフルエンザ B	3	105					2	1							3
パラインフルエンザ 1			1	1											2
パラインフルエンザ 2												1			1
パラインフルエンザ 3	1														
R S	3	1		1										1	2
ポリオ 3		1													
コクサッキー - A2	3	1													
コクサッキー - A4	5	1					4	15	5	1					25
コクサッキー - A5		1							1			2	1	1	5
コクサッキー - A6	3	23													
コクサッキー - A9	1	1													
コクサッキー - A10		3							1	1					2
コクサッキー - A12	1	1													
コクサッキー - A14		2													
コクサッキー - A16	9	17					1	3	7	8	6	5	2	1	33
コクサッキー - B1	2														
コクサッキー - B3		1													
コクサッキー - B4	1														
コクサッキー - B5	2									1			1		2
エコ - 3		3													
エコ - 6	1	2													
エコ - 18	7							1		2	4				7
エコ - 30									1						1
エンテロ 71		13							1		1		1	1	4
パレコ - 1		1													
ライノ		1													
ムンプス	1	21		1		2	1				3				7
アデノ 1					1										1
アデノ 2	1	4		1											1
アデノ 3	9	8		2	2	4	3	1	4						16
アデノ 4		1		1											1
アデノ 5		1													
アデノ 40/41	1	2						2							2
アデノ（型未決定）					1								1		2
単純ヘルペス 1		4	1		1	1				1		1	2	1	8
口 夕	3	30	1		22	8								1	32
ノ 口	114	82	22	3	4	10	4					4	73	66	186
サ ボ		50					1							4	5
未 同 定	3								1	1					2
オリエツァ ツツガムシ	14	13										1	2	1	4
計	347	477	180	64	36	26	17	23	21	15	14	13	84	77	570

3 - 2 神奈川県衛生研究所（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	つつが虫病	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	インフルエンザ様	無菌性髄膜炎	その他	合計
インフルエンザ AH1							44			44
インフルエンザ AH3							172			172
インフルエンザ B							3			3
パラインフルエンザ 1							2			2
パラインフルエンザ 2							1			1
R S							2			2
コクサッキー - A4				3	22					25
コクサッキー - A5				2	3					5
コクサッキー - A10					2					2
コクサッキー - A16				32	1					33
コクサッキー - B5							1	1		2
エコ - 18				7						7
エコ - 30								1		1
エンテロ 71				4						4
ムンプス						4	1	2		7
アデノ 1									1	1
アデノ 2		1								1
アデノ 3		12			1		2		1	16
アデノ 4					1					1
アデノ 40 / 41			2							2
アデノ（型未決定）			2							2
単純ヘルペス 1				4	2				2	8
ロ タ			32							32
ノ 口			186							186
サ ボ			5							5
未 同 定				1					1	2
オリエンテラ ツツガムシ	4									4
平成18年計	4	13	227	53	32	4	228	4	5	570

3 - 3 横浜市衛生研究所（月別）

月 検出ウイルス	平成 16年	平成 17年	月												平成 18年	
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
インフルエンザ AH1	84	7	6	26	13	4			1							50
インフルエンザ AH3	10	56	41	26	5										2	74
インフルエンザ B		72					1									1
パラインフルエンザ 1	6	1														
パラインフルエンザ 2	6	2								1		4				5
パラインフルエンザ 3		6					3	3								6
R S	35	19					3	2	1			2	8	22		35
ヒトメタニューモ				1	6	7										14
ポリオ 1		2										1	1			2
ポリオ 2	1				1											1
ポリオ 1+2	1	1														
コクサッキー - A2	1								3	1						4
コクサッキー - A4		1			1	2	15	8								26
コクサッキー - A5											1	1	2			4
コクサッキー - A6		4														
コクサッキー - A9									3		2					5
コクサッキー - A10						1										1
コクサッキー - A16		12									5	4				9
コクサッキー - B1	2															
コクサッキー - B2		1														
コクサッキー - B3	5															
コクサッキー - B4	1	11														
コクサッキー - B5	1								1							1
エコ - 3	3															
エコ - 5		1														
エコ - 6	3															
エコ - 9		1														
エコ - 18		1								1						1
エコ - 24		1														
エコ - 25		4													1	1
エコ - 30										1						1
エンテロ 71		3									2		2			4
パレコ - 1		1														
ライノ	30							1	1						1	3
ムンプス		2														
アデノ 1	5	5						2	1							3
アデノ 2	2	3			1	1	2				1	1				6
アデノ 3	4	4						3	6							9
アデノ 4		1														
アデノ 5		1	1													1
アデノ 7	1															
アデノ 8								1								1
アデノ 37	3	1								1				1		2
アデノ（型未決定）	4	2							1							1
単純ヘルペス 1		2							1			1	1			3
サイトメガロ		2														
ヒトヘルペス 6		2						2		2	1					5
ロ タ			6		2	1	3									12
ノ ロ	225	647	11		17	8	2	15				16	172	88		329
サ ボ								50								50
未 同 定	38	29	2	1	3			11	1	3	1	4	4	2		32
計	471	908	67	53	25	31	27	92	41	12	13	34	191	116		702

3 - 3 横浜市衛生研究所（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	R S ウイルス 感染症	咽 頭 結 膜 熱	感 染 性 胃 腸 炎	手 足 口 病	ヘル パン ギー ナ	流 行 性 耳 下 腺 炎	イン フル エン ザ 様	流 行 性 角 結 膜 炎	その他	合計
インフルエンザ AH1							39		11	50
インフルエンザ AH3							55		19	74
インフルエンザ B			1							1
パラインフルエンザ 2									5	5
パラインフルエンザ 3									6	6
R S	1		1						33	35
ヒトメタニューモ		1	1				1		11	14
ポリオ 1									2	2
ポリオ 2									1	1
コクサッキー - A2					1				3	4
コクサッキー - A4					10				16	26
コクサッキー - A5									4	4
コクサッキー - A9									5	5
コクサッキー - A10					1					1
コクサッキー - A16				9						9
コクサッキー - B5									1	1
エコ - 18									1	1
エコ - 25									1	1
エコ - 30		1								1
エンテロ 71				2					2	4
ライノ									3	3
アデノ 1					1				2	3
アデノ 2									6	6
アデノ 3		2							7	9
アデノ 5							1			1
アデノ 8								1		1
アデノ 37								2		2
アデノ（型未決定）									1	1
単純ヘルペス 1									3	3
ヒトヘルペス 6					2				3	5
ロタ									12	12
ノロ									329	329
サポ									50	50
未同定			1			1	4		26	32
平成18年計	1	4	4	11	15	1	100	3	563	702

3 - 4 川崎市衛生研究所（月別）

月 検出ウイルス	平成 16年	平成 17年	月												平成 18年
			1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	
インフルエンザ AH1		2	9	12	3	5									29
インフルエンザ AH3	90	45	62	29	2		1								94
インフルエンザ B	1	52	1			1	1	2							5
ポリオ 2		2													
コクサッキー - A4								1							1
コクサッキー - A9								1							1
コクサッキー - A16	10	7									1	1			2
コクサッキー - A24	1														
コクサッキー - B1	2														
コクサッキー - B2		2													
コクサッキー - B3	5	1													
コクサッキー - B4		3													
コクサッキー - B5	3	3													
エコ - 6	6														
エコ - 7	1														
エコ - 11	1														
エコ - 18											1				1
エンテロ 71		4							4			2			6
ライノ											1				1
ムンプス	1														
アデノ 2	1									1	1				2
アデノ 3	6	8	1				3	8	3	2	2	1			20
アデノ 4	1														
アデノ 8	2	26													
アデノ 11		1													
アデノ 19	7	5													
アデノ 37		2			1										1
アデノ 40 / 41		2						1					1		2
単純ヘルペス 1	1		1									1			2
口 夕	4	10		2	3	3								2	10
ノ 口	97	177	2				5						37	60	104
計	242	352	76	43	9	9	10	13	8	5	3	5	38	62	281

3 - 4 川崎市衛生研究所（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	咽頭結膜熱	感染性胃腸炎	手足口病	インフルエンザ様	流行性角結膜炎	無菌性髄膜炎	合計
インフルエンザ AH1				29			29
インフルエンザ AH3				94			94
インフルエンザ B				5			5
コクサッキー - A4			1				1
コクサッキー - A9			1				1
コクサッキー - A16			2				2
エコ - 18						1	1
エンテロ 71			6				6
ライノ						1	1
アデノ 2	2						2
アデノ 3	16		2		2		20
アデノ 37	1						1
アデノ 40 / 41		2					2
単純ヘルペス 1	1			1			2
口 夕		10					10
ノ 口		104					104
平成18年計	20	116	12	129	2	2	281

3 - 5 横須賀市健康安全科学センター（月別）

月 検出ウイルス	平成 16年	平成 17年	月												平成 18年	
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
インフルエンザ AH1					4											4
インフルエンザ AH3	23	15			5											5
インフルエンザ B		25														
アデノ（型未決定）	2															
ノ 口	6	10	1	1	15	2				1				25	104	149
計	31	50	1	1	24	2				1				25	104	158

3 - 5 横須賀市健康安全科学センター（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	感染性 胃腸炎	イン フル エン ザ 様	そ の 他	合 計
インフルエンザ AH1		4		4
インフルエンザ AH3		5		5
ノ 口	133		16	149
平成18年計	133	9	16	158

3 - 6 相模原市衛生試験所（月別）

月 検出ウイルス	平成 16年	平成 17年	月												平成 18年	
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
インフルエンザ AH1				1												1
インフルエンザ AH3	3	2		1												1
インフルエンザ B		4														
エコ - 18											1					1
アデノ 3		1		1								1				2
アデノ 4		1								1						1
アデノ 8		2														
アデノ 37	3	3	1													1
ノ 口	16	7	7	4							1			12	8	32
計	24	20	8	7						1	2	1		12	8	39

3 - 6 相模原市衛生試験所（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	イン フル エン ザ 様	流 行 性 角 結 膜 炎	無 菌 性 髄 膜 炎	そ の 他	合 計
インフルエンザ AH1	1				1
インフルエンザ AH3	1				1
エコ - 18			1		1
アデノ 3		2			2
アデノ 4		1			1
アデノ 37		1			1
ノ 口				32	32
平成18年計	2	4	1	32	39

3 - 7 藤沢市保健所（月別）

月 検出ウイルス	平成 16年	平成 17年	月												平成 18年	
			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
コクサッキー - B3												1			1	
コクサッキー - B5									1				2		3	
エコ - 18												1			1	
口　　タ					1										1	
ノ　　口													5	6	11	
計					1				1			2	2	5	6	17

3 - 7 藤沢市保健所（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	感染性 胃腸炎	無菌性 髄膜炎	合計
コクサッキー - B3		1	1
コクサッキー - B5		3	3
エコ - 18		1	1
口　　タ		1	1
ノ　　口	11		11
平成18年計	11	6	17

4 病原細菌検出状況表（ヒト由来、月別）

4 - 1 神奈川県

年・月 菌種・菌型	平成16年		平成17年		平成18年 月別												計		構成割合（%）										
	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者											
					うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者	うち海外渡航者												
腸管出血性大腸菌(EHEC)	118	103	3	2	3	8	6	3	15	22	27	11	34	1	135	23.5													
毒素産生性大腸菌(ETEC)	60	6	59	6	1	1	1	1	1	18	1	2	4	2	30	5.2													
組織浸人性大腸菌			1	2					1						3	0.5													
病原血型大腸菌(EPEC)	35	3	60	5	3	2	4	2	3	2	4	2	3	2	11	43	7.5												
その他・不明	6	3	2	1											1	0.2													
チフス菌	3	1	1	1	1	1	1	1	1				1	1	1	7	5	1.2											
パラチフス A菌	3	6	4						2	1					2	1	0.3												
サルモネラ O4群	15	4						2	1					1	4	0.7													
サルモネラ O7群	6	17	1	1	4			2	3	2	1			1	14	2.4													
サルモネラ O8群	5	2	1		1			1		2	1	1			6	1.0													
サルモネラ O9群	19	11			1			1			1	1	4		8	1.4													
サルモネラ	2	1								1					1	0.2													
サルモネラ			1																										
サルモネラ			1																										
サルモネラ	1													1		1	0.2												
エルシニア			1										1			1	0.2												
コレラ菌	6	1	3	3	1	1			1	1	1			1		4	2	0.7											
コレラ菌 non-O1 & O139	1		1																										
腸炎ピブリオ	55		58		1					2	39	4			46	8.0													
エロモナス	1																												
エロモナス	1										1					1	0.2												
エロモナス キャピエ			1																										
プレジモナス			1																										
カンピロバクター- ジェジュニ	155	182		2	6	12	5	6	12	13	9	14	19	7	1	106	18.4												
カンピロバクター- コリ	6		3																										
カンピロバクター-	15																												
黄色ブドウ球菌	14		20		1	3		1	4	3	1		2		3	18	3.1												
A型ウエルシユ菌	26		87			9				2				2	11	24	4.2												
セレウス菌	2		5	1		11		1		1					1	15	2.6												
赤痢菌	1	1	1	1					1		1	1	1			3	1	0.5											
赤痢菌ソフネ	8	4	9	5		1					4	2	3	1	1	1	12	5	2.1										
レンサ球菌群	28		27	5	4	5	3	8	15	4	1		1		2	48	8.3												
レンサ球菌			1																										
肺炎球菌								1		1						2	0.3												
ウルセランス										1						1	0.2												
レジオネラ			2					1	2				1			4	0.7												
結核菌						1		1								2	0.3												
淋菌			8							3	2	1				6	1.0												
マイコプラズマ	4		12		1				2	2	9	7	3	2	1	27	4.7												
計	536	16	691	23	22	1	23	51	1	21	1	36	3	50	1	56	114	4	64	1	51	2	52	1	35	1	575	16	100.0

4 - 2 神奈川県衛生研究所

年・月 菌種・菌型	平成16年	平成17年	平成18年採取月												計			
	総数	うち海外渡航者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者		
	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者		
腸管出血性大腸菌(EHEC)	25	20	1		3	4	5	1	3	6						23		
毒素原性大腸菌(ETEC)		3																
病原血清型大腸菌(EPEC)	5	21	4	3	1	2	2	2			1	1	1	10		27		
サルモネラ 04群	4								1							1		
サルモネラ 07群		1		4				1	1							6		
サルモネラ 08群	1				1											1		
サルモネラ 09群	2	4			1											1		
コレラ菌 non-01 & 0139	1																	
腸炎ビブリオ	26	31																
エロモナス キャビエ		1																
カンピロバクタ - ジェジュニ	20	38			7	2		4	2	2	1		2			20		
カンピロバクタ - コリ	4																	
黄色ブドウ球菌	5																	
A型ウエルシュ菌	23	60												1		1		
セレウス菌		1																
赤痢菌ソクネ	1											1	1		2	1		
レンサ球菌A群	8	9	4	4	5	3	6	11	2					1		36		
ウルセランス									1							1		
レジオネラ												1				1		
淋菌		8							3	2	1					6		
マイコプラズマ	4	12		1				2	2	9	7	3	2	1		27		
計	130	209	9	12	18	11	13	21	15	19	10	6	1	5	15	1	154	2

4 - 5 横須賀市健康安全科学センター

年・月 菌種・菌型	平成16年		平成17年		平成18年採取月												計			
	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者		
腸管出血性大腸菌(EHEC)	13		14							1				1					5	
毒素原性大腸菌(ETEC)	45	2	48	3									2	1	2				4	1
病原血清型大腸菌(EPEC)	13	2	12		1			1				2	1					1	7	
サルモネラ 04群	2																	1	1	
サルモネラ 07群	2		3																	
サルモネラ 08群																1				
サルモネラ 09群	2																			
サルモネラ			1																	
サルモネラ			1																	
サルモネラ	1																			
腸炎ピブリオ	4																			
エロモナス	1																			
カンピロバクタ - ジェジュニ								1												1
カンピロバクタ -	15																			
黄色ブドウ球菌	2				1		3		1	1			1					3		10
A型ウエルシュ菌	3						9					2						2	10	23
セレウス菌	2						11					1						1		13
赤痢菌ソノネ	1	1	1										1	1	1					2
結核菌							1		1											2
計	106	5	80	3	1	1	25	2	3	1	6	5	2	4	1	4	15		68	2

4 - 6 相模原市衛生試験所

年・月 菌種・菌型	平成16年		平成17年		平成18年採取月												計			
	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者		
腸管出血性大腸菌(EHEC)												1	3	2	2			1		9
毒素原性大腸菌(ETEC)												1			2					3
サルモネラ 09群	2														4					4
コレラ菌													1							1
腸炎ピブリオ	7																			
カンピロバクタ - ジェジュニ	18		6								1				5					6
カンピロバクタ - コリ	2		1																	
カンピロバクタ -																				
黄色ブドウ球菌			4							1	3									4
A型ウエルシュ菌			3																	
セレウス菌			4		1															1
レンサ球菌A群	13																			
計	42		18		1					1	5	4	3	13			1			28

4 - 7 藤沢市保健所

年・月 菌種・菌型	平成16年		平成17年		平成18年採取月												計				
	総数	うち海外渡航者	総数	うち海外渡航者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	うち海外渡航者			
腸管出血性大腸菌(EHEC)																			32		32
計																			32		32

資料3 予防接種実施状況

資料出所：平成18年度健康増進課事業実績

*は、厚生労働省「平成16年度地域保健・老人保健事業報告」の統計表に横浜市分データの掲載がない対象疾病

1 ジフテリア・百日せき・破傷風（1期、2期）*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
13				360,402	
14				356,081	
15			406,404	370,248	91.1
16			248,183	213,180	85.9
17			400,385	347,802	86.9
内訳	第1期		320,467	308,480	96.3
	第2期		79,918	39,322	49.2

2 急性灰白髄炎

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
13			163,048	166,398	102.1
14			163,270	160,663	98.4
15			166,461	176,184	105.8
16			164,408	176,184	107.2
17			159,658	152,075	95.3
内訳	第1回		80,016	76,737	95.9
	第2回		79,642	75,338	94.6

3 麻しん*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
13			82,732	87,541	105.8
14			82,608	83,311	100.9
15			82,562	83,219	100.8
16			50,241	47,498	94.5
17			81,545	75,972	93.2

4 風しん*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
13			158,305	76,102	48.1
14			177,780	86,766	48.8
15			131,082	94,257	71.9
16			52,593	51,484	97.9
17			84,245	105,863	125.7

5 日本脳炎*

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
	13		408,106	274,578	67.3
	14		405,341	277,095	68.4
	15		399,321	303,773	76.1
	16		233,709	174,345	74.6
	17		392,110	61,896	15.8
17年度 内訳		幼児初回接種 (1期初回第1回)	81,942	17,077	20.8
		幼児初回接種 (1期初回第2回)	81,374	14,526	17.9
		幼児 (1期追加)	80,984	13,446	16.6
		小学生 (2期)	76,503	11,057	14.5
		中学生 (3期)	71,307	5,790	8.1

6 インフルエンザ

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
	13		1,196,075 人	315,562 人	26.4 %
	14		1,254,544	423,682	33.8
	15		1,356,327	546,471	40.3
	16		1,423,230	614,617	43.2
	17		1,423,230	614,617	43.2
内訳		65歳以上	1,483,611	670,382	45.2
		予防接種法施行 令で定める60歳 以上65歳未満の 者	6,531	1,330	20.4

資料4 感染症関係機関

機 関 名	所 在 地	電 話
横浜市衛生局保健部感染症・難病対策課	横浜市中区港町1-1	045(671)2463
横浜市鶴見福祉保健センター	横浜市鶴見区鶴見中央3-20-1	045(510)1827
横浜市神奈川福祉保健センター	横浜市神奈川区広台太田町3-8	045(411)7138
横浜市西福祉保健センター	横浜市西区中央1-5-10	045(320)8439
横浜市中福祉保健センター	横浜市中区日本大通り35	045(224)8332
横浜市南福祉保健センター	横浜市南区花之木町3-48-1	045(743)8241
横浜市港南福祉保健センター	横浜市港南区港南中央通10-1	045(847)8436
横浜市保土ヶ谷福祉保健センター	横浜市保土ヶ谷区川辺町2-9	045(334)6344
横浜市旭福祉保健センター	横浜市旭区鶴ヶ峰1-4-12	045(954)6146
横浜市磯子福祉保健センター	横浜市磯子区磯子3-5-1	045(750)2444
横浜市金沢福祉保健センター	横浜市金沢区泥亀2-9-1	045(788)7840
横浜市港北福祉保健センター	横浜市港北区大豆戸町26-1	045(540)2362
横浜市緑福祉保健センター	横浜市緑区寺山町118	045(930)2357
横浜市青葉福祉保健センター	横浜市青葉区市ヶ尾町31-4	045(978)2438
横浜市都筑福祉保健センター	横浜市都筑区茅ヶ崎中央32-1	045(948)2350
横浜市戸塚福祉保健センター	横浜市戸塚区戸塚町157-3	045(866)8426
横浜市栄福祉保健センター	横浜市栄区桂町303-19	045(894)6964
横浜市泉福祉保健センター	横浜市泉区和泉町4636-2	045(800)2444
横浜市瀬谷福祉保健センター	横浜市瀬谷区二ツ橋町190	045(367)5744
横浜市衛生研究所	横浜市磯子区滝頭1-2-17	045(754)9800
川崎市健康福祉局保健医療部疾病対策課	川崎市川崎区宮本町 1	044(200)2441
川崎区役所保健福祉センター	川崎市川崎区東田町8	044(201)3223
幸区役所保健福祉センター	川崎市幸区戸手本町1-11-1	044(556)6681
中原区役所保健福祉センター	川崎市中原区小杉町3-245	044(744)3271
高津区役所保健福祉センター	川崎市高津区下作延2-8-1	044(861)3322
宮前区役所保健福祉センター	川崎市宮前区宮前平2-20-5	044(856)3270
多摩区役所保健福祉センター	川崎市多摩区登戸1775-1	044(935)3306
麻生区役所保健福祉センター	川崎市麻生区万福寺1-5-1	044(965)5163
川崎市衛生研究所	川崎市川崎区大島5-13-10	044(244)4985
横須賀市保健所	横須賀市西逸見町1-38-11	046(822)4300
横須賀市健康安全科学センター	横須賀市日の出町2-14	046(822)4057
相模原市保健所	相模原市富士見6-1-1	042(754)1111
相模原市衛生試験所	相模原市富士見1-3-41	042(769)8348
藤沢市保健所	藤沢市鵜沼2131番地の1	0466(50)3592

機 関 名	所 在 地	電 話
神奈川県保健福祉部健康増進課	横浜市中区日本大通1-1	045(210)4793
平塚市保健福祉事務所	平塚市豊原町6-21	0463(32)0130
鎌倉市保健福祉事務所	鎌倉市由比ガ浜2-16-13	0467(24)3900
茅ヶ崎保健福祉事務所	茅ヶ崎市茅ヶ崎1-8-7	0467(85)1171
大和保健福祉事務所	大和市中央1-5-26	046(261)2948
小田原保健福祉事務所	小田原市荻窪350-1	0465(32)8000
三崎保健福祉事務所	三浦市三崎町六合32	046(882)6811
秦野保健福祉事務所	秦野市曾屋2-9-9	0463(82)1428
厚木保健福祉事務所	厚木市水引2-3-1	046(224)1111
足柄上保健福祉事務所	足柄上郡開成町吉田島2489-2	0465(83)5111
津久井保健福祉事務所	津久井郡津久井町中野937-2	042(784)1111
神奈川県衛生研究所	茅ヶ崎市下町屋1-3-1	0467(83)4400
横浜検疫所	横浜市中区海岸通1-1	045(201)4458
東京検疫所川崎支所	川崎市川崎区東扇島6-10	044(277)1856
横浜検疫所横須賀出張所	横須賀市田浦港町1-49	046(861)6650
横浜検疫所三崎出張所	三浦市向ヶ崎8-48	046(881)3805
輸入食品・検疫検査センター	横浜市金沢区長浜107-8	045(701)9502
横浜市立市民病院	横浜市保土ヶ谷区岡沢町56	045(331)1961
川崎市立川崎病院	川崎市川崎区新川通12-1	044(233)5521
横須賀市立市民病院	神奈川県横須賀市長坂1-3-2	046(856)3136
藤沢市民病院	藤沢市藤沢2-6-1	0466(25)3111
平塚市民病院	神奈川県平塚市南原1-19-1	0463(32)0015
相模原協同病院	相模原市橋本2-8-18	042(772)4291
厚木市立病院	厚木市水引1-16-36	046(221)1570
神奈川県足柄上病院	神奈川県足柄上郡松田町松田惣領866-1	0465(83)0351



神奈川県衛生研究所

茅ヶ崎市下町屋 1 3 1

〒253-0087 電話 (0467) 83-4400 (代表)